殿〇嘉矩。森和泉守殿〇長直。神尾右衞門殿・芝井町・宇田川町・神明町・濱松町・金杉町・本芝三丁目・新網新錢座・しゆれんじ・正德寺・地源寺迄燒申ゟ。未刻にとまり申ゟ。

——月堂見聞集〇萬年記略。

廿四日〇享保八年十月。晴。

一、卯の下刻愛宕下酒井右京殿屋敷出火、芝金杉燒失。

——金地院記錄

二十四日〇享保八年十月。江戸愛宕下火アリ、北風烈シ、公〇伊達。自ラ出テ指揮ス。

——東藩史稿

百弌錄・讀談海・年代炎上鑑ノ類、之ニ關シテ記ス所有レトモ、今抄出セス。

〔參考〕柳營日錄云フ、

今度芝田町。名主莊次郎、怪敷者ヲ召捕、組合之名主一同ニ町奉行所へ召連罷出、被遂御詮議處ニ、ヲヂ井五兵衞ト申者ニテ、十月二十四日〇享保八年。愛宕下酒井右京亮屋敷ヨリ出火之節、增上寺門前町屋トウフ屋ノ屋根并新網町春日之近所、金杉中町、三ヶ所へ繼火致ゟ處、何モ燒立、火元之火ト一ツニ成、大火ニ及ヒゟ旨、白狀仕、莊次郎ニ爲御褒美銀三十枚被下置ゟ。自今怪敷者ゟハヽ、召捕可參ゟ。假ソコナヒ之分ハ、其者之不調法ニ不罷成ゟ樣ニ可被仰付旨、御フレ有之、右之趣ヲ書付、江戸町中木戸木戸ニ張置之。

十二月五日火災

四、十二月五日火災ハ、

五日〇享保八年十二月。

一、未刻、牛込赤城明神下西天神町組屋敷ゟ出火、牛込御門外市谷田町二丁目迄、土手四番町・三番町・六番町・御厩谷・二番町・壹番町・飯田町・上壹番町御堀端迄燒、酉之刻鎭。類火之覺。御番方ニゐハ、大御番六十人、御小性組四十一人、御書院番三十一人、小普請支配百四十壹人、御留守居支配三十人、新御番十五人、小十人組十人。役人ニゐ者、御先手頭三人、御徒頭四人、御鑓奉行壹人、御持筒頭八人、新御番頭一人、御使番小十人頭三人、御納戸二人。右燒失ス。

——柳營日次記

十二月五日〇享保八年。未刻大北風、江戸牛込天神町より出火、同心町・赤城明神社・中門前不殘、一ヶ谷御堀ばた通り、大手四番町へうつり、田安御門の外御堀ばた、麴町一丁目・一ヶ谷眞木棚燒、八幡近所少し殘り、堀の末より殘り、飯田町上り口少殘り、其外は聢と燒とまり知れ不申ゟ。大名方御屋敷、旗本衆御屋敷大分燒申ゟ。火は暮六ツ時にとまりゟ。一說に牛込元天龍寺前、赤城明神近所よ

り出火、西北大風にてかぐら坂より西〻肴店、簞笥町〻不レ殘、田町中程二三丁、番町へ移り裏四番町・表四番町・三番町通り、六番町御馬屋谷、田安御門外、飯田町臺限り、麴町一丁目二丁目裏切、御城は風下にいへども、北の御城限にて無二御別條一、稻葉丹波守殿・同伊勢守殿・松平左兵衛殿・永井播磨守殿、此外御代名方・旗本衆御類燒大分の事にいへ。

一、同年〇享保八年。十二月五日未ノ刻、牛込赤城明神下西天神町神尾左兵衛組屋敷ゟ出火、西北大風にて、榎木町・赤城邊、寺町・わら店・神樂坂上、若宮小路、諏訪安藝守〇忠虎。邊不レ殘、逢坂上下・富士見邊、御徒町・拂方町、北は神樂坂上本多因幡守ゟ下通り殘り、南は水野土佐守ゟ左内坂之方、同坂下御堀端壹町程殘ル。元火榎木町邊迄燒いへ。内御堀を越、四番丁・三番丁・六番丁・壹番丁・御厩谷・五番丁・半藏御門外。東は四番丁角北條安房守ゟ燒ケ、三番町ハ打越左大夫邊ゟ燒、六番町ハ、東ハ御堀端まで、西ハ土手四番町曲場角邊ゟ跡火ニて燒ル。安部式部前後不レ殘、須田三十郎近邊、北條安房守屋敷迄不レ殘。表四番丁ハ皆燒。三番丁ハ、市ケ谷御門内之方三軒ヅヽ、兩側殘り、中ハ皆燒失、六番町ハ、法眼坂通りゟ東燒失、片側殘り、大久保源右衞門ゟ長田十之丞表計り少し燒、御厩谷不レ殘。表二番町

ハ、小笠原源四郎殘り、夫ゟ東留側燒ル。裏二番町ハ、杉浦彌一郎より西之方殘り、彌一郎東側ゟ谷上坂口迄、飯田惣左衞門邊皆燒。夫ゟ西風强く成りて、筋違ニ五番町坂之上御堀端迄燒、地獄谷之町者殘ル。幕前迄燒ル。初メハ四番丁三番丁少しニて、六番町御堀端に燒いへ。内ニ、風强く成り、六番町・三番町多燒ケ、武藏八郎右衞門青木與左衞門邊燒、度々西風ニ成り、又北ニ成いへ間、殘りいへ處も又燒いへ所も有レ之也。

百弐錄續談海其他、之ヲ省略ス。

五、十二月十九日火災　ハ、

十八日〇享保八年十二月。

一、夜子刻、牛込山伏町ゟ出火、市ケ谷拂方町邊、尾張殿屋敷之脇土取場迄類火、翌朝鎭。

——柳營日次記

同月〇享保八年十二月。十八日北風、夜八ツ時牛込山伏町より出火、七ツ時過に加賀屋しき土取場ニて相鎭る。火元山伏町御用地ニ被二召上一、代地ハ下谷幡隨院近所ニ被レ下レ之。其跡地後年武士拜領地となるニ。

〔參考〕續談海ニ、

——續談海

朝都時代ノ火災

一、當年盜賊火方改加役山川安左衞門・安部式部二組ニ而相捕ハ火附數多、其内大方非人より出申ハニ付、非人不ㇾ殘髮をきりざん切りニ被ㇾ申ハ。右火罪人日本橋・兩國橋・筋違御門外、四ッ谷御門外、赤坂御門外、五ヶ所ニ而相晒し、捨札被ㇾ立置、その後品川・淺草兩御仕置場ニ而被ㇾ相行ハ。所謂當卯翌辰年巳年ニ至り百餘人なり。〇下略。

享保九年火災

正月晦日火災

二月十五日火災

閏四月五日火災

享保九年火災事蹟

正日晦日火災

九年甲辰〇享保〇紀元二三八四年。正月晦日乙巳〇乙巳、三正綜覽。山下門外加賀町出火シ、芝口海手〇市内芝區。マデ延燒ス。芝口門〇市内京橋區。濱町〇市内京橋區。一部燒失スル、此時ニ在リ。〇柳營日次記。承寬襍錄。枯木集。續談海。月堂見聞集。伊達治家記錄。年代炎上鑑。續日本王代一覽。二月十五日庚申〇享保九年(紀元二三八四年)〇庚申、三正綜覽。淺草新寺町〇市内淺草區。火有リ、延燒シテ本所〇市内本所區。ニ至ル。〇柳營日次記。御徒方萬年記。月堂見聞集。續談海。閏四月五日戊寅〇享保九年(紀元二三八四年)〇戊寅、三正綜覽。小日向茗荷谷〇市内小石川區。火有リ、巢鴨〇市内小石川區。武藏國北豐島郡。ニ延燒ス。〇柳營日次記。萬年記。續談海。年代炎上鑑。

享保九年火災　重ナル者三回有リ。

一、正月晦日火災　ハ、

晦日〇享保九年正月。

一、午刻、山下御門外加賀町ゟ出火、山王町邊、三十間堀・木挽町火消屋敷朽木主膳役宅、芝居、芝口近邊、濱御殿之内御茶屋、芝口松平陸奥守海手ニ出、燒失ス。

三日〇享保九年二月。

一、去月晦日芝筋出火ニ付、芝口御門燒失ニ付、當分往來無ㇾ之旨、能登守申ㇾ達之ㇾ。

——柳營日次記

濱御殿之内も燒失。

正月晦日〇享保九年。午の刻、江戸加賀町中程より出火。夫より南鍋町・山下町・數寄屋町三丁目四丁目、南材木町・山城河岸・八官町表裏町、夫より大橋山王町、大坂町・瀧山町・宗十郎町・丸屋町・尾張町一丁目二丁目、竹川町・出雲町・三十間堀五丁目、夫より見附迄、芝口御見附不ㇾ殘燒。芝口町一丁目より三丁目迄、松平肥後守殿〇正容。表門は殘り内はやけ、松平陸奥守殿〇伊達吉村。表門は殘り内はやけ、脇坂淡路守殿〇安清。片山三十郎殿、木挽町五丁目鹽留橋不ㇾ殘やけ、御火消屋敷不ㇾ殘、松平周防守殿〇松井康豐。中屋敷、仙石因幡守殿〇政房。奥平大膳大夫殿〇昌春。右不ㇾ殘やけ、御濱御殿の方へやけ申ハ。木挽町芝居やけ、未だ火留り不ㇾ申ハ。正月晦日酉刻出飛脚〇中略。

覇都時代ノ火災

今度江戸御濱御殿御門芝口御見付類燒に付、木挽町幅二町に長さ拾町余廣小路に可レ被レ成レ由被二仰出一レ、依レ之此邊の者ども迷惑仕レ由、御訴訟申上レ、定而土藏作にて御赦免可レ被レ成レ歟と噂御座レ。此出火類燒の樣子少々相違在レ之レ故、又々一說左の如し。

正月晦日晝九ツ時、芝加賀町中程より出火、折節北風にてすきや町少し殘り、すきや川岸山下御門前やけ、四丁目は殘り、八官町不レ殘、すきや橋すきや町迄燒、難波橋土手迄燒、南鍋町不レ殘、尾張町燒、芝御番所御見付やけ。木挽町不レ殘、木挽町不レ殘、尾張町燒、芝御番所御見付やけ。夫より卅間堀五丁目、鐵炮洲川岸迄やけ、御濱御殿門迄燒、芝口一丁目より二丁目三丁目迄、源介町、蠟月町迄燒申レ。御屋敷方御類燒分は、朽木大膳殿、仙石因幡守殿、松平周防守殿、奥平大膳大夫殿、松平陸奥守殿、表御門殘り申レ。鐵炮洲中島尾州樣御藏屋敷やけ、妻木主水殿、赤間作兵衞殿、川出雲八殿、大島織部殿、稻葉丹後守下屋敷、松平淡路守殿御屋敷迄燒申レ。——月堂見聞集

晦日〇享保九年正月。江戸上邸及ヒ木挽町邸延燒ス、本邸ニ避ク。——東藩史稿

柳營日錄、承寬樣錄、枯木集、伊達治家記錄、續談海ノ類、略ス。

〔附記〕柳營日次記ニ、

二月七日（〇享保九年。）夜、牛込揚場町邊ヨリ出火、築土近所邊迄燒ル。

二、二月十五日火災 ハ、

十五日〇享保九年二月。

一、未刻、淺草本願寺堀際ヨリ出火、黒船町、本所石原ニ飛、割下水ニ至燒失ス。西北風烈シ。——柳營日次記

同〇享保九年。二月十五日、北風强、晝八ツ時淺草新堀ハタ新寺町行安寺門前町屋より出火、小上ケ町より本所ニ飛ひ、深川高橋近所ニ留ル鎭ル。——續談海

二月十五日〇享保九年。未刻、江戸新寺町阿部川町より出火、淺草新堀堀田出羽守殿〇正附。御屋敷、すわ町、黒舟町、小あみ町、御藏屋敷、寺々多く類燒す。夫より御馬屋河岸へ火飛、本所松平右京大夫殿、松浦彈正殿御やしき燒。夫より二ツ目三ツ目へ通り貫け、西北大風にて本所扇や橋へ燒通りレ。凡二里半程。——月堂見聞集

二月十七日〇享保九年。

一、二月十七日御番所日帳之內、

松平能登守殿御目付稻葉多宮ニ被レ仰レ由ニて、昨日多宮、小出助四郎ニ被二申都時代ノ火災

聞ゐる者、火事ニ付、御目付御使番其御用有之、方角無構罷出ゐる事ニゐる。其外之面々ハ、火事之御用無之所、或御供番抔ニて罷出ゐる面々、昨日も相見ゐる、昨日之火事者、淺草ゟ本所ニ燒、御城御氣遣曾ゐ御用無之ゐる、然處罷出ゐる儀ハ有之間鋪事ニゐる、風強ゐる節者、御用無之ニ罷出申ゐよりハ、在宿仕、火之元等申付ゐる儀尤ニゐる、騒鋪もゐる間、心得可召之ゐる、昨日も若き面々などハ餘程相見ゐる。御城氣遣無之、火事ニハ右之趣を心得ゐる樣ニ、無急度多宮ニ被仰ゐる由ニ御座ゐる。組々にも頭々心得ニて申聞ゐる樣ニ、是又多宮被申ゐる由、助四郎殿被申ゐる。此趣部屋張紙も助四郎殿被致ゐる得共、早々被成御聞ゐるため如此御座ゐる。尤御組々にも可被仰渡と存ゐる。

右之通、日帳ニ記有之。

一、二月廿日

御書院番仙石因幡守組與頭
大岡忠四郎
寄合
堀三六郎
小十人組山岡五郎作組
八木新三郎
有馬內膳支配
八木三郎四郎

寄合
松平三郎助
御小姓組高木伊勢守組
酒井主水
有馬內膳支配
日根野藤助

右者、去十五日淺草本所出火之節精出ゐる付、御言葉之御褒美、於御右筆部屋御縁頬、若年寄衆御出座、松平能登守殿以御書付被仰渡之。

——御徒方萬年記

〔附記〕月堂見聞集ニ據レハ、

同(〇享保九年二月。)十六日九ツ時、江戸淺草砂利場より出火、聖天のうしろ船宿不殘燒け、今戸ノ出邊迄燒貫申ゐる。

同(〇享保九年四月十六日。)江戸溜池の側眞田伊豆守殿御屋敷より出火、隣の屋敷類燒、合して御屋敷二ヶ所。

三、閏四月五日火災　八、

五日〇享保九年閏四月。

未刻過、小日向茗荷谷出火、巢鴨迄燒失。

——柳營日次記

閏四月五日〇享保九年。小石川茗荷谷德恩寺出火。南風類炎多。松平大學頭之宅災。

——萬年記

辰閏四月七日

一、茗荷谷德雲守ゟ之出火燒跡繪圖一枚、無消口ニ安藤對馬守殿〇信友。ニ上ル。

有馬兵庫頭殿〇氏倫。にも一枚上ル。右向後繪圖差上ゐハヽ、消口附可申上ゐる樣

附記

享保九年二月十六日後火災

閏四月五日火災

被仰ル。

續談海「閏四月五日、南風、晝八時、小日向德本寺より出火、大坂松平大學頭賴貞上屋敷ニ移ル鎭ル。」ニ作ル。

〔附記〕享保日錄ニ、

閏四月六日（〇享保九年）丑刻、四ツ谷簞笥町組屋鋪側町屋ヨリ出火、南風、本村方也ヤヽ、燒、北風ニ成、傳馬町二丁目迄燒、翌朝鎭ル。

十年乙巳〇享保〇紀元二三八五年。二月四日癸未〇癸未、三正綜覽。青山久保町〇市內赤坂區。ニ至ル。〇柳營日次記。月堂見聞集。承寬裸錄。土屋筆記。續談海。續日本王代一覽。三月朔日己亥〇享享十年（紀元二三八五年）〇己亥、三正綜覽。下谷池端〇市內下谷區。火有リ、神田〇市內神田區。ニ延燒ス。〇柳營日次記。年代炎上鑑。

享保十年火災事蹟

二月十四日火災

享保十年火災　重ナル火災二回有リ。

一、二月十四日大火　其顚末ハ、

二月十四日〇享保十年。未刻、靑山久保町ヨリ出火、千駄ヶ谷權田原・鮫ヶ橋寺町・四ツ谷大番町・大木戶限リ、四ツ谷仲町喰違外、四ツ谷御門外、本村市ヶ谷田町三丁目迄、尾張中納言殿〇德川上屋敷繼友。鋪、市谷八幡社加賀屋敷邊、大久保・川田ヶ窪・原町・山伏町・高田下町・早稻田・大塚音羽町・牛込・小日向・赤坂・津久戶・傳通院前・水戶宰相〇德川宗堯。上屋敷後牛天神・餌差町・丸山・小石川白山・本鄕追分・駒込・谷中迄燒、戌刻鎭ル。南西風已下刻甚吹。

二月十五日

御屏風一双金二萬兩

右、以二上使水野和泉守一、〇忠之。昨十四日御屋鋪類燒ニ付被レ遣レ之。御簾中樣ニ御槍重被レ下レ之。

——柳營日次記

二月十四日十〇享保十年。午刻、江戶靑山久保町出火、脇坂豐之助殿〇興。安松平伊賀守殿〇忠愛。松平左近將監殿〇邑。乘駒井左京殿下屋敷、其外組屋敷共不レ殘、紀州樣〇德川宗直。御下屋敷少計燒申ル、鮫ヶ橋不レ殘、權田原組屋敷、花房和泉守殿長井播磨守殿下屋敷、永井飛驒守殿花房和泉守殿長井長之助殿岡部美濃守殿何れも下屋敷、中殿町・馬殿町・堺町・傳馬町・尾州樣向屋敷、四ツ谷竹町・七軒町組屋敷不レ殘、松平攝津守殿〇義孝。南馬町、寺々不レ殘、四ツ谷大木戶邊迄、本村松平飛驒守殿、尾州樣五段上屋敷、御殿不レ殘、一ヶ谷八幡宮・組屋敷不レ殘、水戶內膳殿、左內坂・坂

田町不レ殘、水野大炊殿○實。利大番町・拂方町・御簞笥町・かるこ坂・牛込邊神樂坂・若宮八幡・諏訪安藝守殿○虎。忠下屋敷、北屋敷、組屋敷共に不レ殘、酒井讃岐守殿○章。忠下屋敷、松平刑部殿・赤城明神・筑後明神・小日向馬場不レ殘、水道町・かいたい町・古川町・久世隱岐守殿○之。暉安藤對馬守殿○友。信松平大學殿○貞。賴同播磨守殿○明。賴同彈正殿・水野壹岐守殿○定。忠井上讃岐守殿○晴。正傳通院寺中不レ殘、本堂は別條無レ之、金剛寺坂寺々不レ殘、六尺町・白壁町・牛天神・火消屋敷・松平志摩守殿○貞。直屋敷、其外組屋敷不レ殘、とび坂無二別條一、上るさし町・下るさし町・松平大藏殿下屋敷、水戸殿○徳川宗堯。少燒、松平紀伊守殿○信岑。下屋敷、巢鴨土井大炊殿○實。利同豐前守殿、同淡路守殿○利庸。酒井雅樂頭殿○親本。駒込竹町寺々不レ殘、願行寺・本郷追分與力同心組屋敷不レ殘、丸山阿部伊勢守殿○正福。本多中務殿○忠良。下屋敷、松平備中守殿御屋敷計殘り申ㇾ。せんだ木組屋敷、寺々不レ殘、松平備前守殿、酒井越前守殿○忠篤。日光御門跡屋敷。夫より根津御門前・寺々・組屋敷、谷中へ燒貫、寺々不レ殘、堀長門守殿・松平采女殿○定基。無二別條一。夫より三崎百姓家迄不レ殘燒申ㇾ。右之外屋敷方大分の事にㇾ。凡屋敷方數五六千軒程、右幅二十町に長さ三里程之由にㇾ。

三月四日、江戸御仕置者、大岡越前守殿御掛リ。

品川非人松右衞門手下、芝二本榎妙徳寺地內長右衞門抱非人、欠落。

此者所々ニテ致レ盜ㇾ。

三五郎事　竹松

當二月十四日○享保十年。晝時風出ㇾニ付、青山善光寺前餅屋裏へ投火イタシㇾ得共、モヘ立不レ申ㇾ故、夫ヨリ同所久保町横町荒物屋裏へ參、明地ノ向雪隱ニテ火道具ヲ拵、同所表通持法寺大門へ入、其脇門番小屋ノカケヨリ町家ノヤネへ投火イタシㇾ處、風ツヨク早速モヘ立、大火ニ成申ㇾ間、右近所町屋ニテ、木綿袷二ツ盜取、赤坂之方へ逃去リ、錢四百五十文ニ賣拂ㇾ。右科ニヨッテ、町中引廻シ、久保町ニテ一日サラシㇾ上、於二品川一火アフリニ行フ者也。

右書付、三月四日朝四ツ時日本橋へ出申ㇾ。

二月十四日○享保十年。江戸火事

午下刻、青山久保町持法寺法華宗門前町家ゟ出火、南風強、青山宿之內甲賀町邊ニ吹出、風勢段々烈ク、紀州樣御屋鋪大方不レ殘、赤坂御居屋鋪御屋形無二御別條一、御家ゟ西就ノ方ノ御長屋皆燒ル由。直ニ四谷堀端へ出、牛込かるこ坂迄燒ル。

一、西ハ内藤宿（但白石ハ殘ル。近所迄まハる由。）大番町西東共ニ、扨寺町南北共ニ、扨寺町南北共ニ、北原・大久保・市谷ハ尾州樣御屋鋪一宇モ不ㇾ殘、加賀屋鋪本村谷町四丁目（但、大久保ニて松平采女樣ハ殘ルよし。）四谷ゟ市谷・牛込之内、組屋鋪多ク在ㇾ之處、大方燒ル。御先手卅五組在ㇾ之内、廿四組燒ケ申ハ。

一、牛込ニる市谷八幡ゟ段々火廣ク成、富士見坂馬場・火之番町・淨瑠璃坂ノ上水野土佐守御歩行町。（但中通りハ殘ル。）

一、寺町通リ猿寺ヲ初メ、山伏町・酒井讃岐守殿中屋鋪、松平刑部少輔殿上屋鋪、早稻田通リ不ㇾ殘、北ハ目白・關口町迄。

一、中山備前守屋鋪、赤木・筑戸兩社、小日向邊一向（圓カ）、水道町邊ゟ諏訪町邊、小石川御屋敷外、牛天神西かわ不ㇾ殘、東かわハ、不明御門之外旗本屋鋪二軒燒ル。

一、服部坂・茗荷谷・大塚邊ゟ、東ハ御守殿御門前迄、此間金剛寺ゟ西ノ方寺共ニ不ㇾ殘、但山野邊主水正燒（殘カ）ル。

一、傳通院本堂計殘ル。御簞笥町・日護（マヽ）町・氷川ノ下迄、松平播摩守樣御屋鋪燒ル。

一、傳通院之火、菊坂中程より燒おろし、源覺寺・善雄寺幷新道通之町屋過半。夫ゟ嫁ケ橋・姑橋の間、一色殿より小石川筑地馬場邊、武士屋鋪不ㇾ殘、白山御殿下通り、此邊むら〳〵燒ル。

一、松平備中守殿屋敷、戸崎町、別條無ㇾ之。

一、小石川蓮花寺ゟ横谷町・白山社・淨心寺ニ吹上、駒込追分ニる留る。駒込本通にてうなき繩手より北へ〇所迄、大原町・傾城ケ久保・巣鴨にてハ土井殿下屋鋪、其外町屋〳〵。

一、駒込表御門前町屋邊燒ル。

一、小笠原喜三郎殿中やしき、根津裏門より末社・水茶屋・別當の居所一ヶ寺、但社家ハ殘ル。

一、駒込寺町の寺不ㇾ殘、千駄木林・本根津・三崎兩かわ組屋鋪ゟ、七面通寺町屋、七面社不ㇾ殘、新堀・道灌山迄燒るよし。田端村百姓家所々。

右四谷にて廿二三町口おしへ（マヽ）、先年九月六日の火事よりはゞ廣く在ㇾ之ハ。風下之分たまらす燒、夜四ツ時過鎮申ハ。

一、火消屋鋪・佐内坂上・傳通院前と二屋鋪燒申ハ。以上。

——土屋筆記（〇編年史料收。）

享保十年二月十四日九ツ半時過、青山宿之内出火、南風烈ク、四ツ谷・牛込・小日

向小石川ヨリ、簑輪邊燒行、大火ナリ。尾陽市谷、同四ツ谷馬場下御屋鋪燒失、其夜未明迄火鎭。

御書院	七十六軒	
大御番	二百八軒	
小十人	八十六軒	
大名屋鋪。寺社。町家		〆八百八十八軒。
御小姓組	三十三軒	
新御番	四十五軒	
小普請	四百十軒	

——承寬襍錄

十年乙巳（享保。）二月十四日、青山宿失失、延燒市買第。翌日有德公（德川吉宗。）使水野和泉守源忠之訪問、且賜黃金二萬兩。（德川繼友譜。）

——源流綜貫

二月十四日（享保十年。）午之下刻、青山久保町ヶ出火、傳通院邊、大塚・谷中邊迄類燒。依之壹手被召連、御中邸に御出馬之處、本道燒中ニ付、青山通被爲入、亥刻鎭火。尾張樣御類燒ニ付、翌十五日上使水野和泉守殿を以金子貳萬兩、御簾中樣に御屛風一双御槍重一組御拜領。

——政鄰記

十四日（享保十年二月。）晴。

一、午半刻、青山久保町ヶ出火、西南烈風、四谷市谷小石川迄燒失、入夜火止。

一、別條無之旨届之。

——青山龍岩寺

一、類燒之由届之。

後中內記・續談海・年代炎上鑑等略ス。兼香公記（編年史料收。）ニハ、此時ノ燒失地ヲ横十四五町長二里半ト註ス。

〔參考〕年代炎上鑑ニ、

貞雄（瀨名。）敷。私ニ曰、四ツ谷天王之社地に有之稻荷を信仰せし五兵衞といふ町人、右之近邊に住居しけるが、彼五兵衞、此二月十四日（享保十年。）の火災を、前年ヶ氏子中に觸て、諸道具を、此火災に遁るゝ方角を教へて取のけさせしも也。予七歲の時にて、此事をよく覺へたり。予か方にても、此日はいなり五兵衞か告し日なりとて、朝より諸具を藏に仕舞て火災を待し也。

二、三月朔日火災　其顚末ハ、

二月廿九日（享保十年。）夜丑刻過、下谷池ノ端板倉賴母宅ヶ出火、神田明神下迄燒。

——柳營日次記

去二月十九日（享保十年。）亥下刻、下谷池端藥屋の邊、板倉隱岐守殿（讚岐守信敷。）御屋敷より出火、湯島天神坂下邊燒、石川主殿頭殿（總慶。）建部丹波守殿（政周。）大關信

濃守殿○恒。増戸田右近殿○房。氏御類燒、此外に屋敷方在之候、同夜九ツ過に火留る。凡幅半町に長さ六町程、北西風吹申候。此間所々火事沙汰のみに御座候。

——月堂見聞集

〔附記〕

同（○享保十一年四月。）十一日巳の下刻、江戸芝の金杉新あみ町東側より出火、加藤和泉守殿・水戸讃岐守殿・大久保淡路守殿御屋敷御類燒不レ殘、凡四町計燒失。同夜亥刻、牛込加賀屋敷近所より出火、南大風にて、小日向へ燒出し、末のとまり知不レ申候。町數九町程。（○年代炎上鑑ニハ、「同夜原町ヶ出火、榎町迄燒失」ト見エタリ。）

——月堂見聞集

一、同年（○享保十一年。）六月二十三日夜子ノ刻、南風少し。表二番町淺井源左衞門宅より出火、小長谷五兵衞・佐橋十左衞門・石野百助四人類燒、飛火にて、裏六番町高木三大夫本屋計燒、長屋無二別條一、酉の刻前鎭ル。

——年代炎上鑑

十六日（○享保十一年十一月。）夜、白金瑞聖寺火災。

——萬年記

十二年丁未○享保十二年（紀元二三八七年。）正月晦日丁巳○丁巳、三正綜覽。本所石原○市内本所區。出火シ、割下水通四ツ目○市内本所區。マテ燒ク。○柳營日次記。月堂見聞集。續談海。年代炎上鑑。十二月六日丁亥○享保十二年（紀元二三八七年。）○丁亥、三正綜覽。表二番町○市内麹町區。火有リ、傍近ヲ延燒ス。○柳

附記
享保十一年火災
享保十二年火災
正月晦日火災
十二月六日火災

十二月十日火災
享保十二年火災事蹟
正月晦日火災

營日次記。柳營日錄。伊達治家記錄。續談海。

ヒ出火シ、延燒芝○市内芝區。ニ達ス。○柳營日次記。柳營日錄。月堂見聞集。續談海。伊達治家記錄。兼香公記。

享保十二年火災　重ナル火災三回也。

一、正月晦日火災　左ノ如シ。

晦日　○享保十二年正月。

一、未刻過より本所石原出火、割下水通り四ツ目先迄燒失す。

——柳營日次記

去る正月三十日○享保十二年。江戸本所梅堀馬場町より出火、本所三ツ目四ツ目は燒貫、深川の木場海際迄燒出申候。風甚敷故、家之有次第は燒申候。委敷は跡より可二申入一候。六町ニ一里餘。

——月堂見聞集

正月晦日○享保十二年。晴。

西北風強、晝八時、本所中ノ郷より出火、深川まで燒、暮六ツ時鎭ル。

——續談海

享保撰要類集、本所撞鐘堂建候儀ニ付、申上候書付中、「本所入江町撞鐘堂、當正月

晦日〇享保十二年。火事ニ致ニ類焼一ル。ト見ユ。

〔附記〕

後の正月二日(〇享保十二年。)夜九ツ時、淺草門前より出火いたし、二町餘も焼失仕り、八ツ時に火收る、夜明けかたより大雷。 ——月堂見聞集

二月四日(〇享保十二年。)今曉、糀町一丁目二丁目裏ゟ出火、翌朝鎮。(〇月堂見聞集ニハ、二月三日朝、江戸糀町一町四方焼失ト」ニ作ル。) ——柳營日次記

二、十二月六日火災　左ノ如シ。

六日〇享保十二年。

未刻、表二番町長田伴助地借浪人植田用助家ゟ出火、善國寺谷・麹町六七丁目通・清水谷・貞坂邊・赤坂御門内武士屋敷焼失、夜入鎮。 ——柳營日次記

十二月六日丁亥〇享保十二年。未刻、表二番町長田半助殿邸ヨリ火起リ、麹町ヨリ赤坂邊ニ至リ、縦十一丁横一丁半許延焼、増上寺へ人數ヲ出サル。紀伊中納言宗直卿・土井淡路守殿〇利庸。稲葉式部殿・井上三次郎殿邸近所ニ由テ、各以ニ使者一尋問、淡路守殿邸延焼ニ因テ、食百口以ニ使者一贈ラル。其餘延焼、且近所ノ識者へ使者等ヲ以テ訪尋。 ——伊達治家記錄

附記　享保十二年閏正月二月火災

十二月六日火災

年代炎上鑑ニハ、「同年十〇享保十二年。十二月六日未ノ刻、表二番町麹町六丁目之通り之角長田半助地借り浪人植田用助宅ゟ出火、火元少しにて消直に向鈴木市兵衛屋敷ニ火移り、高力平八郎(鑓之師範。)覧新太郎・佐野源藏(初鹿野傳右衛門・赤井七大夫等類焼、善國寺、都て六丁目谷不レ殘、糀町六丁目・五丁目・阿部大學・稲垣志摩守焼、紀伊殿御屋敷殘ル。貞坂下ゟ山王之社家之方、溜池御堀限り焼、暮時鎮ル。」ト見ユ。續談海ニハ、「糀町稲垣和泉守・松平出羽守半分、井伊伊豫守も類火」ト有リ。三、十二月十日火災　左ノ如シ。

十日〇享保十二年十二月。

一、申刻、表二番町久保伊右衛門宅より出火、糀町四丁目・五町目・三丁目迄、山本町・肴町・平川町・平川天神社貞坂・元山王邊・永田町・霞ヶ關・虎御門内久保町・愛宕下・増上寺裏門通・神明前海手迄焼失、夜半頃鎮。 ——柳營日次記

十二月十日辛卯〇享保十二年。申刻、表二番丁久保伊右衛門殿邸ヨリ火起リ、烈風大火ト爲リ、麹町二丁目ヨリ六丁目溜池ニ至リ、横五丁縦十八町許、佐久間丁ヨリ愛宕下・字田川丁・金杉表三丁目ニ至リ、横二丁縦十七丁許延焼。増上寺へ先手ヲ遣サレ、酉刻出馬、後門内ニ馬ヲ駐ラレ、所々防火指揮セラル。嗣君富姫御

覇都時代ノ火災

方ヨリ以二使者一候間、深更ニ至リ院中ニ滞留セラルニ因テ、嗣君ヨリ使者成田權内ヲ以テ提重酒進上、三島谷坊中延燒ニ由テ、指揮防カシメラレ、宿坊ニ入セラル。行廚ヲ上ル。天方主馬殿（使番）入來接見、北御方ヨリ以二使者一候問、和姫御方ヨリ以二使者一行廚進上、厚君御方ヘ以二徒使一尋問セラル。近習・小姓組・右筆・茶道等ニ燒飯ヲ賜ヒ、小姓組・右筆・茶道定供ニ勤勞ノ旨御辭アリ。於二方丈一黒田豐前守殿直邦朝臣（寺社奉行。資矩同上。）ヘ接見。方丈前ニ少ラク馬ヲ立ラレ、火漸滅ルニ由テ人數ヲ揚ラレ。子刻歸第。松平伊賀守殿ヘ以二使者一（公義使。）告ラル。堀川廣益朝臣邸ヘ平井長大夫、東禪寺ヘ使者番各人數副之遣ハサル。廣益朝臣ノ邸延燒ニ由テ、愛宕下邸ヘ入來セラルヘキ旨、以二使者一告ラル。廣益朝臣入來、本邸火ヲ避ラル旨ヲ告ラル。稻葉式部殿邸延燒ニ由テ、行廚ヲ遣サル。松平吉泰朝臣下邸其外延燒、且近所識者ヘ訊問セラル。嗣君ヘ紀伊中納言宗直卿ヨリ火災近邊ニ因テ使者到來。

十二月十一日壬辰、昨日火災增上寺境内北方惣圍板塀二十三間餘、三島谷學寮二十五間、神明谷學寮十一間延燒ノ旨、良源院告達、少老言上。松平伊賀守殿ヘ以二公義使一告達。堀川廣益朝臣・稻葉式部殿各邸延燒ニ由テ、邸ノ樊圍等營構セシメラレ、廣益朝臣ヘ使者小姓組ヲ以テ重飯、令室ヘ提重一組、式部殿ヘ以二自書一島紬十端、子籠鮭三尺、各贈遣。

十二月十二日癸巳、松平伊賀守殿ヘ以二公義使一、堀川廣益朝臣邸延燒、愛宕下邸ニ移居ラル旨告達。去十日火災、增上寺及本邸ニ於テ勤勞ノ輩、少老小姓頭詰所以上ノ輩十八人ニ表膳所上間ニ於テ吸物酒肴、小姓組右筆茶道二十八人ニ膳所前ニ於テ同上。江戸番馬上定供大番士六十三人ニ、於二勘定所一同上、旗元足輕以下舍人等二百十六人ニ、於二風呂屋一同上、其餘手木役丁等ニ酒肴ヲ賜フ。

——伊達治家記錄

同（享保十年十二月。）十日七ツ半過、表二番町御旗本方ヨリ出火、折節北大風ニテ、麴町二丁目ヨリ六丁目迄、南ヘ元室町邊一面ニ燒、井伊掃部頭殿御屋敷御殘リ申ル。山王之方ハ丹羽左京殿・内藤紀伊守殿・同豐前守・松平新八殿御寄合菅谷兵庫殿燒ケ、永田馬場の方ヘ出テ、黒田殿安藝殿虎の御門ハ殘リ、内藤能登守殿ハ燒、此火前堀ノ向ヘ飛、町屋敷燒、藪小路之邊左右燒、天德寺之手前愛宕ノ下ヘ出、松平隱岐守殿・藤掛民部殿・長谷川周防殿、山下通燒、增上寺境内殘リ、東ハ陸奥守殿御屋敷燒、宇田河橋ヨリ南ヘ神明御本社殘リ、金杉橋迄燒申ル。九

ツ半過に火とまる。道法凡一里半餘。　——月堂見聞集

同日〇享保十二年十二月十日。申ノ中刻ゟ、番町ヨリ出火、糀町壹町目ヨリ四町目迄口口長門馬場ゟ愛宕下當山所化寮三丁程類燒、三島町・神明前・濱松町・門前新道・金杉迄之類火、夜子刻迄之火事。　——增上寺日鑑

一、十二月十日〇享保十二年。夕七ツ時七分頃より、江戸糀町四町目より出火、向御屋敷過半御類燒、同夜右之趣、御用番松平伊賀守殿〇忠周。に御届有之。翌年御普請出來。　——侯爵淺野家回答

享保通鑑ニハ、此日〇享保十二年十二月十日。晝ノ内快晴暖氣之處、申ノ刻ヨリ北西風強ク、大寒氣何ケ年ニモ覺ヘス、申ノ中刻ヨリ出火、丑ノ下刻火鎮ル」ト有リ。柳營日錄・兼香公記・續談海其他異事ナケレハ擧ケス。

〔附記〕前田家譜〇金澤藩。ニ、

享保十三年二月十三日、大風、湯島佐野某ノ邸失火、我カ救火隊急ニ赴キ之ヲ救フ。大將軍(〇徳川吉宗)老中水野和泉守ヲシテ命ヲ傳ヘシメ、曰、頃者湯島ニ火アリ、時ニ前田氏ノ救火隊直ニ之ヲ撲滅シ、都下數十萬ノ人ヲシテ其災ヲ免レシム、且ツ其ノ旁近海ニ火アル、必ス某ノ救火隊便チ輒チ之ヲ救ヒ、火ヲシテ大ナラシメス、是ニヨリ某シ政令ノ常ニ能ク行ハルヽヲ知ルト。吉徳(〇前田)乃チ隊長以下ヲ賞シ、物ヲ與フル差アリ。

享保十三年火災　二月十四日火災　二月十六日火災　享保十三年火災事蹟　二月十四日火災　二月十六日火災

十三年戊申〇享保〇紀元二三八八年。二月十四日乙未〇乙未、三正綜覽。青山久保町〇市内赤坂區。出火、鮫橋〇市内四谷區。ニ延燒ス。〇萬年記。年代炎上鑑。十六日庚戌〇享保十三年(紀元二三八八年)二月〇庚戌、三正綜覽。猿樂町〇市内神田區。火ヲ失シ、延燒シテ護持院原明地〇市内神田區。ニ至ル。〇柳營日次記。月堂見聞集。續談海。年代炎上鑑。

享保十三年火災　重ナル火災兩度。

一、二月十四日火災ハ、

二月十四日〇享保十三年。丑中刻、靑山久保町出火、至鮫橋邊燒亡。　——萬年記〇年代炎上鑑同。

年代炎上鑑ニハ、此日南大風ナルコト見ユ。

二、二月十六日火災ハ、

十六日〇享保十三年二月。

一、夜丑刻、猿樂町久松大和守屋敷ゟ出火、小川町東通リ、護持院跡明キ地除迄燒、申下刻鎭ル。　——柳營日次記

江戸狀ニ、二月十六日〇享保十三年。夜四ツ半時、小川町表猿樂町西側久松大和守殿

東長屋ノ二階ヨリ出火、東側森川下總守殿・堀久米五郎殿・六郷主馬殿・井御用屋敷・伊東伊豆守殿・柘植傳左衞門殿、其外御旗本方類燒、半井驢菴・五島村檢挍殿ニテ火トマリ、西ハ大久保三之丞殿・柘植八三郎殿、其外小屋敷燒、松平右京大夫殿〇大河内輝貞。富永喜兵衞殿・水野河内守殿・内藤大和守殿〇賴鄕。大岡彌太郎殿・十人火消藤掛民部殿組屋鋪燒、表高家日野民部殿・松平豊後守殿〇本庄資訓。不殘燒、戸田大隅守殿〇忠囿。御屋敷西之方計ヤケ、東ノ長屋殘リ、久世隱岐守〇暉之。不殘、東隣御用屋鋪燒、本莊宮内少輔殿〇道章。山本重大夫殿・戸田八郎右衞門殿・倉橋四郎右衞門殿・長尾分哲老ニテ火留ル。西ハ護持院諸跡カ原ナリ。幅一町程ツヽニテ、長六七町、駿河臺之方ハ大久保加賀守殿〇忠方。飯田町之方ハ松平紀伊守殿〇信岑。ニテ火留ル。

——月堂見聞集

十六日〇享保十三年二月。亥下刻、猿樂町久松大和守宅出火、松平右京大夫・松平豊後守・内藤大和守・久世隱岐守・戸田大隅守・伊東伊豆守・本庄大和守・武田刑部消火役屋敷、其外御家人之亭六十餘軒類燒。

——萬年記

〔附記〕

二月十九日（〇享保十三年。）暮六ツ半時、江戸神田明神の表門前東側より出火、西風にて十軒餘類燒仕ル。

三月十三日（〇享保十三年。）九ツ時、本鄕金助町近所春木町より出火、四町四方程燒失、九ツ時より七ツ時過迄燒申ル。

——月堂見聞集

十一月六日（〇享保十三年。）戌時、江府芝邸西門邊側出火、燒ニ七十二三舍。

——渭水見聞錄

附記 享保十三年二月後火災

享保十四年火災 二月十三日火災 二月十五日火災 三月十三日火災 享保十四年火災事蹟 二月十三日火災

十四年己酉〇享保十四年。紀元二三八九年。一月十三日戊子、三火有リ、本所〇市内本所區。深川〇市内深川區。築地〇市内京橋區。ニ延燒ス。〇柳營日次記。柳營日錄。續談海。月堂見聞集。兼香公記。加賀藩歷譜。年代炎上鑑。十五日庚寅〇享保十四年（紀元二三八九年）二月〇庚寅、三正綜覽。淺草聖天町〇市内淺草區。ニ及ブ。柳營日次記。柳營日錄。續談海。月堂見聞集。是ヨリ十八日癸巳〇享保十四年（紀元二三八九年）二月〇癸巳、三正綜覽。ニ至ル、數回ノ火災有リ。〇柳營日次記。柳營日錄。續談海。年代炎上鑑。三月十三日丁巳〇享保十四年（紀元二三八九年）〇丁巳、三正綜覽。麻布〇市内麻布區。阿部豐後守下屋敷ヲ失シ、青山赤坂〇市内赤坂區。ニ延燒ス。〇柳營日次記。續談海。月堂見聞集。兼香公記。年代炎上鑑。續日本王代一覽。

享保十四年火災 左ノ如シ。

一、二月十三日火災 ハ、

十三日〇享保十四年二月。

類都時代ノ火災

申刻、淺草茅町ゟ出火、淺草御門内、濱町永久橋通り、築地・本所回向院前一ッ目通・深川迄燒ル。

二月十三日 十〇享保四年。申之中刻過、淺草茅町二丁目ゟ出火、火元伊勢屋四郎左衛門、松平甲斐守〇柳澤吉里。書替役所、瓦町少燒、池田内匠頭〇政倚。山王町・はたこ町一丁目同二丁目・元矢倉小十人大岡主水・同木林久平・兩國橋御普請小屋燒失、稻葉與右衛門・境野小右衛門・牧野八大夫・濱町長屋少々、間部若狹守〇詮方。下屋敷表長屋不レ殘、牧野越中守〇貞倶。下屋輔、新庄駿河守〇直祐。水野宮内・井上萬之丞・水野惣兵衛・横田求馬・酒井信濃守〇忠告。中野伊右衛門・秋元但馬守〇喬房。下屋鋪、三浦玄蕃屋敷、大久保伊豆守〇忠胤。下屋敷、永井伊豆守下屋敷、屋代主計・松平越中守〇定賢。下屋鋪、深川堺町一丁目北側ゟ五丁目之内三丁目、松川町一丁、松平備中守〇正貞。下屋敷、松木丁一丁、小松町一丁、袋町一丁、井澤町一丁、松井町一丁、蛤町一丁、小川町一丁、富吉町三丁程、堀川町一丁、一色町一丁、松村町一丁、黒井町一丁、松平大和守〇基知。下屋鋪、八幡一之鳥居、眞德院・萬福寺・九德寺、中島町一丁、松平伊豆守下屋鋪、稻垣攝津守下屋敷、但町ニ而留ル。同夜丑之下刻鎭。

三月晦日。二月十三日萱町火元伊勢屋四郎左衛門御吟味之節、申條不屆ニ付て、家財闕所十里四方追放と、此間大概御仕置相極りし處、當月十八日晩方、御慈悲を以右御免、金子貳百兩之過料被二仰付一屋敷十分一被二召上一、賣券ニ合せ金子ニて上納可レ仕旨、被二仰出一也。

十三日 四〇享保十年二月。江戸火事の義、十三日晝八ッ半時、淺草御門外かや町より出火、北風にて兩國橋御普請小屋へ火飛、米澤町へ燒出、兩國川筋屋敷方、新大橋濱町に燒出、小網町の下箱崎町へ燒出、永代橋際迄不レ殘燒、留り申し。川向は千臺かしの先へ火飛、深川ほしか場、永代橋向際迄不レ殘燒、深川八幡宮一の鳥居迄にて燒留り申し。深川邊にて名物買置入置し土藏へ火入申、何百ヶ處やら限りなき事に御座し。其外火元より類燒の場所は、已前火入大分の事に御座し。殊の外大風にて、一兩年の大火にてし。已上。

十八日江戸狀中に、

十三日淺草かや町より出火の時、仙臺かしにて燒失仕し米計も、十七八萬俵程之由、依レ之米代少々高直に御座し。

——月堂見聞集

一、同日 〇享保十四年二月十三日。七ッ時過、淺草萱町ゟ出火、夜ニ入ル。

——增上寺日鑑

二月十三日〇享保十四年。江戸淺草茅町ゟ出火、北風烈く、越中島迄燒通、十四日巳刻鎭。深川御屋敷にも火入、廿間の御土藏壹筋燒失。殘御藏ハ防留之。深川奉行御大小將伊藤半右衞門殊之外働いに付、白銀五枚暫添い。御歩横目渡邊健右衞門に同一枚被下之。其外足輕小名にも夫々被下之。

——政鄰記

加賀藩歷譜〇編年史料收。ニハ、「十四年己酉〇享保。二月十三日深川米庫延燬。」ト有リ。兼香公記〇編年史料收。ニハ、「近年大燒ニテ、町人藏屋敷夥敷燒失、口米油灰ナド、其外品々大分ニ燒、凡米高十五四萬俵モ燒云々。」ト見ユ。續談海・年代炎上鑑ノ類ハ、之ヲ抄セス。

二月十五日等火災

二、二月十五日等火災　二月十五日ヨリ十八日ニ至ルノ間數回ノ火災有リ。卽チ左ノ如シ。

十五日〇享保十四年二月。

一、淺草聖天町ゟ出火、本所中ノ鄕新割下水邊燒。

十六日〇享保十四年二月。

一、午刻、飯田町之上もちの木中根圖書宅ゟ出火、田安門外武士屋敷、飯田町中坂町屋兩側燒ル。堀端にて鎭ル。

戌中刻、牛込原町二丁目より出火。亥刻同三丁目際にゐ火鎭。

——柳營日次記

二月十五日〇享保十四年。夜丑之刻、淺草聖天町二丁目ゟ出火、火元屋根屋左平、同所一丁目二丁目、瓦町二丁程、山之宿不殘、表門通少燒、小出信濃守〇英員。下屋鋪表門殘ル。九品寺、是ゟ本所に飛火、細川玄蕃〇興虎。下屋鋪右之外屋敷方類燒有之、割下水梅堀之方へ燒通、同十六日巳之刻鎭ル。

十六日、淺草邊依出火、今朝御鷹野御成御延引。

二月十六日、今日巳之中刻飯田町二合半坂之上兩屋敷之間ゟ出火故、火元不分明、金田新八郎・中根圖書・表四番町通・木下伊豆守・飯田町之臺・淺羽右近・長谷川與左衞門・稻垣大隅守〇昭倫。表長屋少殘ル。大岡右近、飯田町臺坂之上ゟ坂下まて兩側一丁程燒失、九段長屋內燒、表通は殘、是にて火留。未刻過鎭。〇增上寺日鑑ニハ、「晝四ツ時過、飯田町筋出火。」ト有リ。

同日巳之刻、深川久世壹岐守下屋敷より出火、岡部內記・松平舍人・秋田兵部下屋敷、平野丁二丁程、中田甚左衞門宅にて留ル。

同日夜酉之中刻、牛込原町ゟ出火。

右表ゟ出火、二丁目中程ゟ三丁目迄兩側付燒留。

二月十七日、今日未之刻、本處綠町二丁目ゟ出火。

右より五六丁程燒ゐて留ル。

火元 小間物屋源七

二月十八日、今酉上刻淺草土手下田町一丁目ゟ出火。

火元 龜屋久兵衞

火元不レ慥兩人內、油屋彥兵衞・丸屋伊兵衞。

田町二丁目不レ殘、吉原伏見丁角少々燒、飛火にて三谷丁橫丁兩側共に半分燒、

新鳥越町三丁目兩側半分燒失。

——柳營日錄

二月十五日〇享保十四年。夜八ッ半時、江戶淺草聖天町ヨリ出火致シ、今土四五町燒、

本所石原飛火、三ッ目橫堀吉田町通迄燒テ、火留ル。

二月十六日四ッ時、江戶深川高橋邊四五町燒、同日四ッ半時江戶牛込御門之

內番町ヨリ出火、飯田町坂際迄ニテ火留ル。凡四五町四方程。同日暮六ッ半時

ニ、牛込邊出火、イマタ火トマラス、樣子知レ不レ申ゐ。此外每日北風甚敷ゐテ、處

々二三軒ッヽ燒火、不レ知數ゐ。

同十七日晝時、江戶本所ミトリ町一丁目出火、南風ニテ二十軒四方程燒申ゐ。

同八ッ過深川出火、十軒程燒申ゐ。

同十八日晝七ッ半時、淺草田町ヨリ出火、西南風ニテ、ジヤリ場不レ殘燒、吉原ハ

殘リ、土手向へ火飛、三谷ノ町ハツレ迄燒ケ、橋場ノ方モ燒申ゐ。暮五ッ過ハ二

三ケ所出火、併靜ル。

同十九日、湯島天神切通しも一軒燒失。

續談海・年代災上鑑ノ類皆省略ス。

——月堂見聞集

三、三月十三日火災 ハ、

十三日〇享保十四年三月。

申刻、麻布阿部豐後守下屋敷より出火、靑山邊赤坂迄燒ル。

——柳營日次記

三月十三日〇享保十四年。申刻、江戶麻布百姓町より出火、南風にて、阿部豐後守殿〇正喬。鍋島攝津守殿〇稱就。伊達遠江守殿〇村晴。松平長門守殿〇毛利吉元。御下屋敷燒火、夫より赤坂御門邊燒、戌刻火留る。

——月堂見聞集〇兼香公記同。

三月十三日〇享保十四年。晴、富士南風强、晝七時過、麻布市兵衞門阿部豐後守正喬下

屋敷ヨリ出火、赤坂御掃除町ニて、夜五ツ時鎮る。

——續談海

十三日〇享保十四年三月。

一、晝八時過、青山百姓町ゟ出火、南風強、赤坂之方へ燒出、夜五ツ半過熄矣。

——金地院記錄

萬年記ニハ、「十三日〇享保十四年三月。申中刻、麻布阿部豐後守下屋鋪出火、伊達遠江守亭燒亡、至赤坂邊類火多」ト有リ。

〔附記〕月堂見聞集ニ、

同(〇享保十四年三月。)廿二日晝七ツ時、八丁堀より出火、坂本町・かやは町・同心町不殘燒。牧野河内守中やしきは殘り申ハ。

四月廿九日(〇享保十四年。)夜、江戸かやば町出火、八町程燒失。今度も牧野河内守殿御屋敷は無三別條一ハ。藥師の寺内不レ殘燒、本堂は殘る。

江戸、同(〇享保十四年十二月。)九日未中刻より北風にて、四ツ谷北寺町閻魔堂より出火、夫より四ツ谷通町燒、天王近所やけ、旗本衆燒、御組屋敷燒申ハ。右は江戸飛脚方より申來ハ。

享保十四年三月後火災

享保十五年正月七日火災

附記

十五年庚戌 〇享保〇二三九〇年。紀元正月七日丙午 〇丙午、三正綜覽。和歌山 〇紀伊國。城主德川宗直 〇中納言。邸燒ク。〇柳營日次記。月堂見聞集。萬年記。十二日辛巳 〇享保十五年(紀元二三九〇年)正月〇辛巳、三正綜覽。下谷七軒町 〇市內下谷區。火有リ、延燒小石川 〇市內小石川區。ニ及ブ。〇柳營日次記。柳營日錄。月堂見聞集。續談海。加賀藩某家書。前田家譜。十一月廿三日戊子 〇享保十五年(紀元二三九〇年)〇戊子、三正綜覽。四谷 〇市內四谷區。火有リ。〇柳營日錄。

享保十五年火災事蹟

正月六日火災

享保十五年火災 左ノ如シ。

一、正月六日火災 顚末ハ、

正月六日 〇享保十五年。

一、夜、青山紀伊黃門 〇德川宗直。屋敷之內出火、卽刻鎭。

——柳營日次記

六日 〇享保十五年正月。夜、青山宿德川常陸介殿 〇宗將。亭火災。

——萬年記

正月六日 〇享保十五年。夜八ツ時、江戶糀町鮫ヶ橋紀州樣御屋敷より出火、觀心院殿燒失。夫より飛火にて、青山大膳樣御屋敷燒、其外與力衆屋敷燒申ハ。

——月堂見聞集

正月十二日火災

二、正月十二日火災 顚末左ノ如シ。

十二日 〇享保十五年正月。

一、未下刻、下谷七軒町寺ゟ出火、北風ニて、池端方燒、東成、松平加賀守 〇前田吉治。屋

敷、本郷六丁目、至二丸山菊坂末一迄燒ル。
正月十二日〇享保十五年。
一、未中刻、根津七軒町ゟ出火、本郷に出、丸山迄廿町程燒失、亥刻鎮ル。松平加賀守屋鋪不レ殘燒失。
同十二日〇享保十五年正月。未刻、江戸下谷七軒丁池端ヨリ出火、夫ヨリ本郷へ飛火、一丁目ヨリ六丁目迄、湯島切通シ・大根畑・本郷丸山不レ殘、菊坂(四カ)心町四方、小石川與善寺町切、向町家切燒、同亥刻火留リ申ル。北風也。類燒之分、松平備後守樣〇前田利章。京極兵部樣〇高門。尼寺・內藤萬之助樣忠綱寺・松田源三郎樣淺井七藏樣妙顯寺・正慶寺・大正寺・東淵寺・覺性寺・宗賢寺、是迄七軒町之內二町程。夫ヨリ本郷へ飛火、松平出雲守樣〇前田利隆。同備後守樣〇前田利章。榊原式部大輔樣〇政佑。松平加賀守樣・近藤登之助樣、本郷一丁目中程ヨリ六丁目、春木丁一丁目ヨリ三丁目迄、此間四町四方程、凉智寺・佐藤二郎平次樣・佐藤武右衞門樣・淺岡助左衞門樣・三河半七樣・祖父江佐左衞門樣・窪田勘右衞門樣・佐々大膳樣・增島專一右衞門樣・大澤彥左衞門樣・保々靱負樣・坂部五左衞門樣・春田伊左衞門樣・佐野六左衞門樣・坂行嘉兵衞樣・新山源次郎樣・伴野善次郎樣・眞淨寺、此間大

——柳營日次記

——柳營日錄

根畑之內、町家五十間程入組、阿部伊勢守樣〇正福。御屋鋪少々燒、小石川與善寺切也。初ハ北風、後ニハ東風。

——月堂見聞集

正月十二日〇享保十五年。未下刻、根津裏門通七軒町明石屋半右衞門家ゟ出火、北風、半ゟ東風強、御上邸不レ殘御類燒等之儀、十八日夜從二江戸一之早飛脚來著、申來ル趣左之通、組在江戸諸頭等一統十四日迄火事裝束ニ而相詰、十五日ゟ當日之服ニ相改ル趣等追々申來。

根津七軒町三丁計兩頬、湯島天神切通、新御徒町二丁四方計、金助丁一丁計、春木丁不レ殘二丁半四方、本郷一丁目ゟ六丁目迄不レ殘兩頬共、夫ゟ丸山菊坂之臺四丁四方斗、同本妙寺坂下ゟ、菊坂田町迄三丁四方計。

八十軒侍屋敷。十七軒寺。

備後守樣〇前田利隆。御上邸下小屋共不レ殘御燒失、表御門幷靈臺院樣御門ハ殘る。御同人樣御中邸之內、內御長屋半分程燒失、出雲守樣御上邸之內、下御長屋ハ不レ殘燒失。

此方樣〇前田吉治。御上邸、御殿ハ不レ殘御燒失、南御門續キ幷會所外御長屋、御居宅續八筋御長屋之內二筋、御步小屋續幷谷小屋西小屋、六丁目御物見、南會所之

向御長屋一筋、南御通町南御門之方十四五軒計相殘。御土藏ハ中之口向之新
御土藏壹ツ燒、其外ハ殘る。暮六時過鎭火。龜次郎殿幷御廣式、女中末々迄一所
ニ御中邸ニ御供ニる立退、御用人澤田源大夫御供仕、御馬も御中邸ニ牽退、火
鎭後、御上邸ニ牽戻シ、御居宅御長屋ニ繫之。
一、南御門西之方續長屋を假御式臺ニ仕立、同夜ゟ御客御使者取次いたニ付、組
頭・物頭・御番頭取次役・御給事役ニ、御殿之通其夜ゟ相詰、御門之內ニ御紋之幕
を打、御長柄十筋飾之。十四日切ニ右御飾相止。
御用所ハ、會所之內を圍相勤、十六日ゟ御居宅ニる勤いた處、從御國御居宅ハ龜
次郎殿御入被成いた樣被仰出いたニ付、廿五日ゟ又御用所會所之內ニ相成。
龜次郎殿、二月廿一日ゟ御居宅ニ御移。
十九日、今度御類燒ニ付、御尋之宿次御奉書、十五日相渡、今日到著、右御禮之御
使、御小將頭靑木新兵衞ニ被仰渡、拜領物被仰付、廿三日金澤發。
一、御類燒ニ付、御作事御用御先手御用人松原善右衞門、御近習物頭幷丹羽澤
右衞門ニ被仰渡、二月二日金澤發、內作事奉行中村治兵衞・宮崎長大夫、右爲御
用同日發足。

一、今日御用番御宅ニ、就御類燒爲伺御機嫌、頭以上罷出。
廿二日、今度御上邸就御類燒、今年御上納米一萬石、現米ニる御用捨之義、當十
四日御用番御老中御宅ニ聞番被召呼、被仰渡いた由、今日申來。
——政鄰記○加賀藩某聞書略同。

一、正月十九日。○享保十五年。
左之御書付、御目付小川新九郎被相達、詰番小笠原縫殿之助承之、組々ニ相觸
いた樣、本御番組頭ニ申渡之。
去ル十二日下谷筋ゟ出火、小石川邊迄燒失之處、先年拜借被仰付、瓦葺之所
ハ相殘りいた由ニ付、家作も宜仕、常ニ防等申合も能いた故と相聞いた、自今も火
之用心無油斷申付、防之儀も能々可申合いた、且又右瓦葺之內、類燒之屋敷々
とも、最前之通普請可仕いた、瓦葺ニ普請難仕いたハヽ、此場所ハ屋敷可差上いた、
替地被下置ニて可有之いた。
右之趣、頭支配有之面々ハ、其組々支配々ニ可被相達いた。以上。
——御徒方萬年記

戊正月
續談海ニハ、正月十二日○享保十五年。晴、北風、晝八時過下谷七軒町より出火、湯島天神
別當都時代ノ火災

下迄燒出、東になり、本郷之方に燒行、また風南になり、丸山近所にも夜五時鎮る。ト見ユ。

附記

〔附記〕月堂見聞集ニ據レハ、

江戸二月十三日(○享保十五年。)夜四ツ時、小石川富坂下餌指町北の方より出火、北風にて二町程、水戸宰相樣御屋敷表御門前迄燒申。風强い得共、水戸樣御一家、松平播磨守殿、同大學殿、筑前殿、中山備前守殿へ、公儀より御奉書火消、其外近邊、御大名方御出馬、二時計にて消申い。火事にて燒いよりは、人にて家を潰されいは、二町餘も燒場より廣くい由。

一、同廿一日夜戌刻、本郷駒込建部丹波守殿御屋敷、西北角御長屋より出火、右御屋敷不レ殘。夫より染井藤堂和泉守殿、同長屋表手通り燒、外長屋は無別條、右御殿三ヶ所燒、土藏六七ヶ所、御茶屋迄燒。夫より土井大炊頭殿御中屋敷の北の地、御旗本六七軒燒、土井殿は無別條、同下刻に火留る。

享保十五年二月後火災

十一月廿三日火災

三、十一月廿三日火災　柳營日錄云フ、

一、廿三日○享保十五年五月。夜四谷ヶ出火、竪廿町横三丁程燒。

享保十六年火災

十六年辛亥○享保二三九一年。○紀元三月十七日庚辰○庚辰、三正綜覽。芝森元町○市内麻布區。出火、麻布○市内麻布區。赤坂○市内赤坂區。ノ一部ヲ燒ク。○柳營日次記。月堂見聞集。兼香公記。續日本王代一覽。四

三月十七日火災

享保十六年火災事蹟

四月十五日大火

月十五日丁未○享保十六年(紀元二三九一年。)○丁未、三正綜覽。目白臺○市内小石川區。麴町○市内麴町區。芝○市内芝區。等ニ及ビ、燒死者千人ニ達ス。○柳營日次記。月堂見聞集。伊達治家記錄。續談海。兼香公記。年代炎上鑑。瀨田問答。續日本王代一覽。

享保十六年火災　是年重ナル火災ハ、三月十七日火災、及四月十五日ノ大火トス。

一、三月十七日火災　其顚末左ノ如シ。

十七日○享保十六年三月。

一、未中刻過、芝土器町横森元町(元カ)ヶ出火、西久保狸穴溜池臺麻布邊燒、民家寺社餘程燒失。

——柳營日次記

三月十七日○享保十六年。申上刻、芝新堀端森下町より出火、土器町四町辻へ燒出、東へ坂上一町程燒、北は西久保町八幡前燒、西は秋田信濃守○賴季。屋敷。夫より江戸見坂飛火、松平大和守○明矩。屋敷、火消屋敷燒、板倉伊豫守○勝清。屋敷、井上太右衞門屋敷、眞田伊豆守○幸道。土井權之助屋敷、禪宗一向宗の寺燒。夫より谷町小屋敷、寺町燒、水野日向守○勝政。松平河內守○直好。黑田筑前守○繼高。夫より赤坂五

丁目燒貫、町家殘り、小屋敷二三箇所燒、右道筋御旗本屋敷餘程燒、亥の下刻火留る。竹中周防守弓削源七本多彌八・竹中喜八・鳥居權之助・土岐善右衞門・諏訪源右衞門・加藤平六、此外は不レ詳。大南風。

江戸火事細說

三月十七日申の上刻に、芝三田新堀北川岸、御被官町、二丁程燒、森本町不レ殘燒、かわらけ町四丁目へ燒通り、竹中周防守殿（日光奉行、土器町三丁目燒、飯倉片町鷹木坂近所、本多彌八郎殿（御目付。）西久保八幡宮下通り町屋燒け、八幡の社は無二別條一、伊勢萬助殿（御寄合。）畠山五郎七殿（小普請格。）西の久保八幡宮表門限に火留る、戸澤上總介殿（○政鷹。）仙石信濃守殿（○政房。）屋敷無二別條一、同刻西久保土取場、内藤外記殿屋敷近所へ飛火にて燒出し、内藤外記殿（十人組御火消。）田村主水殿（御先手鐵砲頭。）岡部大三郎殿（御寄合。）田屋仙右衞門殿（御目付。）板花藤之進殿（御勘定組頭。）有馬兵庫殿（御書院番組下。）竹中喜八殿（御寄合。）是より東風にて麻布市兵衞町通りへ燒出、鳥井權之助（御先手鐵砲頭。）板倉伊豫守（大番頭。）表屋十間計殘る。松平大和守殿表御門より東長屋殘り、江戸見坂の上裏門長屋殘る。榎本坂の火消屋敷、齋藤賴母（十人組火消。）表御門より西の方長屋廿間計燒、御殿玄關無二別條一、長仙寺（一向宗高田末寺。）眞田彈正忠殿井上吉右衞門（御寄合。）麻布谷町へ燒貫、松平孫右衞門殿（御先手組頭。）組下與力衆・役人衆燒。麻布簞笥町の町屋燒。溜池の端へ燒出、松平筑前守殿中屋敷燒、表御門長屋堀端の方皆殘り、御屋敷の內は燒、麻布南部坂へ燒上り、水野日向守殿燒、相良遠江守殿中屋敷燒、表御門長屋殘り、赤坂田町五丁目へ燒出、小堀備中守殿御組下役人衆燒、田町五丁目町屋十軒計燒、是にて火留る。子の中刻なり。凡横二町に長さ一里程の積りなり。以上。

——月堂見聞集

明矩（○松平大和守。）

一、同（○享保。）十六年亥年三月廿一日、江府屋敷、去ル十七日類燒ニ付、八月中可レ致二參府一旨御容赦被二成下一、然處相願、五月五日著府、同月十五日參勤之御禮申二上之一。

——寬政呈譜

一話一言・續談海・年代炎上鑑略ス。兼香公記ハ、之ヲ品川邊ノ火事ト爲シ、長一里計ト記ス。

二、四月十五日大火　其顚末左ノ如シ。

十五日（○享保十六年四月。）

午后刻、目白臺建部民部少輔支配夏目五郎屋敷ヨリ出火、西北風强、類燒先、秋元但馬守〇喬房。下屋敷、清水源太郎・蓮花寺門計、目白不動堂不レ殘、別當長谷寺共、關口臺町三町程、武士屋敷不レ殘、關口駒井町壹町程、同新町三丁程、牛込古川町十六町程、改代町七丁程、小島昌怡園八右衛門・高木三左衛門・佐野次郎八・荒尾左源太・中島彌太郎・野村彦右衛門・桑ヽ定之丞・竹屋大三郎・右野萬次郎、赤城明神社計殘、地内不レ殘、別當等覺寺・太田源兵衛・森川金左衛門・藤方庄右衛門・遠山小十郎・森山勘四郎・天野助十郎・伴十次郎・笠原又十郎・永田七左衛門・稻葉下野守・稻生左門・酒井惣太郎・小林金兵衛・中山備前守、牛込松源寺・清瀧寺・天德寺・寶宗寺、牛込白銀町・布施藤次郎・濱岸寺・安養寺・須田五郎・三田助右衛門・島田幸次郎・新賀勝之助・杉浦善三郎・寶藏寺門前町壹町程、天野助次郎・山住三三郎・根岸又兵衛・近藤半十郎・川勝十郎右衛門・飯田兵十郎・大坂源五右衛門・川勝勘右衛門・中里村町屋三丁程、濟松寺門前壹丁程、同寺中壹軒、水野十兵衛下屋敷間宮賴母・林六兵衛組屋敷、但市川喜兵衛組、猪田兵右衛門・小幡内藏介・酒井讃岐守〇音。忠柳澤兵〇歟。刑部少輔〇濟。里金田惣八郎組屋敷、山川安左衛門組屋敷、牛込天神町三町程、河野豐次郎・大岡甚之丞・太田甚五左衛門・松崎善次郎・永田善大夫・小野次郎右衛門組屋敷、牛込肴店横町四丁程、成高院・行願寺・多門孫十郎・小野次郎左衛門・本多藤十郎・牛込寺町通六町程、林仁右衛門、其外八軒、表門前、松源寺・養源院・放善寺・三光院・正藏院・泉藏院・龍門寺・圓滿院・正定寺・長玄寺・大信寺・六郷與十郎、牛込御簞笥町三丁程、武士屋敷十三軒・寺二軒・牛込蕎店町屋三丁程、寶生寺・御徒町・大卷七郎左衛門組屋敷不レ殘、伊藤傳十郎組屋敷六軒、蜂屋民部組屋敷二軒、諏訪安藝守〇虎。忠竹本喜内・座光寺長三郎・瀧川内記・平井宮内・都筑藤十郎・本多志摩守・右野六左衛門・渡邊甚右衛門・前田與十郎・山名彦次郎・中野傳右衛門・佐原勘右衛門・原田孫兵衛・鈴木藤右衛門・永上内膳・岡部圖書・永井外記・右野主水・筑紫左大夫・松平藏人・小林平左衛門・土屋忠兵衛・松平利右衛門、市谷田町三丁目ノ内壹丁程、是ニテ留ル。牛込天龍寺前通、諸見清八・萩野半大夫・野田庄三郎・小宮山藤次郎・小倉庄次郎・村松善太郎・關作之丞、是ニテ留。凡巾二町餘、竪三十五町程。同日未上刻、麹町壹丁目小裏ヽ野一色外記宅ヨリ燒出ル。森河六左衛門・伊藤市十郎・久志本左京・巨勢大和守・佐野式部・須藤又四郎、麹町壹丁目兩側不レ殘燒、火消近藤登之助役屋敷、京極修理〇高永。内藤丹波守〇政森。烏居丹波守〇忠利。安藤久太郎・半藏御門外箱番所鷲小屋燒ル。井伊掃部頭〇直惟。

堀川兵部大輔・松平安藝守○吉長。淺野　添屋敷共、松前八兵衛・土岐信濃守・石川近江守○茂。總　松平玄蕃頭○曉。忠　松平筑前守○繼高。黒田　徳永式部・九鬼丹後守○祇。隆　同厩・由中主膳・中川千太郎表通り、中川十左衛門・上谷新之允・竹上兵三郎・岩本内膳正・小出銕太郎・伴主水・金松吉五郎・川勝勘兵衛・高木主水正○陳。正　村瀬民部・松平周防守○豐。康　内藤備後守○樹。政　朽木土佐守○綱。玄　虎御門橋并大番所・但冠木門箱番所不レ殘、永井伊賀守○陳。直　相馬彈正少弼○胤。尊　阿部因幡守○良。正　板倉新十郎○澄。勝　稲葉藤藏・牧野播磨守・松平長門守○吉元。毛利　増山河内守○任。正　西尾隱岐守○直。忠　小笠原壹岐守○淵。長　向屋敷、松平又二郎・米津出羽守○容。政　松平長門守中屋敷鍋島加賀守○英。直　龜井隱岐守○親。玆　伊藤修理亮○永。祐　松平甲斐守○吉里。柳澤　幸橋御門燒、松平薩摩守○吉貴。島津　阿部伊勢守○福。正　丹羽式部○氏。倚　有馬兵庫頭○倫。氏　酒井石見守○豫。忠　南部修理大夫○親。信　松平信濃守○宗茂。鍋島　櫻田御用屋敷、山下御門外（御門別條）太左衛門町・久保町善右衛門町・伏見町・櫻田和泉町・向鍛冶町・兼房町・虎御門外藤堂肥後守・京極縫殿介○定。高　遠山遠江守・朽木大和守・木下左門・木下敷之助・加藤孫三郎・加藤彌次郎・稲葉能登守○通。董　仁賀保鐵三郎・土方河内守○房。雄　妻木織部・一柳土佐守○昌。末　大久保下野守・毛利周防守○寛。高　植村出羽守○家　柴田但馬守・分部隼人○光命。　井上玄徹・大村河内守○富。純　井關玄周・松平三吉・一柳兵部少輔○邦。賴　細川山城守○壽。興　有馬左衛門佐○純。壽　河野松庵・武田民部・烏森稲荷社内不レ殘、中川內膳正○忠。久　本多主計・能勢長十郎・松平修理・大島雲八・本多左衛門・片桐帶刀・堀直次郎・大久保刑部・本多豐前守○矩。正　中屋敷・土岐長玄・池田萬之丞・間部才三郎・佐久間小左衛門・大久保彦左衛門・桑山主水・宇都大學・田村隱岐守○典顯。　中屋敷・松平陸奥守○伊達吉村。　中屋敷・秋田信濃守○賴季。　川勝縫殿介・福島左兵衛・井戸新兵衛・酒井佐渡守○忠武。　松平五郎右衛門・村山市正・大澤主馬・大島雲八・花房勘右衛門・中山小源太・山口牛之助・細川山城守○興壽。　御厩・村松太郎兵衛・仙石佐中・赤井賴母・三雲新左衛門・仁賀保辨次郎・諏訪庄三郎・蜂屋小十郎・本多源十郎・芝口四丁目半町、芝三丁目北側計、源助町・露月町・壹丁・荒井町・宇田川町・壹丁、神明町半町、日影町不レ殘、松平陸奥守・井上玄碩・松平肥後守○容。正　濱御殿南之方角口燒御門橋共、桑山丹後守下屋敷、此處町家不レ殘、神尾內記・森越中守○生。長　關但馬守○廣。長　加藤孫三郎下屋敷・大久保加賀守○方。忠　下屋敷、永井伊賀守○陳。直　下屋敷、夜亥刻頃鎭。凡巾五口程、長三十八丁、二口合巾三町長九十二町。

——柳營日次記

十七日〇享保十六年四月。

右ハ、昨十六日夜屋敷類燒ニ付、被遣之。

紀伊中納言殿〇德川宗直。ゟ。鶴千代殿〇德川宗翰。ゟ。尾張宰相殿〇德川宗春。ゟ。

右者、昨十六日出火ニ付、爲伺御機嫌、被差上之、於躑躅之間、小川新九郎謁之。

廿四日

上使島津式部
松平下總守〇忠雅。

近藤登之助

右者御役屋敷類燒ニ付、爲普請料、千九百五拾兩、疊代百拾五兩被下之旨、於御右筆部屋緣頰、若年寄中出座、伊豫守〇本多忠統。申渡之。

——御部屋日記

四月十五日〇享保十六年。午刻、大北風、江戸關口秋元但馬守殿御下屋敷向之方より出火。夫より目白臺・宗泉寺・內所町家不殘、養國寺・八幡宮・目白不動・新長谷寺・森宗右衞門・戶田肥前守・川勝權之助・三浦彥四郎・山本藤右衞門・糟谷彥兵衞・大屋松之助・蓮華寺・清水源太郎・夏目八右衞門・關口町家不殘、目白下新町・松枝町・森山勘四郎・佐野次郎兵衞・岡右衞門七・野村彥三郎・秋元但馬守・門奈定之丞・筧吉太郎・竹屋中三郎・□尾源太郎・近藤半十郎・川崎三郎四郎・飯田兵十郎・中島彌太郎、服部多宮・疋田庄太郎・根岸又兵衞・大澤忠左衞門・疋田小右衞門・加藤平橘・久保田彌助・伴重次郎・天野助八郎、是迄馬場近所なり。右之外馬場等通無別條。牛込五軒町稻生下野守・同左門・中山備前守・赤木明神本社殘る、同門前町小野次郎右衞門御組屋敷前木下・太田新五右衞門・大岡甚之允、上內傳右衞門・石野萬三郎・牛込かいだい町不殘、わせだ、渡邊下野守・水野十兵衞、間宮賴母・林兵右衞門・金岡甚八郎御組屋敷、丹羽五郎左衞門御組屋敷、小堀備中守御組屋敷、竹本權右衞門・松平市三郎・竹內源右衞門・岩城忠右衞門・山田彌右衞門・酒井讚岐守・柳澤刑部右衞門・長源寺・大仰寺本堂殘る、正覺寺本堂殘る、寶泉寺・圓禪寺・矢田市右衞門・足立甚右衞門・後藤源左衞門。

右之外に橫寺町御組屋敷殘る。夫より牛込御細工町へ飛火仕、小宮山藤四郎・萩野半大夫・諸星清八。夫より牛込山伏町へ飛火、村松善八・大柴清右衞門・小知庄四郎・神尾左中・久野彥八・上京惣大夫・田澤藤四郎・原田久之丞・關左之助・大岡甚太郎。

右山伏町は是切にて火留り申し、橫寺町より簞笥町・法正寺・佐々勘三郎・小川清助・淺田昌平・稻垣松右衞門・立村孫九郎・邊見幸太・三枝善右衞門・鈴木半之丞、

是迄牛込通り寺町迄なり。牛込横町白銀町・盛高院・深田五郎三郎無二別條一、筑土明神、是より肴店御かち町邊坂上迄、新光寺・小野次郎左衞門・多門源七郎表長屋殘る、本多藤十郎・牛込藁店・清光院・菅野部彌八・竹本喜内・庄(嵩カ)光寺長三郎・伊藤傳十郎・杉山道巴・諏訪安藝守・小谷長十郎・平井宮内・都筑藤十郎・久保平三郎・本多志摩・石野六右衞門・永井外記・前田與七・山名彦次郎・岡部圖書・鈴木藤右衞門・水上内膳、是迄逢坂。夫より田町、都筑左大夫・松下藤助・小林平左衞門・土屋忠兵衞・安部彌右衞門・松平利右衞門・同内記、若宮邊は無二別條一火留り申ㇾ。夫より麹町一丁目と二丁目之間横町へ飛火にて、野々宮外記・澁谷隱岐守・伊達市十郎・巨勢大和守・森川六右衞門・首藤又四郎・粟本左京・佐野式部・麹町一丁目不ㇾ殘燒、二丁目少々燒申ㇾ。近藤登之助・京極修理表長屋少々燒、内藤丹波守・鳥居丹波守・秋田久三郎、是迄麹町之内。夫より櫻田、井伊掃部頭・堀川兵庫・松平安藝守・同筑前守・松平安房守・松前八兵衞土岐信濃守・石川近江守・松平玄蕃頭・同長門守・板倉新十郎・稻葉玄蕃相馬彈正忠・永井伊賀守・松平周防守、西尾隱岐守・小笠原壹岐守・松平又三郎・伊藤修理亮・龜井隱岐守・米津田羽守・松平甲斐守・南部修理亮・增山河内守・松平大隅守・有馬兵庫・丹羽式部・安部伊賀守・鍋島丹後守・同加賀守・酒井石見守・朽木土佐守・内藤備後守・九鬼丹後守・德永式部・中川專太郎・井上兵三郎・村瀨民部・川勝勘兵衞、幸橋見付落る。虎御門見付落る。松平長門守中屋敷、鍋島加賀守同、櫻田久保町不ㇾ殘、備前河岸、鍛冶前がし、いづみがし、兼房がし、伏見がし。右は新道共不ㇾ殘燒申ㇾ。是迄外櫻田之分なり。是より愛宕下、京極縫殿・稻葉能登守・木下牧之允・仁加保鐵三郎・相良遠江守・木下左門・朽木大和守・加藤孫三郎・一柳土佐守妻木織部・毛利周防守・大久保下野守・植村右衞門佐柴田但馬守・井關玄東・一柳兵部少輔・間部才次郎・武田織部・細川山城守・河野松庵・有馬左衞門佐・佐久間小右衞門・能勢宗十郎・大久保彦左衞門・伴平山・花房勘右衞門・大島勘右衞門・仁賀保辨次郎・三雲新右衞門・赤井賴母・村上市正・御馬屋敷・石川左中・土方河内守・松平五右衞門・田村右京・津島加兵衞・田村右京・伊藤新右衞門・川勝縫殿之助・秋田信濃守・久世大學・堀猶四郎・酒井右京・松平陸奥守・有馬左衞門佐・植村右衞門佐・井上玄徹・井上兼太郎・大村河内守・一柳主稅・分部隼人・稻葉庄右衞門・中川内膳正。

是迄愛宕下、芝口二丁目中程より同四丁目迄。臘月町・宇田川町・源介町・神明町・三島町・日影町八町程・新錢座・松平肥後守・神尾内記・森越中守・松平陸奥守・加藤

孫三郎。

是より末芝金杉海手へ燒出、牛尾と申處にて、戌の下刻に火鎭り申ㇾ。死人千人餘、武家屋敷分は知不ㇾ申ㇾ。

——月堂見聞集

一、享保十六年辛亥四月十五日御類燒之事。

但、此時御中屋敷ゟ一同ニ御類燒之事。

——邸○萩藩。

一、同十○享保十六年。四月十五日櫻田御中屋敷御類燒有ㇾ之。

——御家年歷略記○津山藩。

一、四月十五日○享保十六年。目白出火、戌亥風、櫻田御屋敷御類燒、虎ノ御門燒、以來不ㇾ建。

——中邑世紀祕說

十五日○享保十六年四月。芝上邸延燒ス、麻布ニ移居ス。十六日、將軍使者ヲシテ吊問セラル

——東藩史稿

一、四月十五日○享保十六年。未ノ刻過より江戸大火、御上屋敷不ㇾ殘、向御屋敷坂之下過半御類燒。赤木明神前ヨリ出火、西風強及ニ大火一、八ツ半時頃、御上屋敷御類燒トアリ。此時之風說ニハ、右火事最中、御堀端鳥井丹波守嚴邊ゟ燃出、其火此方御屋敷へ移リ、御類燒トモ云。四月廿五日迄、餘火シメシ有ㇾ之。此日火消方引取ト云。

——侯爵淺野家回答

柳營日錄·伊達治家記錄·兼香公記·續談海·年代炎上鑑·續日本王代一覽·武江年表ノ類、今皆之ヲ抄セス。

〔參考〕瀨田問答云フ、

虎御門の御櫓燒失後出來せすと云、何頃の火事にゐ哉。

答、享保十六亥年四月十五日西北大風にて、午下刻目白臺夏目吉五郎宅ゟり出火、右近邊不殘、關口·古川町·改代町·赤城邊、松平兵部·酒井讃岐守中屋敷の邊組屋敷、寺々、牛込馬マヽ町中若宮邊、山伏町·御徒町·富士見馬場邊、逢坂上下町御堀端通燒失、同刻過、糀町十郎·久志本左京東後長屋迄燒、此所より六七軒東頰へ移、巨勢大和守宅ゟり糀町壹丁目御堀端迄燒、澁谷隱岐守より北の屋敷は殘る。南側糀町壹丁目貳丁目御堀端火消屋敷邊、御堀通り不ㇾ殘、井伊掃部頭、松平安藝守、同筑前守前後之衆共に皆燒失、虎御門渡御櫓とも燒落、內外之大名衆悉く燒失、內藤能登守邊不ㇾ殘、但櫻田にて上杉家計殘る。櫻田御殿、外櫻田之內日比谷御門外御成橋御門、芝宇田川町邊、火先は海邊へ燒拔。但愛宕下中不ㇾ殘、愛宕の社家ゟ南の方は殘る。暮六時過消る。右出火に、虎御門燒失、後御再建無ㇾ之ゐ。

附記 享保十六年四月火災

〔附記〕享保十六年四月十七日夜、馬場先火有り。

四月十六日(○享保十六年。)

一、夜子刻、内櫻田松平伊豆守屋敷内長屋ゟ出火、松平下總守類燒、卽刻鎭。馬場先御門無二別條一、大御番所燒ル。

——柳營日次記(○月堂見聞集同。)

享保十六亥年四月十六日馬場先御門大番所當番中類燒。

松平縫殿頭

一、夜九時出火、馬場先御門御番所方角ニ付御出之處、御番所へ御越被レ遊ル節、大番所へ火懸リルニ付、御多門幷張番升形之内箱番所防被二仰付一出火之火元者、松平伊豆守樣北御長屋ゟ出火、松平下總守樣御屋敷不レ殘燒失。夫ゟ馬場先御番所大番所不レ殘類燒申ル。御多門幷御橋張番升形之内箱番所共防留、別條無レ之事。御非番內藤播磨守樣、御當番此方樣。

一、內藤播磨守樣ニも、此方御番所へ御越被レ成ル付、御番所へ御詰被レ成ル事。

一、大御番所へ火先ニ付番頭防申付ル得共不レ叶火移ルニ付、御番所之書物等取揃、御武器共爲レ持、御多門脇ゟ除、水野壹岐守樣御長屋通ニ引取置、御番所燒落ルと否、御兩門へ武器。

一、大番所燒失、其儘武器御番所燒跡前へ備ル爲二侍置一ル。追付幕張ル、其所ニ番士共備ル筈在ル。

一、殿樣御馬上ニ而被レ成二御座一ルニ付、升形之內御相番所片付、毛氈敷ル、箱番所ニ播磨守樣御一所ニ被レ成二御座一ル。

——火災要覽

享保十七年火災 二月十二日火災 三月廿八日大火 十二月十日火災 享保十七年火災事蹟 二月十二日火災

十七年壬子(○享保○紀元二三九三年。)二月十二日庚子(○庚子、三正綜覽。)愛宕下(○市內芝區。)青松寺失火、幸橋內(○市內麴町區。)ニ延燒ス。(○柳營日錄。月堂見聞集。續談海。年代炎上鑑。續日本王代一覽。)三月廿八日乙酉(○享保十七年(紀元二三九三年)○乙酉三正綜覽。)淺草(○市內淺草區。)及巢鴨伊達治家記錄。續日本王代一覽。)巢鴨原町(○市內小石川區。)ニモ火有リ。(○享保日錄。月堂見聞集。)其外ニ出火シ、本所(○市內本所區。)及牛込(○市內牛込區。)小石川(○市內小石川區。)櫻田(○市內麴町區。)芝(○市內芝區。)等ニ延燒ス。(○享保日錄。月堂見聞集。兼香公記。享保撰要類集。觸書集成。續炎上鑑。續日本王代一覽。)

十二月十日癸亥(○享保十七年(紀元二三九三年)○癸亥、三正綜覽。)廣島(○安藝國。)城主淺野吉長(○松平安藝守。)赤坂邸(○市內赤坂區。)燒ク。(○政鄰記。侯爵淺野家回答。年代炎上鑑。)

享保十七年火災

二月十日ニモ火災有リ。

一、二月十二日火災ハ、重ナル者三箇所有リ。愛宕下青松寺ニ出テタル者一、巢鴨大原町ニ出テル者一、千駄萱ニ出テタル者一。

十二日(○享保十七年二月。)

一、今午下刻、愛宕下青松寺ゟ出火、久保町末幸橋內飛燒。同刻巢鴨小原町竹內

小平次宅より出火、松平甲斐守〇柳澤吉里。下屋鋪燒。其外處々出火有レ之、晝夜南大風、出火之節、町奉行ニ七十ヶ所餘、其外は不レ知。——享保日錄

二月十二日〇享保十七年。未之刻出火、未申大風にて、芝愛宕下通青松寺臺所より出火、青松寺本堂寺中不レ殘燒、愛宕山別當照鐘院同總門、是にて火とまる。同刻飛火にて愛宕下佐久間小路北通赤井民部殿御屋敷近邊より燒出し、植村出羽守殿〇家敬。分部右京殿燒、佐久間小路中通り御屋鋪方不レ殘燒、幸橋御門の下備前町一丁燒、御堀後へ燒ぬけ、幸橋内松平甲斐守殿御屋敷、但表御門無二別條一半燒同前之由、伊東修理大夫殿〇祐永。御屋敷燒、御家中少し計やけ、松平大隅守殿〇島津繼豐。御裝束屋敷表門計燒、是にて消る。申の中刻火とまる。——月堂見聞集

二月十二日〇享保十七年。曇南風、晝八時芝愛宕下青松寺より出火、久保町邊類火。（丁ハ、御入國以來燒失無之い處、今度初る燒申い由。）——續談海

二月十二日甲寅〇庚子歟〇享保十七年。午刻、千駄萱ヨリ火起リ、烈風大火ト爲リ、猿町壽昌寺門前ニ至マテ延燒、出馬シ給ヒ、處々指揮セラレ、防火セシメラル。麻布邸第及六十間藏共ニ燒却。處々ヨリ訪問使來ル。——伊達治家記錄

附記　享保十七年二月火災　三月廿八日火災

十二日〇享保十七年二月。烈風。

一、午時過青松寺ゟ出火、青松諸堂不レ殘、圓福寺類燒、愛宕下大名衆旗本衆所々類燒、櫻田大隅守殿屋敷切ニ〆る火熄矣。

六日〇享保十七年三月。

一、一昨五日、二月十二日出火之節類燒之御方、將又近所ニ〆る無二別條一御方へ、御見舞使僧恢首座、指遣之。

一、一柳主稅殿類燒御見舞、治右衞門參上也。——金地院雜記

兼香公記ニモ、此災ヲ記ス。

〔附記〕柳營日次記ニ、

二月十七日（〇享保十七年。）

一、夜卯中刻、吳服橋内松平市正（〇親純）屋敷より出火、堀美作守・加納遠江守類燒、子ノ刻鎭ル。老中登城。今日南風烈シ、夜ニ入北風烈シ。

二、三月廿八日大火　數箇所ノ火、一日ニ發ス。

廿八日〇享保十七年三月。

晝前、淺草新寺かしひものや五郎左衞門家より出火、西北風烈し。類火之覺、

新寺かし・東國寺門跡前家通り、金龍寺・本陽寺・東林寺・玉寶寺・海雲寺・本知院・大
仙寺・仙龍院・本噂寺・實相寺・常福寺・いかうゐん・永見寺・宗圓寺・阿部川町南に貳
丁程、茶屋、朽木和泉守組屋敷、松平民部・阿部志摩守組屋敷、新堀端通四丁程兩
側、横瀬三右衞門・右上半兵衞・和田孫七郎・自松院・織田伊賀守・本多肥前守・黒部
善右衞門・長井半四郎・池田内匠○政倚。松平甲斐守○柳澤吉里。大圓寺本堂計、茅町西
福寺・淨念寺・小揚町不殘、板倉帶刀・前田半右衞門・田中主膳・吉良左衞門・松平半
十郎・金田小兵衞・日根彌二右衞門・三橋町不殘、表町壹丁目、竹町不殘、淺草觀音
表門前茶屋不殘、花川戸町不殘、金森左衞門、本所に飛火、表町壹丁目。夫より壹
丁半内ニゐ燒、中の郷三拾間程燒、向井將監・清水本之助・美濃部瀨兵衞・小野庄
十郎・能勢源之助・岩出定之進・岡田喜三郎・山田金十郎・松平大學頭○頼貞。藏屋敷、
松平市之進・小笠原外記・阿部伊勢守○正福。藏屋敷・最上監物・本間十左衞門・日野
小左衞門、外出町貳丁、間宮嘉右衞門・近藤小兵衞・望月新八郎・右原小兵衞・齋藤
伊右衞門、梅堀不殘燒、同貳丁程、石原壹丁程、小栗仁右門・大塚清兵衞・德山五兵
衞・關口次郎八・勝野三右衞門・山口孫次郎・榊原兵右衞門・六鄕兵左衞門・高橋所
右衞門・杉山清九郎・京極四郎左衞門・永井彦三郎・池田玄通服部靱負・佐野右衞

門、割下水南に壹丁程、鈴木彦左衞門・竹垣治部右衞門・島津但馬守○忠就。瀧川助
九郎・本多内藏介・土屋平八郎、元町壹丁程、相生町六町、島津屋敷不殘、林町壹丁
程、柴田清六・菅沼織部・小倉忠右衞門・みろく寺・林備後守、森川町貳丁程、六軒堀
南側井上河内守下屋敷、井出兵左衞門、大工町壹丁、坂部三郎兵衞、深川本清寺・
靈岸寺地中不殘、松眞寺・松平舍人・中西忠太・生田茂七、冬木町三丁、山町廿間程、
すきや橋通り壹丁餘燒、留る。

同刻過巢鴨一口出火、大塚上町牢人宅より出火。燒失之輩、御鐵炮方田村四郎
兵衞組屋敷、大草主膳・土屋兵部少輔下屋敷、由良新六半分、小栗十郎右衞門・朝
比奈惣左衞門・本多甚右衞門・平井遊見・三島源次郎・川勝一學・山川安左衞門・安
藤對馬守○信友。屋敷、高林市左衞門・坪内安兵衞下屋敷、森川四郎左衞門・遠山内
藏允・山野邊主水正・河野小右衞門・大圓寺・大河内孫七郎・寬半四郎・瀧川播磨守
下屋敷、中川市右衞門・戸田右近將監○氏房。下屋敷、根來權左衞門・馬場喜八郎・大
久保助之丞・松平大學頭○頼貞。内證、菅沼藤十郎、高木伊勢守屋敷、加藤左兵衞・竹
尾四郎兵衞・高源寺不動・眞無瀨養安院・本傳寺・德雲寺・上野藤兵衞・樋口左助・堀
田三郎左衞門・向井兵庫御先手組屋敷、德田長兵衞、御先手佐々木五郎右衞門

組屋敷、杉金町・水道町不レ殘。源昌院門計、傳通院裏門通り、前田萬之丞・濱田昌立・内藤傳右衞門・金剛寺・牛込五間町三四十間、中山備前守、牛込肴町四五間、牛込馬場、小笠原金兵衞・朝倉小左衞門・窪田佐二右衞門・曾根茂右衞門・鈴木佐次右衞門・山田安右衞門・松平兵藏・三島覺右衞門・三島佐右衞門・土岐縫殿介・下條長兵衞、赤城明神前不レ殘、河野豐次郎・大岡甚之丞・三田助十郎・右野萬次郎・飯田兵次郎・近藤半十郎・根岸久兵衞・朝比奈一學・天野勘左衞門・野村彦大夫・竹尾傳三郎・丸山權八郎・武島左兵衞・堀彦十郎・右野彌一郎御用屋敷、牛込御門内、（但牛込御門無二別條一。）朝比奈彌右衞門・野間鐵五郎・市川瀨兵衞・天野清三郎・高木伊勢守・矢島五郎左衞門・小宮山喜兵衞・小菅因幡守筒井治右衞門・阿部四郎兵衞・松平勘太郎・蜂屋孫十郎・宮崎若狹守・火消坪内惣兵衞役屋敷、稻生下野守・小栗主殿・中川進三郎・前田庄五郎・小池與左衞門・坪内久四郎・加藤久三郎・加藤善九郎・天野清十郎・美濃部一學・池田三大夫・河村靱負・上原因幡守・松平新助・沼間新五郎・疋田新九郎・遠山萬次郎・柴山小左衞門・三宅平藏、裏四番町、酒井下總守、九鬼左兵衞・松波左兵衞・末高半左衞門・山中忠左衞門・服部源五郎・新見又三郎、表四番町、間宮權左衞門、表四番町、松平美濃守（○勝房。）三番町、安藤出羽守、四番町、今村彦兵衞、同長田金左衞門・同神谷武右衞門・御留守居町、内藤甚介・長利二郎八・大久保新二郎・淺井傳藏・品川勝七郎・内藤政五郎・勝屋利右衞門・大久保兵之助・遠山主計・小笠原久兵衞・布施三左衞門・長谷川善右衞門・鹿倉意仙・布施藤次郎・松平阿波守（○蜂須賀宗員。）大久保伊三郎・酒井新三郎・中島淺右衞門・松平豐後守（○本庄資訓。）松平内膳正、先是迄ニ留ル。

未下刻、西丸下御用屋敷裏より飛火出火、兩御用屋敷不レ殘、吉川次郎左衞門・竹本佐渡守・岡村丹後守・水野壹岐守御預リ角矢藏燒、東際不レ殘。日比谷御門内に飛火、牧野越中守（○定賢。）松平内匠頭・青山大膳亮（○幸秀。）秋元但馬守（○喬房。）永井飛驒守（○直期。）井上河内守（○正之。）數寄屋河岸入口少々、山下町・鍋町・山王町・惣十郎町・瀧山町・こびき町半分、竹町不レ殘燒、鐵炮町飛火、元松平周防守（○松井康豐。）濱屋敷、松平陸奥守（○伊達吉村。）半分燒、森能吉兵衞・梶川三之丞・櫻井文大夫・龜井隱岐守（○因幡守鼓滿。）興。松平松二郎・山名牛之助・大島織部・尾張濱屋敷、有馬二郎兵衞妻木民部・川勝長八郎・毛利音之丞・小倉（マヽ）名不レ殘、稻葉佐渡守（○正親。）濱屋敷、是ニ而燒留ル。

——享保日錄

三月二十八日（○享保十七年。）晝九ツ半時、江戸西御丸下出火、御類燒壽光院樣御殿不レ覇都時代ノ火災

殘、裏御門先殘る。蓮淨院樣御用屋敷は殘る。土手側、竹本佐渡守・吉川二郎右衞門・岡村丹後守・水野壹岐守○忠定。不レ殘。御城兵庫の矢藏、牧野越中守○貞倶。永井飛驒守。數寄屋橋の內、秋元對馬守・松平內匠頭・靑山大膳亮・松平主殿頭○忠雄。山下町內、南柳木町內、加賀町不レ殘、惣十郎町・瀧山町・竹川町燒、木挽町・築地、森吉兵衞御徒頭。梶川三之丞御下屋敷うら門通燒、松平因幡守○輝規。うら門通、松平陸奥守○伊達吉村。櫻井文大夫・龜井周防守・松平忠次郎・山田牛之介・大島織部・尾州御役屋敷少燒、朽木民部・川勝長八郎・稻葉丹後守御下やしき・毛利音之允・小倉孫太郎・深川本誓寺。

是より芝の方、田安御門御堀端安藤出羽守・松平阿波守○蜂須賀宗英。松野豐後守・松平內膳正・長田金左衞門・神谷武右衞門・町野豐後守・今村金兵衞・三宅圖藏・九鬼左兵衞・同十左衞門・山口忠右衞門・神部源五郎・松平美濃守、飯田町、坪內惣兵衞・木下伊賀守・小宮山喜兵衞・宮崎若狹守・同七郎右衞門・蜂山孫十郎・小菅因幡守・筒井治右衞門・同久三郎・坪內惣兵衞・松平勘太郎。

牛込御門之內、勝屋治右衞門・田宮五兵衞・同庄右衞門・小笠原久(マヽ)衞・大久保伊三郎・長谷川吉右衞門・早川庄七・高木伊勢守御書院番矢島次郎左衞門・稻生下野守・萬年佐右衞門・阿部四郎兵衞・野間鐵五郎・朝比奈新三郎・方川瀨兵衞・上原因幡守・河村靱負・志賀快庵・天野清七郎・定川新九郎・松平新助、坪內久四郎・加藤吉九郎・同久次郎・同善九郎・小池與左衞門・中川近三郎・高木主殿・沼川新五郎・前田庄五郎・服部金左衞門・內藤政五郎・大久保新六郎・淺井傳藏・柴山小右衞門・遠山萬次郎・梶川與惣(マヽ)郎・內藤甚助・毛利次郎八・末高半右衞門・鵜飼藤助・酒井主膳正・池田三大夫・美濃部一學・葛山長九郎・中根茂助・下條半兵衞・牛込揚場、土岐縫殿助、揚場町一丁目、曾根茂右衞門・鈴木彌惣右衞門・上田安右衞門・松平兵藏・島覺右衞門・三島清左衞門・蜂屋市左衞門・佐野與之助・神保宗右衞門・堀七郎右衞門・堀內源右衞門・木村傳五郎・津野庄左衞門、小日向馬場、旗元衆數多、半込小日向水道町不レ殘、服部坂、菅谷吉次郎・國爪市右衞門・田中武助・名取源二郎・大河內孫三郎、服部坂の臺燒、中條大和同所下やしき。櫻井權左衞門・松平三郎次・永野左門・橫山勘介・本多甚右衞門・丹羽靱負・朝比奈惣左衞門・三木平八郎・小粟七郎右衞門・福王平十郎・永野賴母・森川孫七郎・新庄源太郎、茗荷谷、林式部・曹洞宗明照寺・馬場新右衞門、小日向五軒町不レ殘、御手洗、高林市左衞門・岩下久次郎、五軒町、山川安左衞

門・安藤對馬守下やしき・筧半四郎・中川市右衞門・少林庵・馬場喜八郎・大久保助之丞、御簞笥町、菅沼藤七郎・竹屋四郎兵衞・森川新太郎・護國寺、此通迄不レ殘燒申候。津輕采女、深川本誓寺・圓珠庵、不動堂の脇より出火、本郷少し、脇前町通り小原町一二丁目・小石川金杉稻荷後前方燒申レ候。淺草出羽守殿堀端にて、凡二百五十人死人在レ之レ候。右の外死人夥敷事にて未だ數知不レ申レ候。凡竪百二十町横は大小不レ知。

第一番出火

三月廿八日晝九ッ前、江戸淺草新寺町新道西側本通りより五軒目、菊屋五郎左衞門と申檜物師より出火、西風にて東本願寺表門前通り町屋寺方燒、俵町觀音の末通り町、通寺方一向に、神鳴門前川端迄不レ殘燒、花川戸材木町・竹町・並木町・駒方町・すわ町・黒舟町・御馬川岸御藏無二別條一、御藏前森田町・片町・鳥越明神・本多肥前守（○政成。）屋敷、俵屋町・天王町・新堀端寺方不レ殘やけ、かわら町・かや町・平右衞門町、川端柳橋迄やけ、兩國通は無二別條一、右御馬川岸の火本庄埋堀へ飛火致、割下水通津輕出羽守殿（○信著。）より三ッ目橋通り、鐘つき本堂迄燒。夫より北風にて、二ッ目通り一ッ目迄、回向院うしろへ通り、一ッ目樋兩側不レ殘、御船藏

無二別條一、あたけ町屋、辨天・八幡旅所、寺方町より新大橋詰迄不レ殘燒、六間堀通神明・井上河内守殿やしき、高橋向ひ海部大工町、靈岸寺地中不レ殘燒、本堂は殘り、夫より深川元木場迄町屋不レ殘、八幡の方無二別條一、同夜五ッ時鎭り申レ候。

第二番出火

三月二十八日、晝九ッ半時、西丸下石川近江守（○總茂。）新屋敷、表御用やしきの內より出火仕レ候。水野壹岐守殿岡村丹後守殿・酒井松軒殿・竹本土佐守殿兵庫の矢藏。夫より外牧野越中守殿・秋元但馬守殿・井上河內守殿・松平內匠殿・靑山大膳亮殿・松平主殿殿・永井飛驒守殿燒、馬場先き二ッ目、日比谷御門、すきや橋御門、右三ヶ所門は殘り、夫より町に出、數寄屋川岸一丁目・山下町・筑場町・さん木町・森山町・內山町・家、表町にて燒留り。但し山下御門殘り申レ候。

第三番出火

同廿八日晝八ッ時、木挽町五丁目表より出火。仙石因幡守殿・松平陸奥守殿中屋敷燒、西本願寺表門通、川向ひ旗本衆燒、稻葉丹後守殿・松平安藝守殿・尾州濱屋敷少し火ねぶり、是よりは海手故に火鎭り申レ候。御濱御殿は無二別條一。

第四番出火

同廿八日八ツ過時、西北風にて大塚本傳寺近所、浪人衆家より出火。夫より大塚大町不レ殘燒、御簞笥町少殘り、水戸大草殿・安藤對馬守殿・原の御屋敷不レ殘やけ、夫より茗荷谷へ燒下り、服部坂はやけ貫、切死丹坂・金剛寺坂迄燒、服部坂にて坪内惣兵衞殿・大草主膳殿・堀田豐五郎殿・名取源次郎・遠藤内藏之助屋敷近所寺々不レ殘、大日坂御組やしき、久世讃岐守殿御下屋敷、夫より小日向水道町より馬場近所迄やけ、牛込水道町、赤木明神表門前不レ殘燒、寺町通は殘り、表通り、津久戸明神裏通り、かるこ坂、牛込上ヶ場へやけ貫、牛込御門内へ飛火、池田三大夫殿・稻生下野守殿御やしき・坪内惣兵衞殿御役屋敷、表裏四番町不レ殘、此所は廣小路にて火とまり申ℓ。

第五番出火

同夜亥中刻、小石川とび坂の近所、一町餘燒。町屋計。

第六番出火

委細の書付、此次二三枚目にあり。

同夜子の刻、本郷すがも大原町三町程燒、少し小屋敷在レ之ℓ。右の諸方の火、寅の刻にとまり申ℓ。

三月廿八日、江戸火事、神社寺院幷に武家方類燒覺

淺草分、

一、火元下谷新寺町槍物屋五郎左衞門、是より東國寺本堂殘る、寺中不レ殘、正覺寺方丈計、二葉金六（御小人目付。）松田傳十郎同。行安寺表側計、本立寺本堂は殘り、落合權藏・高須十四郎・二葉丈助・鳥羽甚五左衞門・池野谷權介・同新助・伊藤甚八・笠倉彌一右衞門・朽木和泉守御組西尾彦九郎・同谷藤九郎・同松井仙右衞門・同谷九八郎・川口市之介・實相寺・仙藏寺・本法寺・駒形堂・大行寺・田中元吉・堀田相模守・同出羽守・金龍寺・桃林寺・志村半七・外山藤九郎・同源助・筑山平八・伊場元右衞門・野間孫次郎・常見武右衞門・藤田半左衞門・大口良左衞門・松平半十郎・日根彌左衞門・八木三郎四郎・同新三郎・依田民部・玉置七大夫・板倉帶刀・佐山新八・淨念寺・多賀八大夫・廣瀨三右衞門・寺田三節・三浦仙右衞門・長堀丈助・同彌二郎・松平圖書・朽木和泉守役屋敷少々燒、松平民部・心月院・善照寺・龍寶寺本堂殘る、東漸寺・井上十左衞門・大家新兵衞・本田中務・黒部善右衞門・永井半四郎・松平甲斐守殿屋敷、大圓寺・佐竹壹岐守。右凡町積り竪廿町程横十町程。

一、飛火の由にて、阿部伊勢守・本庄右京御中屋敷不レ殘、小笠原外記・松平久米之

助・松平大學頭・同肥前守・木村主水・實相寺本堂殘、松平肥前守・華嚴寺・山岡源右衞門・若藤源太郎・比企市十郎・青木勘十郎・井戸新左衞門・山田金十郎・伴利兵衞・山本五郎兵衞・乾宗水・同茂左衞門・齋藤彦右衞門・神尾十郎左衞門・同源大夫・井上遠江守・土屋清右衞門・長谷川藤十郎・小野寺彦十郎・稻生六左衞門・諏訪勘兵衞組眞崎伴右衞門・美濃部清兵衞・横地萬次郎・清水杢之助・本間十左衞門・日野小左衞門・間宮利右衞門・近藤小兵衞・近藤平三郎・石原彦太郎・齋藤伊右衞門・望月新六・內藤丹波守下やしき燒、上やしき殘、德山五兵衞。此所町積凡竪廿町程に橫十町程。

三月二十九日、右之檢證、長谷川伴右衞門・大森藤助。

本所方、

一、同日巳の中刻出火。德山五兵衞・勝野三右衞門・山口孫次郎・榊原權右衞門・近藤源次郎・山本五郎左衞門・高橋半次郎・大原彌五右衞門・杉山清九郎・京極四郎右衞門・永井彦三郎・池田玄達・佐野宇右衞門。此町積凡そ橫一町半程竪三町程。

深川方、

一、夫より飛火之由、小出甚太郎・夏目次郎左衞門・小笠原甚藏・那須與市・加藤伊織・久松彌市・織田左兵衞・近藤平八・中山勘解由・井垣作右衞門・本多士郎八・島津式部・曲直瀨玄良・牧野一學・荒川助九郎・本多內藏介・土屋平八・菅沼織部・岡田平三郎・小笠原壹岐守下やしき少計・井上河內守中屋敷、松浦右近・曾我權十郎・坂部三郎兵衞・本誓守・靈巖寺本堂殘る、久世隱岐守・松平舍人・狩野梅言西方少計殘る。此所町積凡竪廿六町程、橫四町程。

右の檢證　笹部半次・大關定六。

一、同日午の中刻出火、大塚上町久貝惣左衞門家來馬場次郎兵衞借屋より出火。室賀兵庫・高源寺・水野勘八・安藤對馬守下屋敷・森川新太郎・加藤左兵衞・竹屋四郎兵衞・菅沼藤十郎・松平大學頭・大久保酒ヤ之丞・馬場喜八郎・廣戶半兵衞・根來權左衞門・岡田萬之助・岡本半兵衞・久保市兵衞・野口兵三郎・小栗庄右衞門・若山瀨兵衞・大米作左衞門・平野吉左衞門・笠屋忠八・近藤元右衞門・向井兵庫組屋敷不殘、足立小左衞門・佐々木五右衞門・植田長勝・同長八・加藤傳左衞門・內藤十次郎・津田武右衞門・丹羽五郎右衞門・前田萬之助・甘利作右衞門・戶田右近將監下やしき長屋、新庄源六郎・森川孫七郎・由良新六郎・表長屋計、水野賴母・福王平十郎・小栗十郎左衞門・三木平八・朝比奈惣右衞門・同治兵衞・坪內惣兵衞・丹羽靱負・

本多甚右衞門・平井由行・川崎一學・品川庄五郎・神谷助七郎・口口宇兵衞・鈴木藤
大夫・壽光院御附高木七兵衞・岩下久次郎・馬場新五右衞門・小野庄兵衞・同圖書・
藏田新右衞門・藏林五郎右衞門・佐久間門八郎・大島五郎右衞門・栗原長兵衞・森
彦七・山口半六郎・月光院樣御附山口紋右衞門・久世隱岐守下屋敷、谷戸助十郎・
遠山藏之進・河野小右衞門・大圓寺山野邊主水正・大江(河)内孫太郎・名取源次郎・田
中庄右衞門・國領市右衞門・菅沼善次郎・近藤半十郎・根岸又兵衞・大番組頭竹尾
仲三郎・寬吉太郎・門奈定之丞・上田助右衞門・丹羽五郎右衞門・組大岡甚之丞・飯
田平十郎・加藤平橘・中山備前守・松崎善兵衞・朝倉小左衞門・小笠原金兵衞・安井
權藏・鈴木彌惣右衞門・山田安右衞門・松平兵藏・同助之進・島覺右衞門・三島清左
衞門・蜂谷市左衞門・土岐縫殿助・戶田佐次郎・野間鐵五郎・阿部四郎兵衞・萬年作
右衞門・稻生下野守・米山市之進・矢島次郎右衞門・高木伊勢守・小栗主殿・中川新
三郎・內藤政五郎・加藤久次郎・秋元隼人正組加藤善九郎・坪內久四郎・松平新助・
疋田新九郎・天野清十郎・河村靱負・上京因幡守・葛山長九郎・美濃部一學・池田三
大夫・梶川與惣兵衞・酒井下總守・三宅平藏・九鬼佐兵衞・鵜殿藤九郎・松浪左門・山
中忠左衞門・同源兵衞・毛利次郎八・內藤勘助・遠山萬次郎・芝山小左衞門・淺井傳

藏・大久保喜六、沼田新五郎・小池與左衞門、大久保兵之助・朝比奈新三郎・市川瀨
兵衞・早川勝七郎・勝山治右衞門・同甚五右衞門・同庄右衞門・小笠原久兵衞・長谷
川○(名脫歟)。大久保伊三郎・松平勘太郎・筒井作右衞門・同久三郎・小管因幡守・同伊右
衞門・蜂谷孫十郎・宮崎若狹守・小宮山庄之助・坪內惣兵衞・高木半右衞門・服部源
五郎・新見又三郎・雨宮權右衞門・安藤出羽守・松平美濃守・神谷武右衞門・永田金
右衞門・安藤出羽守・松平美濃守・木下伊賀守・松平內膳・同新五右衞門・松平安藝
守・松平豐後守・中島淺右衞門。右町積り凡竪廿七町程、橫十六町程。

四月一日、右檢證　長谷川伴右衞門・稻垣佐平。

一、同日申の上刻、火元內櫻田御用屋敷裏御長屋より出火。竹本佐渡守・吉川次
郎右衞門・岡村丹後守・水野壹岐守、隅御櫓、牧野越中守・秋元但馬守・松平內匠頭・
青山大膳亮・松平主殿頭・永井飛驒守・井上河內守。此所橫二町程、竪十三町餘。

一、夫より飛火の由、松平周防守中屋敷、同陸奧守中通やけ、大島織部・川勝長八
郎・松平忠次郎・山名牛之介・櫻井久大夫・龜井因幡守下屋敷、梶川三之丞・守能吉
兵衞・小倉孫太郎・毛利音之丞・妻木民部・有馬次郎兵衞・稻葉佐渡守中屋敷西の
方半分燒、尾張中納言殿濱御屋敷燒貫、御濱御殿前御堀端にて燒留り申ル。此

所竪八町程、横一町半餘。

三月廿九日、右檢證　岩塚治左衞門・河合平內。

今度大火に付、燒場御檢使被仰付ゐ。

右の御書付は、板倉近江守殿使家士黜檢所也。正紙には、火筋・町屋・路筋・委細註之。其文長、仍略之。以上。

——月堂見聞集

三月廿八日〇享保十七年。江戸廣德寺前ゟ巳刻出火、俵町ゟ同刻出火、兩國橋邊迄燒通、未刻松平大學殿〇賴貞。ゟ出火、牛込御門內迄燒通、又西丸下ゟも出火、申之下刻巢鴨町ゟ出火、酒井雅樂頭殿〇忠知。下邸後ニ殘る留る。所々追々廿ケ所餘出火ゟ云々。

——政鄰記

同〇享保。十七壬子年三月廿八日　山方太郎右衞門泰純處持田崎治右衞門秀滿御町奉行勤中日記

一、明日小林孫四郎殿に出會之義申談ゐニ、彦九郎に四ツ時行、咄申ゐ處、阿部河町ニ當り出火。折節北風烈西風少加申ゐ。中略。八ツ半頃、拙者淺草御屋敷に參ゐ、池田內匠頭樣御屋敷北之方御長屋御人數上り、豐前守樣御出、爲御防被遊御差圖ゐ。拙者義ハ、長局へ上り罷在ゐ。略。中內匠樣御長屋へ火移り、夫ゟ淺草御長屋へ北之方立並居ゐ御長屋面々何ゟ働ゐ得共、風下ニ成火移、其火則長局板屏に付、長局椽下ゟ廻り申ゐ。其節豐前守樣ニハ、御殿に御上ゟ被成御座ゐ故、最早御下り可被遊申上ゐる御引取、隨る拙者共下り申ゐ。七ツ過燒失。扨々可申樣無之儀ニ御座ゐ。

——國典類抄〇久保田藩。

烏越邸

同〇享保。十七年三月廿九日〇廿八日歟。又類燒ス。

本所邸

享保十七年三月廿九日〇廿八日歟。大火アリテ、此邸燒ス。鳥越邸モ同ジク災アリ。

築地邸

享保十七年三月廿八日、烏越ノ邸類燒セシカハ、內匠頭殿倚政此邸ヘカリニ移ラセ、四月六日烏越ニ歸ラセラレシ事、舊記ニ見エタレハ公邊御屆書ノ留。少シハカリノ館ハアリシニヤ。

——備藩邸考

金龍山淺草寺

駒形堂

享保十七壬子年三月類燒。淺草寺住職傳法院公英僧正代檜木二百挺被下置建立成就。

——文政寺社書上

十二月十日火災

享保撰要類集・觸書集成・萬年記・續談海・年代炎上鑑ヲ初メ、諸書記ス所有レトモ略ス。兼香公記〇編年史料收。四月十五日ノ條ニハ、「去月〇享保十七年三月。二十八日江戸大火、所々燒出、西丸見付燒失、騷動。其上戌下刻時分、自二西丸之奥虎間一燒出。此所尋常無レ火然ニ如レ此、只今吟味。仍西丸大納言〇徳川家重。以下殊外騷動之由沙汰。世上疑二尾州一。可レ恐々々」ト有リ。

三、十二月十日火災　左ノ如シ。

一、十二月十日〇享保十七年。夜戌下刻、赤坂御中屋敷御風呂屋ヨリ出火、御屋形廻リ不殘燒失、大澤之方町家七八軒類燒ス。

一、若公〇淺野宗恒。御上屋敷ニ御立退、其儘御住居。御再建ハ享保十九年ニ有レ之。

十二月十日〇享保十七年。戌刻、安藝守様〇淺野吉長。赤坂御邸ヨリ出火、御邸不レ殘、類燒も有レ之、子刻鎭。依レ之同日ヨリ御指控、十七日不レ及二御指控一段被二仰出一。

但、中邸之事故、類燒無之ハ得ハ、御差控ニ不レ及事之由也。

——侯爵淺野家回答

一、同年〇享保十七年。十二月十日戊ノ刻過、松平安藝守屋敷ヨリ出火、前之町屋迄少々

——政鄰記

ツヽ類燒。

私ニ曰、此安藝守やしきは、前々町家と書面に有レ之ハ得者、赤坂新馬場之屋敷成ル歟。

——年代炎上鑑

〔附記〕

正月九日（〇享保十八年。）

一、申刻、靈巖島湊町ヨリ出火、乾風烈、海際迄不レ殘燒ル。——柳營日次記

三月廿六日（〇享保十八年。）曉、御老中松平左近將監殿御役邸〔西丸下也。〕ヨリ出火、御類燒無レ之ニ付、不レ及二御指控一旨、廿七日被二仰出一。——政鄰記

一、同夜（〇享保十八年十一月朔日。）戌ノ刻、鍛冶橋御門内井伊兵部少輔居宅ヨリ出火。——年代炎上鑑

二月八日（〇享保十九年。）夜八ツ時、江戸麻布植村刑部大夫殿御やしきより出火、御屋敷不レ殘、凡そ一町程にて留る。——月堂見聞集

一、享保十九年甲寅年四月晦日夜酉ノ刻、神田雉子町西角小田切喜兵衞支配蟲川惣十郎屋敷番所ヨリ出火、惣十郎長屋計燒、五月朔日明六ツ時火鎭ル。

一、享保二十乙卯年九月晦日巳ノ刻、櫻田酒井石見守宅ヨリ出火一軒燒。——年代炎上鑑

廿年乙卯〇享保〇紀元二三九五年。十月六日壬申〇壬申、三正綜覽。麻布〇市内麻布區。眞田信弘〇彈

覇都時代ノ火災

正忠。**邸火ヲ失シ、飯倉**（○市内麻布區。）**三田**（○市内芝區。）**ニ延焼ス。**（○年代炎上鑑。續日本王代一覽。）

享保廿年火災　傳フ、

一、同夜（○享保廿年十月五日。）丑ノ中刻、麻布眞田源公忠屋敷ヨリ出火、谷町之臺ヨリ芝土器町邊、芝三田邊悉ク燒ル。西北風ニテ火事出來、其後北風計リニ代リ、土器町片側燒、夫より三田之方ニ押し申ス。

六日（○享保廿年十月。）江戸麻布火事アリ。　——年代炎上鑑

十月六日（○享保二十年。）芝御屋鋪類燒。（麻布谷町ヨリ出火。）　——續日本王代一覽

十月六日（○享保廿年。）曉、芝邸罹ニ池魚之災一。　——御當家年代略記（○高知藩。）

五日（○享保二十年十月。）

一、今夜丑刻比、溜池邊ヨリ出火、明六ツ過火止也。　——渭水見聞錄（○德島藩。）

自火在府有ニ類燒一

一、御屋敷出火之節松平左近將監樣ヨリ御書付被レ成ニ御渡一。左之通、

昨夜（○享保二十年十月五日。）居屋敷ヨリ出火之所、類燒有レ之ル間、普請三十日可レ被ニ差控一ル。

一、三十日至、左之通御窺、

私居屋敷普請之儀、兼テヨリ被ニ仰付一ル通、三十日差控罷在ル、不レ苦ルハヽ、燒失之場所圍計仕度奉レ存ル。此段奉レ伺ル。以上。

眞田彈正忠

十一月十四日

一、御屋敷內抱地有レ之ル得共、燒跡屋敷改御見分出レ之ル之事。

但、右御挨拶御免後、被ニ仰遣一ル事。

一、普請ハ御定之通、三十日至伺可レ申、其節板圍等可レ致事。

一、辻番所燒失ル得共、早速燒跡ニ假番所建、番人可ニ差置一ル事。

一、享保二十卯年十月五日眞田彈正忠樣麻布谷町御屋敷ヨリ出火、辻番燒失之節、左之通

眞田彈正忠居屋敷ヨリ出火之節、谷町之方辻番所燒失仕ル二付、其節右辻番所跡ニ假番所仕、當分番人差置申ル。早速御屆可レ仕ル處、未彈正忠遠慮仕罷在ル間、差控不ニ申上一ル。追テ辻番所普請仕ル節、猶又可レ奉レ伺ル。只今左近將監樣ヨリ不レ及ニ遠慮一旨被ニ仰渡一ル間、右之段御屆申上ル。以上。

十月　　眞田彈正忠家來　石川新八

右之趣御賴、御目付加藤彌次郎樣ニ御屆被レ申ル。尤燒跡假番所取立ル節、何方

元文元年火災

元文元年火災事蹟

も御斷不レ申レ。本文之通、御差控御免之節、御屆被レ申レ。

一、御番所御勤御當番レ得共、御相番樣ニ御賴、早速御交代之事。

一、御相番樣ニ御賴之義ハ、御用番樣ニ御口上書ニ而御屆之事。

一、出火之節、人數可レ差出レ哉、御伺之事

一、御番所御代、誰樣ニ被レ仰付レハヽ、御勤番之義御伺被レ成レ事。

——火災要覽

櫻町天皇元文元年丙辰〇紀元二三九六年。十月十五日乙亥〇乙亥、三正綜覽。神田裏猿樂町〇市内。内。〇市神田區。ニ延燒ス。〇柳營日次記。兼香公記。續談海。萬年記。續日本王代一覽。年代炎上鑑。

元文元年火災　ハ、十月十五日ノ災ヲ重ナル者トス。

十月十五日〇元文元年。

夜ニ入駿河臺出火ニ付、御老中方登城。

——柳營日次記

十月二十三日〇元文元年。癸未晴。自ニ高須權右衞門一申來。

十月十五日戌刻時分、富士南風强、出火御座レ候て、裏猿樂町伊藤若狹守御中屋敷少燒、夫ゟ駿河臺袋町へ飛火申レ。表猿樂町、袋町間中坊鍋五郎中屋敷無ニ別條一ニ、旗本十軒計燒失、戌下剋火留。

——兼香公記〇編年史料收。

十月十五日〇元文元年。

富士南風、暮時裏猿樂町伊藤若狹守中屋敷より出火、大久保六郎右衞門・山本六右衞門・瀧川久助、土手際下田内記・鈴木九太夫・堀又十郎類火。駿河臺土手際にて夜九ツ時に鎭る。

——續談海

萬年記・年代炎上鑑・續日本王代一覽其他ニモ此災見ユ。

〔參考〕火災後幕府罹災地ニ住スル旗下ノ士ニ金ヲ貸シ、瓦ヲ以テ屋ヲ葺カシムルコト、大成令ニ見ユ。

元文元辰年十二月十五日

大目付ゟ

神田橋外猿樂町・三河町・駿河臺邊、家作瓦葺ニ可レ仕レ。依レ之右之面々左之通拜借被ニ仰付一レ。部屋住之者ハ高半分之割を以拜借被ニ仰付一レ。來巳(元文二年)三月ゟ九月晦日迄ニ家作不レ殘瓦葺出來レ樣可レ致事。

屋鋪之内ゟ親類等ニ借し、家建させレ者有レ之レハヽ、瓦葺ニ致させ可レ申レ事。

拜借高割

拜借金高割金高、享保十三申年二月三日番町・麹町ゟ出レ同斷、尤上納之年數も前

條同斷ニ付、略ス。

元文二年七月十日

神田橋外猿樂町・三河町・駿河臺邊、先頃瓦葺被ニ仰付一候場所、火除之ため、ニ候得者不レ及レ申、何も當九月中迄ニ家作不レ殘瓦葺ニ可レ致候へ共、若追而可ニ申付一候ハヽ、追々延引之樣成事ハ有レ之間鋪事ニ候。防組合頭取之面々心を附、悉く瓦葺ニ申付、亀末ニ無レ之樣可レ致候。

右之通、頭取之面々ニも可レ被ニ相達一候。頭支配ニも頭取ニ申聞候段通達有レ之。頭支配方其頭支配ニも可ニ申聞一候。出來立候樣子、其頭取之者組合之作事致ニ見分一、亀末成處無レ之不レ殘出來るの段、當十月上旬頭取より石野筑前守・馬場三郎左衞門・能勢甚四郎ニも可レ被ニ相届一候。七月

〔附記〕金地院雜記云フ、

十日（〇元文元年十二月。）晴

一、南部甲斐守殿下屋敷今朝七ツ時、自火ニて不レ殘燒失、龜之助殿上屋敷へ被レ退、妙雲院殿ハ眞壽院殿へ御退之由也。

二年丁巳（〇元文二年。紀元二三九七年。）**二月八日丙寅**（〇丙寅、三正綜覽。）**改代町**（〇市内牛込區。）**邊火有リ、數街ヲ延燒ス。**（〇萬年記。年代災上鑑。金地院雜記。享保撰要類集。）**五月三日辛卯**（〇元文二年（紀元二三九七年）。〇辛卯、三正綜覽。）**下谷相生町**（〇市内下谷區。）**ニ火ヲ失シ、南風强ク、延燒金杉**ニ及ブ。寛

附記
元文元年十二月火災
元文二年火災二月八日火災五月三日火災

永寺本坊・淨圓院靈牌所・慈眼堂等災ニ罹ル。（〇柳營日次記。萬年記。憲法番所日次記。雀香公記。續談海。續日本王代一覽。增上寺日鑑。武江年表。泰平年表。）

元文二年火災　二月八日及五月三日ニ大火有リ。

一、二月八日火災　ハ、萬年記・年代炎上鑑・金地院記錄等ニ見エ、幕府罹災者ニ金ヲ貸シテ家屋ヲ改造セシム、事、享保撰要類集ニ詳カ也。

八日〇元文二年二月。ニ申刻、小日向改代町出火、南風服部坂・大日坂邊類燒。

——萬年記

一、元文二丁巳年二月八日未ノ中刻。

西南之風ニて、赤城下町家ゟ出火、改代町不レ殘、大日坂・服部坂上下、大塚臺迄延燒。山川安右衞門屋敷邊ハ殘ル。幕前鎭ル。

——年代炎上鑑

元文二巳年二月小日向邊大火後、松波筑後守伺之上、左之通申渡之由控來ル。

當二月八日燒失町屋之內、牛込水道町之分、服部權大夫・內藤權十郎屋輔境、清光院限り、此度瓦・蠣殼屋根ニ可レ致候。成たけ瓦葺ニ可レ仕候。畢竟火除のためニ有レ之候へハ、隨分情出し、普請可レ致候者も可レ有レ之候間、其分塗家・蠣殼屋

覇都時代ノ火災

根ニ可仕ハ。名主家主共働ニも成ハ間、成たけ瓦葺ニ仕ハ樣人別可申付ハ。依之右之分ニ拜借金七百兩被仰付ハ間、當年中普請仕立、返上納之儀ハ來午ノ暮ゟ十ヶ年賦ニ返上納可致事。

巳三月五日

右之通元文二年巳三月五日、名主家主月行事とも呼出申渡、翌六日樽屋藤左右カ衞門方ニて證文申付之。

町方瓦葺被仰付ハ節、公役金差免并拜借金被仰付ハ例書○中略。

拜借金被仰付ハ例　牛込水道町・同改代町・關口水道町・小日向水道町・東西古川町・松枝町。

右者元文二巳年二月致類燒ハ以後、瓦葺被仰付、拜借金七百兩五ヶ年賦○上書十ヶ年賦トス、孰カ是ナルヲ知ラス。上納之積り被仰渡ハ。

——享保撰要類集

九日○元文二年二月。

一、小日向清光院使僧、昨日之火事、門前并門類燒、口上書持參如左。御奉行へも御屆申ハ由、屆之。

覺

一、乍恐以書付申上ハ。昨八日之出火ニ而門并門前町屋類燒仕ハ。右之通御訴申上ハ。以上。

元文二巳年二月九日　　武州久喜甘棠院末小日向　清光院

金地院役者禪師

十一日元文二年二月。

一、小日向清光院來紹出合、火事之節水死之者可取置願ニ付、添簡願來、書付如左、添簡遣。

差上申一札之事

小日向水道町甚兵衞店松右衞門悴西傳ゟ申道心、當八日之急火ニ而水死仕ハ。右西傳儀拙僧旦那ニ御座ハニ付、取置申度奉存ハ。無相違被仰付ハ樣、御添狀奉願上ハ。以上。

元文二丁巳二月十一日　　清光院　周貞印

金地院役者禪師　　——金地院記錄

五月三日火災

二、五月三日火災　ハ、下谷相生町ヨリ金杉迄延燒シ、東叡山ニ火移リ、寛永寺本坊其他堂坊燒失スル者多シ。

覇都時代ノ火災

五月三日〇元文二年。未后刻、下谷相生町より出火、戌刻金杉四丁目ニて火鎮。

火事ニ付、老若登營、東叡山へハ本多中務大輔〇忠良。相越、出火ニ付御尋兩度上使。

少老西尾隱岐守(〇忠尚)
同御側衆澁谷和泉守(〇良信)

日光准后〇公寛法親王。
同新宮〇公遵法親王。

火事ニ付、立花飛驒守〇貞俶。牧野民部少輔〇忠周。土井辨之助〇利延。松平近江守〇定就。何れも上野へ相詰、尤大手組火消より被レ遣レ之。

四日日光准后使僧、昨日火事ニ付、兩度上使被レ遣レ御禮也。

御三家ゟ同斷ニ付、御機嫌伺使者被レ差レ上レ之。

五日

時服十。夜著蒲團三。
時服七。夜著蒲團二。

上使御側衆小笠原石見守(〇政矩)
日光准后

上使同人
日光新宮

右之通被レ遣レ之、是一昨三日御本坊燒失ニ付、但當分御座處觀成院・春性院へ上使相越。

一昨三日上野出火之節、風烈之處、早速罷越、嚴有院樣御靈屋精出防レ之段、達御耳レ。此段可レ申聞旨上意レ。

土井辯之助

右之通、伊豆守〇松平信祝。傳達レ之。

七日東叡山淨圓院樣〇德川吉宗生母巨勢氏。御位牌、寶樹院樣御靈屋へ被レ爲レ入付、爲レ御名代、御側衆巨勢縫殿被レ遣レ之。

本坊炎上ニ付、准后ハ觀成院、新宮ニハ春性院へ被レ相移レ付て、御禮使僧被レ差レ上レ之。

——柳營日次記

五月三日〇元文二年。

一、淨圓院樣御位牌所炎上ニ付、爲レ伺二御機嫌一、明日萬石以上之面々、月番老中能登守〇松平乘賢。宅ニ使者可二差越一レ事。

一、在國在邑之面々ハ、飛札可レ被二差越一レ事。

一、溜詰高家衆御奏者番幷三番頭・奏者之間御役人ハ、御本丸・西丸ニ平服ニて爲レ伺二御機嫌一可レ有二登城一レ。其外ハ不レ及二其儀一レ事。

右之通可レ被二相觸一レ。

此日以二市正一示レ之。

一、昨三日（元文二年五月。）上野御本坊幷地中拾八院類燒。殊ニ淨圓院樣御靈屋御炎上。依レ之公方樣爲レ窺二御機嫌一、方文御使僧として、天陽院御役人廻り被二相務一。但、三御月番御側衆迄ニ。

一宗宋ニ〆類燒ハ、下谷安樂寺而已ニ。

——增上寺日鑑

五月三日（元文二年。）江戸烈風、下谷相生町ゟ未之刻出火、下谷廣小路ゟ花町過半燒失、上野黑門ハ殘、常照院之並十七ケ寺、御本坊、淨圓院樣御靈屋不レ殘燒失。夫ゟ坂本町、金杉三丁目迄燒拔、暮頃鎭。廣德寺ハ別條無レ之。御近所火消一番岡田一平太・二番高田知左衞門、以二御人數一三四ケ所消留。火事場見廻り御役池田左門殿見二屆之一也。類燒人共と相見へ、天澤寺方迄番之邊ニ飢人三十人餘來り有レ之ゟ付、前々ニ〆もケ樣之砌つくね飯ニ〆も被レ下レ候間、御臺所ニ申談、可二差出一之旨、聞二番古屋傳右衞門言上一、伺之通被二仰出一。

一、淨圓院樣御位牌所炎上ニ付、爲レ伺二御機嫌一萬石以上之面々、月番宅迄使者可レ被差越一レ、在國等之面々ハ、飛札可二差越一旨等、今三日大御目付衆ゟ御書付來、今夜御伺ニ〆得ハ尙更宜敷旨ニ付、同夜御用番宅ニ古屋傳右衞門御使相勤レ候事。

一、同月十日、御用番松平伊豆守殿（○信祝。）ニ聞番被二召呼一、三日火事之節、此方樣御人數被二指出一防留、精を出し候旨、御書立を以被二仰渡一。依レ之爲二御禮一伊豆守殿ニ御馬廻頭一由比五郎左衞門御使ニ被レ遣。同十六日左之通被二仰出一。

晒布二疋宛　御目錄、岡田一平太。　高田知左衞門。

右、今月三日火事之節罷出精出相勤、消留も有レ之ニ付、御喜悅被二思召一レ、依レ之御目錄之通、拜領被二仰付一レ段、遠田勘右衞門を以被二仰出一、足輕小者迄之者ニも拜領物仰二仰付一。

——政鄰記

九日（○元文二年五月。）曇夕雨。江戸當月三日出火、上野御本坊不レ殘御類燒幷廿日御佛殿燒失之由。其外橫七八町長一里計燒失之由、飛脚ゟ申來由、大森三郎兵衞ゟ申來也。

日光兩宮樣へ御使掃部、御里坊迄御類燒御見舞也。若御所ゟ同斷。取次大澤常件。

右日光樣御類燒之事、葉室家へ聞合レ候處、則二條表ゟ申來、葉室家ゟも御見舞

書狀指出ゐ由也。淨圓院殿御位牌所類燒之由申來也。

五月九日〇元文二年。丁酉陰、未下刻雨降、入レ夜風烈。去五月三日未刻、神田向柳原相生町ヨリ出火、下谷加藤出羽守・小笠原信濃守・井上山城守、それより上野御本坊不レ殘、佛殿・宿坊・旗本大分燒、金杉・美濃輪迄燒ゐ由、飛脚宿言上ス。十日戊戌雨下。輪王寺兩門以レ使關東本坊燒亡爲二見舞一、尤自二大將一有傳也、傳聞、當時上野寬永寺火消ハ有馬玄蕃頭〇賴僮。也、依二無人一ふせく事不レ能沙汰云々。

——兼香公記〇編年史料收。

元文二年五月三日淨光院〇圓カ樣御靈屋及ヒ本坊燒。

——東叡山志料

一、五月三日〇元文二年。南風强、柳原佐久間町の脇相生町より出火。下谷に燒行、上野御本坊・兩御殿・慈眼堂其外坊數多類火。暮過箕輪にて鎭る。

——續談海

一、同年〇元文二年。五月三日未ノ刻西南風。筋違橋外神田佐久間町ゟ出火、下谷廣小路通り池の端町・上野黑門前御徒町・廣德寺前通り、坂下〇本カ金杉邊迄燒失。今日之出火ニ上野御本坊并淨圓院樣御靈屋抔燒失。東之方坊中燒ル。夕方ゟ小雨降出し消申ゐ。

——年代炎上鑑

萬年記ハ、此災ヲ五月二日ニ繫ケテ、午下刻下谷松永町出火トシ、續日本王代一覽ハ、三日未刻、江戶下谷八間町ヨリ火出ツトス。武江年表泰平年表皆後者ニ同シ。若夫歷代災上鑑樂西坊物語ヲ引テ、五月四日〇元文三年。小傳馬町より出火、神田柳原向より下谷不レ殘、上野の山內へ燒入、山內寺々御本坊迄類燒し、御靈屋も燒失して、谷中にて止る。ト傳フル者、或ハ此災ヲ誤リタルニ非サル歟。三年五月四日ニ然ク大災有リタルコト、他ニ所見無シ。

〔附錄〕續談海云フ、

十二月廿六日〇元文二年。夜九ツ時、赤坂御門の內松平幸千代屋敷御隱居天岳院殿長局より出火、北風にゐ南隣土井八助并岡部美濃守類火也。

三年戊午〇元文三年。〇紀元二三九八年。正月廿九日壬午〇壬午、三正綜覽。下谷無緣坂〇市內。火有リ。〇柳營日次記。元文日記。政鄰記。年代災上鑑。十二月廿九日癸未〇元文三年(紀元二三九八年)〇癸未、三正綜覽。淺草俵町〇市內。火有リ、本所〇市內。ニ延燒ス。〇續談海。政鄰記。年代災上鑑。

元文三年火災事蹟 正月廿九日火災

一、正月廿九日火災　顚末左ノ如シ。

附記 元文二年十二月火災

元文三年火災 正月廿九日火災 十二月廿九日火災

二十九日〇元文三年正月。

一、九時、下谷無縁坂邊出火、及二大火一。

養仙院樣〇八重姫。之御家形に風惡敷候ニ付、板倉佐渡守御越、大岡右近被レ遣レ之。

——柳營日次記

二月三日〇元文三年。

此間養仙院樣御屋敷邊出火之時分、御留守居罷越レ哉被レ尋レ候へハ、不二相越一レ。

此方より不二申付一レ候へてハ不二罷越一レ由、卽瀧川播磨守差越レ、其段達二御耳一レ處、

若何とそ前方紛れたる事ニて、其心得ニ哉、向後ハたしかに方角不レ宜と申

火事ニハ、其御守殿に伺ニ不レ及可二相越一レ。如何可レ有レ之哉ゟ申程之疑鋪火事ニ

ハ、相越ニ不レ及レ。拠又同役病人等有レ之、御人少ニて難レ參時ハ、其段其時分月番

に申居、御用人にも其旨可二申遣一事。

右之通可二申聞一由、加納遠江守〇久通。を以被レ仰レ之。

右御留守居松平主計頭有馬出羽守に左近將監〇松平乘邑。達レ之。

——元文日記〇年代炎上鑑異事ナシ。

正月廿九日〇元文三年。江戸無縁坂講安寺門前町家ゟ出火、同寺、造酒丞樣御本家、

幷御長屋、出雲守樣御長屋通十五筋、此方樣割場御作事所火消道具置所御類

燒、午上刻出火、未刻鎭火。

二、十二月廿九日火災　顚末左ノ如シ。

廿九日〇元文三年十二月。戌刻、淺草田原町出火、駒形堂燒失、其近邊及本庄類燒。

——萬年記

十二月廿九日〇元文三年。戌刻、江戸淺草西中町より出火、並木町、諏訪町邊迄燒失、

烈風、本庄に飛火、五六ヶ所燒出、丑刻鎭火。

——政鄰記

金龍山淺草寺

駒形堂

元文三戊午年十二月廿九日類燒。以後借堂ニ有レ之。

——文政寺社書上

一、元文三年極月小廿九日

夜淺草俵町より出火、本所に移り、餘程燒る。

——政鄰記

舊臘廿九日〇元文三年十二月。夜出火之節、筋違に土屋左門樣〇篤直。御固メ被レ成レ處、給

人衆之馬乘はなし被レ申レ候へハ、欠出し行方しれす成レ候由。此馬新吉原に逃行、

西田屋ゟ申五丁町の名主とらへ置ハ處、右之御屋鋪に聞へ、去る七日〇元文四年正月。御馬御先樣へ差上ハ、其節西田屋之某發句仕、土屋樣を祝奉りハ。又五町町をも祝申ハる、一句有之。右の義ニ付、御目錄數多被下置ハ。

元文四己未の元日、日本堤柳町に駿馬欠込しを止置ハ。是土浦大守公之御馬なり、五巷の內就中僕住里の吉相ならすや、同七日御馬御屋形に歸參、殊ニ御屋形より柳町艶廓惠方に當れハ、日の初より御家門御繁榮を祝し、春駒の一筆を捧奉るものなりし。

立歸る春惠方から鐫(ツキケ)か那。

宮戸川の上り柳町老漁庄司　芳　茄　齋　拜書

春駒や未のあゆみ客の脚

同　人

——讀談海

一、同年〇元文三年。十二月廿九日戌の刻、淺草田原町ゟ出火、三間町・諏訪町河岸迄燒、本所石原に飛ひ、德山五兵衞近邊埋堀邊ゟ梅屋敷之方迄燒、鎭ル。

——年代炎上鑑

附記

元文四年正月火災

元文四年火災

正月十九日火災

三月四日火災

元文四年火災事蹟

正月十九日火災

〔參考〕享保撰要類集ニ、

元文四年未二月朔日、本多中務大輔殿御渡ハ御書付

去年極月廿九日淺草ゟ出火、本所迄燒失之內、並瓦又ハ蠣殼葺等ニて相殘ハ處も有之、大火ニ不罷成ハ條、燒跡之者共、此節普請之儀成たけハ並瓦・蠣殼葺・塗家等致普請ハ樣可相心得ハ。畢竟火除之事ニハ間、町々此旨相心得ハ樣に可申觸ハ事。

未二月朔日

〔附記〕萬年記ニ、

元日(〇元文四年正月。)亥下刻、小石川傳通院近所出火、松平玄蕃頭類燒。(〇年代炎上鑑ニモ、餘程燒ルト有リ。)

四年己未〇元文〇紀元二三九九年。正月十九日丙寅〇丙寅、三正綜覽。佃島〇市內京橋區。火有リ。〇享保撰要類集。三月四日庚戌〇元文四年(紀元二三九九年)〇庚戌、三正綜覽。湯島三組町〇市內本鄉區。火有リ、柳原〇市內神田區。ニ延燒ス。〇續談海。享保撰要類集。年代災上鑑。

元文四年火災　重ナル者兩度。

一、正月十九日火災　享保撰要類集ニ見ユ。

元文四未年三月十二日松平左近將監殿〇乘邑。に上ル

佃島獵師共御金拜借奉願ハ儀申上ハ書付

伺之通欠所金之内を以貸渡可レ申旨被二仰渡一奉レ畏レ。

未〇元文四年。三月十四日　　松波筑後守〇正奉。　石河土佐守〇政朝。

佃島獵師共願出レハ、近年打續不獵ニ而、困窮仕罷在レ處、當正月十九日同處之内より出火仕、獵師共家業ニ罷出、防可レ申人數も無二御座一、其内風烈ニて大火ニ罷成、網舟、之道具幷二家財等一迄、急火ニて類燒仕、渡世可レ仕樣無二御座一、難儀至極仕レ。佃島之義ハ前々より御菜等上ケ、網御用等相勤來レ處、右之通類燒仕レ故、妻子相育シ可レ申手便も無二御座一困窮仕レ。御慈悲を以御金千兩拜借被二仰付一被レ下レ樣ニ奉レ願レ。返納之義ハ來申年〇元文五年。より巳年〇寛延二年。迄十ヶ年ニ上納可レ仕由、名主差添一同ニ願出申レ。

右之通願出レ間、吟味仕レ處、當正月十九日風烈ニて、佃島惣家數百六十軒餘之處、百四十軒餘類燒仕、網幷船道具家財等迄燒失仕、渡世難レ仕段相違も無二御座一、佃島之儀網御用等も相勤レ者共故、拜借被二仰付一レ先例も御座レ間、千兩相願レ共、類燒之分百四十一人、此度金子五百兩拜借可レ被二仰付一レ哉、奉レ伺レ。以上。

未三月十二日

下ケ札
元祿十五年三月佃島類燒仕レニ付、其節奉レ願金五百兩拜借被二仰付一レ。此度も本文之通拜借被二仰付一レハ、、欠所金之内を以相渡し可レ申レ。

元文四未年三月十四日松平左近將監殿ニ上ル

佃島家作之儀相尋レ趣申上レ書付

家作在來通仕レ樣ニ可二申渡一旨被二仰渡一奉レ畏レ。

未三月十四日　　松波筑後守　石河土佐守

佃島家作之儀、獵師共幷名主召呼相尋レ處、海邊故風當り强、蠣殼等ハ吹散保チ不レ申レ。並ヘ瓦等ニ家作仕レ義ハ、地形ゟ築立、柱等迄相應ニ仕レ義故、物入多掛り迷惑仕レ。其上七十年程以前高波ニて家作押流シ、レ節も、茅屋根崩れ不レ申其儘ニて流レ故、棟ニ登り助レ段申傳レ間、旁唯今迄獵師共不レ殘茅葺ニ家作仕レ。惣ゟ海邊ハ高波之ため、家作茅葺ニ仕レ旨承傳レ之ニ付、只今迄通茅葺ニ仕度旨申レ之レ。以上。

未三月十四日

松波筑後守
石河土佐守

附札
佃島之内、鍛冶屋一人藏造りニて罷在ハ外、庵室一ヶ所めマ、け瓦葺家作仕置ハ。此外不ㇾ殘茅葺ニて住居仕ハ。

三月四日火災

二、三月四日火災　ハ、

一、三月四日〇元文四年。

西風、神田明神下ゟ出火、柳原迄類火。河岸通リ薪ニ火移リ申ハニ付、其以後高積六尺限之傍示杭被ㇾ立ㇾ之。

——續談海

元文四未年九月廿四日加納遠江守殿〇久通。に繪圖壹枚添上ル。追々御好有ㇾ之、十月廿九日承付之通御下知。

筋違橋外河岸通并町々商賣高積之儀ニ付奉ㇾ伺ハ書付

當三月湯島三組町ゟ出火之節、筋違橋御門外神田旅籠町・同仲町・花房町・佐久間町類燒仕、御曲輪之内に火移りハニ付、筋違橋外ゟ和泉橋迄之内、燒失之町屋不ㇾ殘家作取拂、明キ地ニ可ㇾ仕旨被ㇾ仰渡ㇾハ處、御憐愍を以其以後右町々、御差圖之通丈夫成土藏造り瓦葺ニ家作仕、又ハ火除宜キ樣ニ瓦葺可ㇾ仕旨被ㇾ仰渡ㇾハ。佐久間町河岸通之儀、別ゐ前々申付ハ有ㇾ之處、薪材木高積有ㇾ之、類燒之節曲輪内にも火移り不屆ニ付、燒失之分地面被ㇾ召上ㇾハ。依ㇾ之筋違橋ゟ久右衛門町酒井左衛門尉屋鋪際迄、河岸通り向後材木薪其外火移り可ㇾ申品取拂掃地ニ仕、竹木炭薪等河岸通りニ一切差置不ㇾ申、右商賣仕ハ者ハ河岸ゟ諸色取揚ハハ、早速引取、若滯ハ共其日限りニ取入、河岸ニ差置申間敷ゟ申渡置ハ。

佐久間町ゟ久右衛門町迄之町人共相願ハハ、河岸通リ往還一樣ニ罷成、〆り無ㇾ御座ㇾハ。却ゐ他所ゟ商賣物揚置、町人共制道難ㇾ成、迷惑仕ハ間、繪圖面之通河岸堺ニ高サ五尺之矢來仕、銘々口を付置、商賣物揚引仕度ハ。左ハヘハ捨物等も不ㇾ仕、旁〆り宜相成ハ旨、矢來之義願出ハ。

右之通可ㇾ申付ㇾハや。

向後組與力同心差添、一ヶ月ニ一度宛相廻シ、右河岸通り之者不沙汰之筋も有ㇾ之ハハヽ、早々相咎、急度爲ㇾ改可ㇾ申ハ哉。

惣體町中材木薪并炭葭藁類商賣仕ハ者とも、高積仕、前々ゟ相觸ハヘ共、程過ハヘハ相守り不ㇾ申、猥ニ罷成ハ間、前々申渡ハ通、高積仕間敷旨、急度可ㇾ申付ㇾハ哉。

覇都時代ノ火災

薪炭其外高積之儀ニ付、享保十七子五月町々ニ高積仕間敷旨申渡レ候節、名主共左之通願出レ、其節朱書之通申付レ。

一、河岸通り積置レ薪幷炭　高六尺。

原朱書　此義は前々ゟ御定之通、四尺ゟ高ク積せ申間鋪レ。

一、同檜木板類　同七尺。

同　此儀書面之通可レ致レ。

一、同茅幷葭類　同四尺。

同　前々ゟ商賣物積置レ高さ四尺ニてレ間、書面之通可レ致レ。

一、町屋明地之内ニ右之類差置レ儀同七尺。

同　書面之通可レ致レ。

一、家之前ニ積置レ儀　同七尺。

同　書面之通可レ致レ。

但、隨分往還ゟ出張不レ申レ様ニ可レ致レ。

右、書面之通可二申付一レ哉、奉レ伺レ。以上。

未九月

石河土佐守

水野備前守

元文四未年十月二日加納遠江守殿ニ上ル

筋違橋御門外佐久間町河岸通材木薪等置レ儀申上レ書付

一、筋違橋御門外ゟ和泉橋迄之間幷酒井左衛門尉○忠寄屋鋪迄、神田川筋ニ材木等置レ高サ之儀、三尺限りニ積置可レ申旨、享保十一年同十五年右河岸通町ニ藏地御免被二仰付一レ節、急度申付レ。尤竹木者立置、薪商賣物三尺ゟ高積置申間鋪旨堅ク申付置レ儀ニ御座レ。以上。

未十月朔日

石川土佐守

元文四未年十月十七日加納遠江守殿ニ上ル

建置レ竹木ニ早ク火移りレ哉之譯、相尋レ趣申上レ書付

一、昨日被二仰渡一レ御書付之趣、竹木伏置レふ建置レふ、竹木建置レふニハ火粉吹かけレても燃付レ事遲ク可レ有レ之レ處、當三月四日湯島ゟ出火仕、柳原邊ニ燒出レ節、建置レ竹木ニ早ク火移りレふ申說有レ之レ。是ハ其所ニ火移り安き物積置、夫ゟ建置レ竹木ニも火移りレ事ニ御座レ哉又ハ殊之外高ク建レ竹木ゆへ吹散シレ火粉もかゝりやすく燃付レ哉、畢竟ハ其邊之町屋等燃揚り不レ申前ニ竹木ニ火移りレ哉、若又ハ町家幷積置レ材木薪抔火移りレ候、建置レ竹

木も燒失ゐ哉、建置ゐ竹木ハ高ク ゐ故人目ニ掛り安ク、右之通申ゐ事ニゐ哉、
此處得ゟ承糺可レ申旨被二仰渡一ゐニ付、私共組與力共相廻り、右之譯爲二相尋一ゐ趣、
左之通。

右之場所ニて相尋させゐ處、當三月四日同所三組町ゟ出火仕、風烈敷、風下金
澤町ニ飛火仕、大火ニ罷成、夫ゟ花房町之方ニ燒出、利根川通船請負人屋鋪前
ニ古木大分積置并筈葺大工小屋、又者薪屋ニ有レ之ゐ龐朶抔ニ火移り、夥敷火
粉吹立、右之火勢ニて佐久間町一丁目河岸ニ有レ之ゐ立材木輪木一ヶ所火移
りゐ樣ニ見請申ゐ。其外河岸ニ有レ之ゐ材木之義ハ、佐久間町ニ火移りゐ以後、
右火勢ニゐ燒出ゐ樣ニ見請ゐ由、申レ之ゐ。

湯島邊

神田佐久間町

右之場處ニて爲二相尋一ゐ處、三組町ゟ出火仕間もなく、金澤町ニ飛火仕、夫ゟ花
房町ニ吹付、右町内ニ有レ之ゐ古木又者龐朶抔ニ燃付申ゐ。其後山本町ニ火移
り、佐久間町ニ燒出、河岸通ニ有レ之ゐ材木等不レ殘燒失仕ゐ由、申レ之ゐ。

同旅籠町邊

出火之節土手内ゟ防罷出ゐ者共、

柳原土手町
神田須田町
町人共

名主 善右衞門

右之者共ニ爲二相尋一ゐ處、當三月四日組合人足召連、柳原土手際ニ欠付、火粉防
申ゐ處、花房町ニ燒出、火勢別て強ク、佐久間町一丁目河岸ニ有レ之ゐ材木輪木
一ヶ處燒申ゐ。其後山本町・佐久間町一丁目ニ火移り、右火勢ニて河岸ニ有レ之
ゐ材木共燒失仕ゐ樣及レ見ゐ由、申レ之ゐ。

右相尋させゐ處、書面之通御座ゐ。三組町ゟ金澤町ニ飛火仕、夫ゟ花房町ニ燒
出、利根川通船請負人屋敷河岸ニ三ノ丸御拂之古木買請ゐゐ、大分積置ゐ處、
右古木何も檜ニて火移り安ク、其上筈葺大工小屋又ハ薪屋ニ有レ之ゐ龐朶抔
ニ早ク火移り、夥敷燃立、防人足も難二立寄一火勢ニて、佐久間町一丁目河岸ニ有レ
之材木輪木一ヶ所燒ゐゐ、火先キ
高ク御座ゐ故、人目ニ掛り安ク、材木早ク燃立ゐ樣ニ相見ニゐ儀ゟ奉レ存ゐ。其
外佐久間町河岸通竹木之義ハ、土手内ニ飛火仕ゐ以後、跡火ニて金澤町ゟ山

本町に燒出、夫ゟ佐久間町に火移り、右火勢にて竹木共燒失仕ゟ由申之ゟ。建置ゟ竹木にハ火粉吹かけ、たとへ輪木の繩抔にハ早く火移りゟ共、竹木ハ火粉にて燒失仕程ノ儀有之間敷之趣、燒殘りゟ町屋抔に之、何となく相尋させゟ處。當三月出火之節、佐久間町に火移り、右炎にて致燒失、竹木に飛火仕、燃付ゟ義にゐハ無御座ゟ由申之ゟ。以上。

未十月十七日

石川土佐守

水野備前守

高積見廻り之事

一、元文四未年三月湯島三組町ゟ出火之節、神田旅籠町・仲町・花房町・佐久間町類燒、同曲輪内にも火移ゟ。佐久間町河岸通之儀、前々申付も有之之處、薪材木高積有之にハ付、右高積へ火移、御曲輪内にも火移、不屆に付、燒失之分ハ地面被召上、筋違橋ゟ酒井左衞門尉屋鋪際迄、河岸通り竹木・材木・薪其外火移可申處取拂掃地に被仰付ゟ處、薪材木等商賣之もの共、可致難儀に付、河岸通りに右商賣物積置ゟ儀被差免、且又前々ゟ薪材木ハ高サ三尺又ハ四尺に積置ゟ定にく積申間鋪旨申付、竹木建置ゟもの無構、伏置ゟハ是又五尺に限り可申ゟ。覆茅麁朶之類ハ、一切積置申間鋪旨申渡ゟ。右之外火除先年明地に被仰付地面之内、拜借藏地或拜借地町屋等、家前井河岸通

一、筋違橋ゟ佐久間町河岸通

一、松下町明地

一、龍閑町ゟ岩井町迄河岸井明地

一、牛込肴町横町明地

一、糀町一丁目裏通り明地

一、同二丁目明地

一、淺草猿屋町明地

一、同所福富町明地

右之場處薪材木等高サ五尺に限り、高積致間鋪申渡、見廻り與力申付ゟ。高積之起り委細之儀ハ、藏地商床等之部に在入に付、爰に大略ス。

——享保撰要類集

三月四日（元文四年。）神田明神下より出火（湯島妻戀の邊より。）下谷へ燒出、柳原より豐島町。

覇都時代ノ火災

龜井町河岸まて燒亡。

若夫金地院記錄ニ、

六日〇元文四年三月、晴、疾風。

一、湯島天神之邊ゟ出火、神田祝町〇市内神田區岩井町歟。迄延燒。

ト書スル者、四日ノ誤歟。否歟。

〔參考〕大成令〇有德院殿御實紀同。云フ、

元文四未年三月廿九日

柳原誓願寺前向柳原新シ橋邊家作、瓦葺ニ可レ仕ハ。依レ之右之面々左之通拜借被ニ仰付一ハ。部屋住之者ハ高半分之割を以拜借被ニ仰付一ハ。金子之儀ハ御勘定奉行相談可ニ請取一ハ事。

但類燒無レ之分ハ、當十月迄家作不レ殘瓦葺出來ハ樣ニ可レ致ハ。

拜借金高割

一、十五石ゟ　二十石迄　金六兩

一、三十石より　四十石迄　同十兩

一、五十石ゟ　九十石迄　同十四兩

一、百石　同二十兩

一、二百石　同四十兩

一、三百石ゟ　六百石迄　同六十兩

一、七百石ゟ　九百石迄　同百兩

一、千石ゟ　二千石迄　同二百兩

一、三千石ゟ　四千石迄　同三百兩

一、五千石ゟ　九千石迄　同四百兩

右上納之義ハ、十ヶ年賦ニ返納可レ仕事。

右之通向々ニ可レ被ニ相觸一ハ。以上。

〔附記〕

八月八日(〇元文四年。)小石川邸西長屋中山主膳失火、木村數衞門延燒、此時林甚□門二階ヨリ墜テ死スト云。數衞門婢年十九、火ヲ放ス、獄ニ下ル、用達某モ亦入牢ニナル。　—水戸紀年

廿九日(〇元文五年二月。)亥中刻、赤坂傳馬町出火、紀黃門之長屋少類燒。寅刻消。　—萬年記

晦日(〇元文五年五月。)丑刻、麻布龍土町出火、及ニ寅下刻一消。　—水戸紀年

十二月二十日(〇元文五年。)小石川邸獄屋及西長屋焚。

附記

元文四年八月火災

元文五年火災

寛保二年火災

正月四日火災

十二月十五日火災

寛保二年火災事蹟

正月四日火災

寛保二年〇紀元二四〇二年。壬戌正月四日甲子〇甲子、三正綜覽。赤坂門外〇市内赤坂區。火有リ。〇談海。年代續炎上鑑。十二月十五日庚子〇寛保二年(紀元二四〇二年)〇庚子、三正綜覽。四谷番所町〇市内。出火、延燒青山百人町〇市内赤坂區。ニ及ブ。〇萬年記。

寛保二年火災　重ナル者二回有リ。

一、正月四日火災　ハ、

四日〇寛保二年正月。子下刻、赤坂傳馬町出火、類燒多。　—萬年記

一、正月二日（〇四日歟、〇寛保二年。）夜赤坂御門之外火消屋敷脇町屋より出火、御掃除町へ燒行、四五町類炎。

——續談海

一、寛保二壬戌正月四日子ノ刻、赤坂御門外風呂屋町ゟ出火、火消屋敷燒、竹腰山城守・大久保左京・井上三次郎其外此邊武士屋敷類燒。夫より松平安藝守（〇淺野吉長。）中屋敷裏之方ハ町家共殘る。赤坂御門外ゟ堀端ハ皆殘り、安藝守表門前ゟ飛火して町家武士屋敷少々燒、中町山角友之助四間手前宇垣齋宮隣迄燒失。

——年代炎上鑑

一、正月四日（〇寛保二年。）赤坂傳馬町ゟ出火、北風烈敷、赤坂御屋敷に火移り、御屋形不レ殘御長屋北側一筋御類燒、右之趣御屆有レ之。

一、二月八日御家作瓦葺ニ可二相成一樣、從二公儀一御達有レ之。

——侯爵淺野家回答

一、十月十九日御普請出來。

〔參考〕柳營日次記ニ、

十日（〇寛保二年二月。）

一、左之御書付、左近將監殿（〇松平乘邑）御渡、能勢甚四郎（〇賴一）相觸。

赤坂邊家作瓦葺ニ可レ仕。依レ之右之面々左之通拜借被二仰付一。部屋住之者ハ高半分之割を以拜借被二仰付一。金子之儀者御勘定奉行ニ相談、可二請取一。瓦葺ニ成ル場所之儀ハ、石河土佐守・神尾若狹守・能勢甚四郎ニ可レ被二承合一。

但類燒不レ仕分ハ來ル十月迄ニ家作不レ殘瓦葺出來ル樣ニ可レ仕。

拜借金高割（〇略。）

右上納之義者、十ヶ年賦ニ返納可レ仕事。

右之通、面々ゟ可レ被二相觸一。尤、西丸御日付ゟも可レ被レ達。以上。戊二月

一、十二月十五日火災　萬年記ニ見ユ。

十五日（〇寛保二年十二月。）未刻、四谷番所町出火、北風烈、廿餘町燒亡、至青山宿百人町、及西刻消。

〔附記〕延享二年二月五日龜戸天神社燬ク。

十四日丙辰（〇延享二年二月。）

江戸龜井戸天神、當月五日燒亡。自二裏家一出火、社内悉燒失、神體神寶ハ無二相違一段、八日之書狀、只今到著ル。依レ之案内、尤兩傳へも内々申入置由。夫ニ付一七日之間、菅家之輩稱二所勞一、小番も斷旨被レ申、夫故東坊城殿も明日ハ小折紙持參有間敷旨也。

——玉明記（〇編年史料收。）

龜井戸別當より追て願筋も有レ之と申來由、其節ハ可二申入一由也。

二月五日（〇延享二年。）龜戸天滿宮、近隣の在家より火出て、元祖信祐が建立せし社頭以下、一宇も殘らず燒亡せり。

——武江年表

一、延享二乙丑年二月五日、龜戸井ニ音羽町出火。

——年代炎上鑑

柳營日次記亦左ノ如ク記ス。

十四日（〇延享二年六月。）

一、左之御書付、隱岐守殿（〇西尾忠尚。）御渡被レ成レ𠮟。奥山甚兵衞被二相觸一𠮟。

龜戸天神社、去る二月中悉ク燒失ニ付、爲二再建一此度御寄附之品も有レ之、幷ニ當地武家方江戸町中勸化御免被二成下一𠮟。別當菅原信觀役僧、當丑七月ゟ同閏十二月迄巡行致二勸化一𠮟。寄進之輩ハ物之多少ニよらす可レ致二寄進一𠮟。右之通可レ被二相觸一𠮟。　丑六月

延享二年火災　二月十二日大火

二月廿日火災

二月廿三日火災

延享二年火災事蹟　二月十二日火災

延享二年乙丑〇紀元二四〇五年。**二月十二日甲寅**〇甲寅、三正綜覽。**千駄谷**〇武藏國豐多摩郡。**火有リ、青山**〇市内赤坂區。**麻布**〇市内。**白金・高輪**〇市内芝區。**等ニ延燒シ、品川**〇武藏國荏原郡。**ニ至テ熄ム。燒死スル者甚多シ。**〇柳營日次記。續談海。政鄰記。武江年表。歷代炎上鑑。年代炎上鑑。續史愚抄。玉明記。續日本王代一覽。**廿日壬戌**〇延享二年（紀元二四〇五年）二月〇壬戌、三正綜覽。**杉・本芝**〇市内芝區。**等ニ及ブ。**〇政鄰記。續日本王代一覽。續談海。年代炎上鑑。**巢鴨原町**〇市内小石川區。**火有リ。**〇政鄰記。

延享二年火災　重ナル者三回有リ、

一、二月十二日大火　世ニ六道火事ト稱スル者。諸書傳フル所左ノ如シ。泰平年

表「同〇延享二年三月。」廿二日江戸大火　青山六道辻ゟ品川迄燒失。」ト書スル、蓋二月十二日ノ誤歟。

十三日〇延享二年二月。細川越中守〇宗孝。居宅類燒ニ付、可レ爲二難儀一之旨上意之趣、老中ゟ宿次奉書を以て達ス之。

——柳營日次記

一、二月十二日〇延享二年。午刻に、四谷千駄ヶ谷ゟ出火。火元瀧川讃岐守下屋敷。北風にて青山・麻布之方に燒行、白金細川越中守中屋敷も類炎。此屋敷古來八ヶ度近邊迄燒ゐ得共遁れ、此度凡百三十年餘にして燒失之由。品川宿の東砂水迄燒夜に入鎭る。此時魚籃觀音も燒けれは、

千駄かや一把〳〵に火か付て、芝迄燒る春の青山。

夜ならはねひ觀音と云ふへきに、晝の大火は大慈大悲か。

觀音返し

我とても大じ大悲と思へとも、きよらんの如く風は烈しき。

火元を出して人にいはるゝ瀧川の、やけても末にたてんとそ思ふ。

風吹からに海のはて迄燒ぬれは、青山風をつらしとそ思ふ。

火付も風も吹け火を付るものおのれのみ、取られて物をおもふ比哉。

東京市吏稿

燒出され大風にたな引煙のたへまより、もれ出る人の中のあふなき。

品川女郎居續のつれなくみへしあとれより、うろつく計はきものもなし。

客かへさるゝ身をは思はず居つゝけし、晝の勤のおしくも有かな。

燒死人うらみてひやけぬ袖たにあるものを、炭(灰カ)にくちなん身こそおしけれ。

犬猫火の中よ犬こそなけれまよひいる、棚の奥にも猫そ鳴なる。

——續談海

二月十二日〇延享二年。朝五時過、千駄谷より出火、青山殘らず、櫻田・麻布三軒家・一本松・本村・氷川社善福寺門前・廣尾・白金村・三田伊皿子魚籃・白金瑞聖寺・白金御殿屋敷・同臺町・二本榎・猿町・車町・高輪南北・品川迄燒亡。武家町屋夥しく燒亡、翌十三日鎮る。高輪如來寺に在ける但唱が作丈六の仁王尊の石像も燒たり。長二里の餘と云。

——歷代炎上鑑

白金細川侯御やしきの邊、伊皿子の邊は、百三十年目にてこの類燒と云。

大森和中散、飛火にて少々やける。

——歷代炎上鑑

一、同年〇延享二年。二月十二日巳の刻前、千駄ヶ谷ゟ出火、青山麻布三田魚らん邊品川海安寺海手迄燒失、夜更鎭る。鷺森神明燒燒死之者百五十程。火元瀧川播磨守下屋敷ゟ。

——年代炎上鑑

十二日〇延享二年二月。甲寅。此日武藏江戸大火、社寺百十五箇所、長二里濶(マヽ)九里所燒亡云。年代略記。

——續史愚抄

二月十二日〇延享二年。午刻、江戸青山千駄ヶ谷八幡邊ヨリ出火、乾風烈シク吹テ、青山久保町・長者丸・算盤橋・櫻田町・白銀御殿・麻布日ヶ窪・一本松・善福寺門前、仙臺坂・古川邊マテ燒拂ヒ、其火三田寺町へ飛移リ、白銀臺町堀端、神明社・氷川社燒失ス。魚籃觀音邊、伊皿子・三田一丁目追分ヨリ火飛散リ、大圓寺幷ニ組屋敷一面燒失、芝大佛前、泉岳寺悉ク燒ケ、二本榎・高繩・品川臺、御殿山ノ下、品川新宿一圓ニ燒亡ス。海晏寺門前ニ至テ燒止ル。凡ソ長サ青山ヨリ品川マテ一里半許リ、横十五町餘ナリ。大名御旗本屋敷百廿ケ所、寺社百十ケ所、町家數萬軒燒失ス。世ニ六道火事ト云フ。火元青山六道辻ヨリ出ル故ナリ。

——續日本王代一覽

二月十二日〇延享二年。午上刻、四谷千駄谷瀧川播磨守殿屋敷ゟ出火、南部樣廣尾御中屋敷、細川越中守殿伊皿子御居屋敷等、芝品川驛迄三里餘類燒。幅十壹貳町計ゟ云々。燒失之家數、武士町寺院共都合貳萬八千六百七十八軒、外ニ六百

三十軒、毀家幷半燒有レ之。內二萬三十軒ハ町家也。總死人千三百貳拾三人。內貳百三十六人ハ細川殿右居屋敷、三百九十八人ハ松平陸奥守（伊達吉村。）下屋敷、六百八十九人ハ町人體の者、外に七百五十人計武家町共あやまち人有レ之由。

——政鄰記

吉長公（淺野。）

一、二月十二日（延享二年。）千駄ヶ谷瀧川播磨守殿御下屋敷ゟ出火、青山御下屋敷裏御門內御長屋三棟御類燒。右之趣御屆有レ之。

——侯爵淺野家回答

二年乙丑（延享二年。）二月十二日、千駄ヶ谷ヨリ出火、麻布邸第（伊達氏。）延燒す。

——東藩史稿

二月十八日庚申（延享二年。）

去頃關東火事節々日々燒。又十一日及十二日大火、二里半燒。仍注進、城・一橋・小石川養仙院との甚方角相違也。然ともレ於二京都一不二相知一之由申レ之。仍只爲二見舞一駒込・小石川・一橋・玉泉院火事爲二見舞一遣二書札一了。尤一門衆中無二別條一云々。江戶火事品川移り、悉燒失沙汰、仍爲レ燒レ亡レ之。猶可二相知一云々。

——玉明記（編年史料歟。）

二月廿日火災

二、二月廿日火災　傳へ云フ、同月（延享二年二月。）二廿日夜戌中刻頃、增上寺地內袋谷寂運寮ゟ出火、翌朝卯刻鎭火。右地內學寮六十軒計、金森兵部大輔殿（賴喜。）相模樣（池田宗泰。）濱御屋敷、增上寺門前町・金杉町・本芝町等、長サ九丁幅八丁計。但幅一丁ニシテ二里計。

——政鄰記

二月廿三日火災

一、二月廿日（延享二年。）增上寺所化出火、西風ニゐ海手迄九町程類火。

——續談海（歷代炎上鑑略同。）

廿日（延享二年二月。）戌刻江戶芝增上寺所化寮ヨリ出火、袋谷中谷天神、夫ヨリ片門前二丁目ニ火飛フ。將監橋向芝金杉・本芝二丁目邊一圓燒失ス。海邊ニ至テ火消タリ。所化寮五十八軒、武家屋敷五ヶ所、寺院十二ヶ所、町家數百軒燒亡ス。

——續日本王代一覽

年代炎上鑑一、同年（延享二年。）二月廿日、芝出火。ト書スル者、亦此火災ヲ謂フ歟。

三、二月廿三日火災　政鄰記ニ見ユ。

同月（延享二年二月。）二廿三日巢鴨原町二丁目ヨリ申上刻出火、貳百軒餘燒失。御前但馬守樣御出馬、於二火許一防も被二仰付一、暮前鎭火。

覇都時代ノ火災

延享三年火災
正月十二日火災
二月廿七日火災
二月晦日大火

三年丙寅○延享○紀元二四〇六年。正月十二日戊申○戊申、三正綜覽。淺草誓願寺門前○市内。火有リ、仲町・並木町・材木町・諏訪町・三間町○市内淺草區。等ニ延燒シ、本所○市内。ニ飛火ス。○傳法院日並記。續日本王代一覽。年代炎上鑑。二月廿七日癸巳○延享三年(紀元二四〇六年)○癸巳、三正綜覽。名古屋○尾張國。城主徳川宗勝○中納言。市谷邸○市内牛込區。火有リ。○柳營日次記。續談海。年代炎上鑑。晦日丙申○延享三年(紀元二四〇六年)二月○丙申、三正綜覽。晝本所横堀○市内。火有リ。夜ニ入リ藥地○市内京橋區。坪内權左衛門宅火ヲ失シ、南風烈シク、延テ八町堀○市内京橋區。小網町・堺町・葺屋町・濱町・大川端通、柳原同朋町・馬喰町○市内日本橋區。等ヲ燒キ、濱町○市内日本橋區。ヨリ本所○市内。ニ飛火シ、松井町・横網町・右原町○市内本所區。等ヲ延燒ス。翌三月朔日丁酉○延享三年(紀元二四〇六年)○丁酉、三正綜覽。淺草寺寺中壽命院屋上ニ飛火セル者、延テ南北馬道町・花川戸町・山之宿町・聖天町・橋場町○市内淺草區。等ヲ燒キ、小塚原○武藏國北豐島郡。ニ至テ熄ム。○續談海。是ニ於テ幕府ハ十七日癸丑○延享三年(紀元二四〇六年)三月○癸丑、三正綜覽。罹災旗下ノ士ニ新營ノ家屋ハ瓦葺ニス可キヲ命シ、恒例ノ恩借ヲ許ス。又市中ニ令シテ竹木賃錢等ノ價ヲ昂騰スル勿ラシム。○柳營日次記。憲法編年錄。

延享三年火災　正月十二日及二月晦日ノ火災ヲ、其重ナル者ト爲ス。

一、正月十二日火災　ハ、左ノ如シ。

一、夜○延享三年正月十二日。五時過ヶ誓願寺門前ヶ出火、最初南風、段々西北風ニ替リ、風烈、田原町三丁目通より、南側中町・並木町・材木町邊、大川端通迄、南ハ諏訪町・三間町邊淺草寺領不殘類燒。田原町三丁目北側ヶ中町雷神門通、惣テ北側ハ別條無之相殘。駒形堂類燒。尤宵ヶ理乘院井役者一山之面々、堂番兩人境内人足本坊下部等召連、雷神門風神雷神共本坊境内ニ退け、駒形堂本尊諸道具等相仕舞世話仕レ得共、風烈火勢强ク、駒形堂ハ類燒ニレ。大川向本所之内、飛火ニ而少々類燒も有之レ。翌朝六ツ半迄ニ火靜りレ。上野ヶ水谷左衛門・下村齋司・吟味役衆壹人下部等被遣レ。類燒之町方ハ三間町・諏訪町・並木町・茶屋町・材木町不殘類燒、中町・田原町之内少々殘家有之レ。

——傳法院日並記

一、正月十二日○延享二年。夜、西北風交、九時淺草誓願寺前町屋ヶ出火、俵町ニ燒出、

二月廿七日火災

並木町・竹町渡しゟ川向に飛火、本所石原邊類火。

年代炎上鑑・歷代炎上鑑ニモ此災ヲ記ス。

二、二月廿七日火災　市谷尾州邸ノ災是也。

廿七日〇延享三年二月。

右ハ御屋敷出火ニ付、爲二御尋一被レ遣レ之。

上使巨勢大和守（〇利啓）　〇徳川宗勝。

上使中務大輔（〇本多忠良）

尾張中納言殿

同人　尾張中將殿〇徳川宗睦。

二十九日

金二萬兩

御屏風一双

右之通、一昨朝御屋鋪燒失仕ゐニ付、御上使被レ遣レ之。　——柳營日次記

二月二十六日〇延享三年。夜八半時、市谷尾張殿御上屋鋪ゟ出火、御殿向不レ殘炎上、明六時鎭る。南風、類火なし。　——續談海

一、同年〇延享三年。二月廿六日夜丑ノ刻頃、市ヶ谷尾張殿御館ゟ出火、御殿向不レ殘燒失、表通り之御長屋者皆殘る。翌廿七日ニ至り鎭ル。　——年代炎上鑑

延享三年丙寅二月廿六日曉、市買邸火、使二世子一〇徳川宗睦。避二之外山別莊一。于レ時宗勝卿在二尾州一。　——源流綜貫

二月晦日大火

二、二月晦日大火　俗ニ坪内火事ノ稱有リ、築地坪内權左衞門屋鋪ヨリ出火シ、本所淺草等ニ延燒ス。是日別ニ本所横堀ニモ火有リタル者ノ如ク、相傳ヘテ廿八日〇延享三年二月。

一、晝八時頃、本所ニゐ出火有レ之ゐ處、風烈大火ニ成、暮方靜りゐ。

右ニ付、上野ゟ御納戸石河大炊吟味役一人外下部等被レ遣レ之。

二月晦日〇延享三年。晝、本所靈山寺横堀より出火、大風、此邊の寺院多く燒亡。　——武江年表

常在山靈山寺二尊院〔一〕檀林　横堀向

延享三年丙寅二月晦日晝、横堀の西より出火、魔風しきりに起り、此邊の寺院悉く類燒せしむ。當寺も本堂・念佛堂・所化寮以下、一宇も不レ殘悉く灰燼となる。

——江戸惣鹿子名所大全

ト爲ス。傳法院日並記之ヲ廿八日ノ事トスルハ、他ノ所ニ異リ、未熟カ是ナルヲ知ラス。然リ而シテ下文學クル所ノ本所飛火トハ、自ラ竟ニ別種ノ者ナルニ似

都時代ノ火災

タリ、記シテ再考ヲ俟ツ。若夫築地ヨリノ出火ハ、

出火ニ付罷出ル處、築地武士屋鋪より出火、火勢強、唯今本多主膳正（康敏）屋鋪に火移り申ル。尤町火消共罷出防申ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。二月晦日（延享三年）

先達て申上ル築地ゟ之出火、段々飛火仕、唯今岡崎町・北島町町奉行組屋鋪燒申ル。尤町火消共罷出防申ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。二月晦日

先達て申上ル出火、火勢強、小網町邊并濱丁邊燒失、本町に火移り申ル。御船藏無二別條一相見へ申ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。二月晦日

先達て申上ル出火、濱町之方火勢強、米澤丁三丁目に押出、兩國橋危御座ル。町火消并水防之者共罷出防申ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。二月晦日

先達て申上ル築地ゟ之出火、火勢強、段々燒募り、唯今本所御米藏之方危御座ル。ニ付、町火消相詰罷在ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。三月朔日

先達て申上ル濱丁之方火勢強御座ル處、町火消水防人足共相防、兩國橋別條無二御座一ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。三月朔日

先達て申上ル出火段々火勢強、淺草御門危ク御座ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。

三月朔日

淺草花川戸邊出火、火勢強相見へ申ル、此旨可レ被二申上一ル。以上。三月朔日

昨夜申上ル築地ゟ之出火、淺草御門内馬喰丁四丁目町屋ニ移ル火鎭り申ル。淺草御門別條無二御座一ル。本所に飛火之方ハ、石原ニて火鎭り申ル。本所御米藏別條無二御座一ル。此旨可レ被二申上一ル。以上。

三月朔日

當御番御目付中

能勢肥後守（頼一）

寅（延享二年）二月晦日之夜木挽丁築地武士屋鋪ゟ出火之義申上ル書付

能勢肥後守

先月晦日之夜五半時、木挽丁築地坪内權左衞門屋鋪ゟ出火、築地通り八丁堀に燒出、私共組與力同心屋鋪不レ殘類燒仕。夫より小網丁に火移り、濱丁邊、大川端通り、下柳原同朋丁、馬喰丁四丁目迄、凡長三十町程幅平均三丁餘燒失、翌朔日七ツ時分火鎭り申ル。

一、右濱丁邊類燒之節、本所松井町・横網丁に飛火仕、石原町際迄所々ニ移ル凡長九町程幅平均一町半程燒失、火鎭り申ル。町火消共武士方人數罷出防申ル。此外相替義無御座ル。以上。

三月

右書付ニ繪圖添上ル。

寅二月晦日出火ニて類燒仕ル橋之義申上ル書付

能勢肥後守

寅二月晦日夜築地ゟ出火之節、類燒之橋左之通ニ御座ル。

一、通油町新道ゟ通鹽町新道ニ渡ル　汐見橋
一、元濱町ゟ橘町ニ渡ル　千鳥橋
一、高砂町ゟ濱町ニ渡ル　高砂橋
一、難波町ゟ濱町ニ渡ル　小川橋
一、永井伊賀守屋敷前ゟ秋元攝津守屋敷前ニ渡ル　橋
一、北八丁堀ゟ霊岸島ニ渡ル　龜島橋
一、與作屋鋪立跡ゟ小谷町一丁目立跡ニ渡ル　小橋
一、龜島丁河岸通之　小橋
一、北八丁堀町奉行組屋敷之内ニ掛リ有之ル　地藏橋

合九ヶ所

右之通御座ル。

三月

能勢肥後守

——享保撰要類集

廿九日〇延享三年二月。

一、夜五半時過ゟ築地邊出火、風烈、大火ニ成ルニ付、理乗院役者堂番其外下部人足等、駒形堂ニ相詰不レ殘仕舞、翌朝ニ至リ弥、諸方ニ廣リ燒け靜リ兼ル間、替々本坊ニ罷歸仕度等仕ル者、見廻ル事。

三月朔日

一、晝四半時頃寺中壽命院屋根ゟ出火之由ニ付、風烈敷、近邊一面ニ燒上リル間、早々本堂ニ相詰、御宮殿之内本尊不レ殘御案ニ移し、千本櫻之方ゟ作場之邊迄奉レ移、其外諸堂末社本尊諸道具退ケル仁王門外通リ隨身門外通之防キ方致二指圖一ル。上野ゟも吉川宮内卿殿・鵜川監物殿、吟味所其外下部等迄御人被レ遣ル事。境内ニ有之者、老女辨天時之鐘撞堂辨天山下藥屋見世・甘軒茶屋迄類燒、寺中廿三ヶ院・町方南北馬道・花川戸・山之宿・聖天町・瓦町類燒。他領橋場邊迄類燒之由。委クハ不二承届一ル。

一、今日一山類燒之寺院、役者書上左之通。

智光院　寺院外圍迄不殘類燒、門前屋相殘申い。

壽命院　寺院惣圍地借等迄不殘類燒。但靈府堂火入い得共、防止申い。

自性院　寺院・觀音堂・念佛堂惣圍地借等迄不殘類燒。土藏一ヶ所殘申い。

覺善院　靈府堂相殘、其外寺院土藏惣圍迄不殘類燒仕い。

顯松院　表門幷東續練塀少シ・裏門・路次門土藏一ヶ所相殘、其外寺院一ノ權現稻荷社・抱屋敷迄不殘類燒仕い。

安樂院　鐘樓幷土藏一ヶ所殘、其外寺院惣圍地借不殘類燒仕い。

善龍院　表門・裏門・土藏・表圍練塀相殘、地借一軒殘申い。其外寺院・天神社幷法性坊社・地借等迄不殘類燒。

泉藏院　護摩堂・土藏・表門・々番所相殘、其外寺院・御靈社・稻荷・惣圍・地借等不殘類燒仕い。

醫王院　土藏二ヶ所相殘り、其外寺院・門前家幷地借等不殘類燒仕い。

圓乘院・長壽院・勝藏院・壽德院・妙音院・妙法院、右六軒寺院堂社幷地借り惣圍等迄悉類燒仕い。

梅園院・寶藏院・日音院・松壽院・金龍院・觀智院・無動院・誠心院・敎善院・眞性院・延命院

右拾壹ヶ寺少茂無別條相殘り申候。

此外末寺松林院寺院堂社不殘類燒仕い。

一、本間庄大夫方ゟ門前領分町屋類燒書上、左之通。

花川戸町六地藏ゟ兩側貳拾四五軒程幷智光院地尻表通り相殘、其外表裏屋共ニ不殘類燒仕い。

山之宿町表裏共ニ不殘類燒。

聖天町瓦町表裏家共ニ不殘類燒。

田町竹門ゟ土手迄西之方兩側、稻荷類燒。南馬道不殘類燒。

新町隨身門前少々殘、其外不殘類燒。

北馬道町年寄市左衞門家相殘、其外不殘類燒。

一、今日類燒火元之樣子致吟味い處、役者書上左之通。

覺

今朔日晝四ツ時過、當山出火之儀火元吟味仕い處、壽命院屋根ゟ燒出申い。依之隣寺吟味仕い得者、江戸筋出火ニ御座い故、火之粉飛申いる早速燒上

正福院　寺院秋葉堂外圍不殘類燒、土藏一ヶ所、門相殘い。般若堂火入い得共、防止メ申い。

正智院　寺院惣圍地借等迄不殘類燒。但涅槃堂火入い得共、防止い。地藏堂も相殘申い。

金剛院　外圍練塀西之方相殘、其外寺院不殘類燒仕い。

法善院　表練塀相殘、其外寺院曼陀羅堂・熊野社・下藏・表門等、一字も不殘類燒。

本龍院　聖天宮・子安堂・鐘樓・土藏二ヶ所、表通練塀少々相殘、其外悉類燒仕い。

吉祥院　表門幷地借二軒殘、其外寺院・愛染堂・土藏・惣圍・地借不殘類燒仕い。

泉凌院　觀音堂相殘、其外寺院・土藏・惣圍・地借等迄不殘類燒仕い。

修善院　護摩堂・土藏相殘、其外寺院・惣圍幷地借等不殘類燒仕い。

り申ゝ様ニ奉存ゝ。吟味仕ゝ處、右之通相違無御座ゝ。尤火事と申ゝ得者、直ニ近所一面焼出申ゝ。以上。

寅三月朔日

醫王院　梅園院

一、右火元吟味ニ付、隣寺幷向側寺院書上左之通。

覺

今朝四ツ時過神鳴門通類焼ニ付、火元御尋ニ御座ゝ處、拙僧見請ゝ者、隣寺壽妙院屋根ゟ焼初申ゝ。定而江戸筋大火風下ニ御座ゝ得者、飛火ニ而ゝ半と奉存ゝ。右御尋ニ付書付差上申ゝ。以上。

寅三月朔日

醫王院　梅園院

長壽院　圓乘院

觀智院　金藏院　松壽院　三ケ院書上一通右同樣之文言ニ而差出ゝ。

一、寺社御奉行所本多紀伊守殿〇正に今日當山火災之儀御屆金藏院申付差遣、尤右致吟味ゝ通飛火之趣口書相認遣ゝ樣ニ梅園院に申渡之。

二月廿九日〇延享三年。の夜、火に遇ひて〇家ハ丁堀に在り。をとゝし十一月火にあひし後造れりし家を又失ひけれは、今は家もいとなまて、やけ殘りたるぬりこめにしばしは住みなんと思へど、千蔭〇加藤枝直家集。か幼き心にいかにわひしと思ひなむと、心一つを定めかねて、

——傳法院日並記

かゝりける折につけても春の野の、燒野のきゝす身をは思はす。

——あづま歌〇加藤千蔭。

二月晦日〇延享三年。本所といふ所に火おこりて、家とも多くやけにけり、その夕つかた風もあらく、そらのけしきあかくちりたちて、こゝにしも火のあるかと覺えたるを、その夜亥の初はかり、十町はかりみなみよりまた火いできて、ほとなくおの〇眞淵。か家〇加茂丁堀。もやけぬ、むかしよりこゝろつくして、かうかへつゝ物多く書そへたる書とものあれは、これをはくらにもいれし、いかて便よからん所へわたしやりてむ、今はとてのかれいてなん時、從者の手ことにもたせむとかまへて、先その事をとりしたゝむる程に、調度ともハ心にもいれす、たゝくらの戸くちにひちりこぬりまかなはせて立いてぬ、ほとなくみな烟にこもりにけれは、源の簡かもとへ行て夜をあかしぬ、なにはかりの家ならねは、なこりもさしもあらねと、また草の庵結

はむまては人によりてあらんもくるしかるへし。

春の野のやけのゝ雲雀床をなみ、烟のよそにまよひてそなく。

おのかあたりより火つよくさかりになりて、明日のひるまてもつき〳〵やけ行にけり、いく千よろつの家いへか烟となりけん、人なとも死けりといふなり、またことしは所々に火あるは、ぬす人のわさも多しとてからめてかうかへらるなともいふ。

田にもあらぬ千町の家をやきすてゝ、つくれる罪の程そしられぬ。

——賀茂翁家集

二月廿九日〇延享三年。夜四時前、築地本願寺脇武家方より出火して、この邊武家方一圓、南八町堀・東八町堀・茅場町・小網町・大坂町・堺町・葺屋町・芝居兩座・村松町・橘町此邊武家方、馬喰町・濱町・同朋町・米澤町。本所小泉町・横網町・松井町・相生町・龜澤町邊武家方。淺草より小塚原まて延燒、翌朔日夕七ツ時鎮る。淺草寺は東側の坊舎のみ未刻焼る。

——武江年表

一、二月晦日南風強、夜五ツ時、木挽町門跡前西丸御小性組坪内權左衞門屋敷より出火、濱町邊不殘、終夜段々燒亡、兩國橋同朋町にて明る朔日四時鎮る。同時淺草寺内寂釋迦に飛火、南風故、聖天町より橋場・新鳥越・小塚原迄燒、暮時鎮る。聖天社ハ殘ル。

——續談海

一、同年〇延享三年。二月晦日夜戌ノ刻、坪内火事と申傳之由。

木挽町築地より出火、南風にて堺町・葺屋町芝居不殘燒失、淺草邊迄燒失。翌三月朔日夕方漸鎮ル。此時瓦拜借金出ル。

——年代炎上鑑

傳法院日並記ノ二月廿九日晦日ノ事トスルハ、他ノ所傳ニ同シカラス。今其是非ヲ知ラス。此外續日本王代一覽「晦日〇延享三年二月。ノ夜戌刻、江戸築地鐵炮洲ヨリ出火、本所淺草千住邊燒失ス。翌日夜ニ入テ火消タリ。」トシ、泰平年表「三年〇延享。二月晦日江戸大火。」トスルノ類、皆之ヲ晦日ニ繫ク。

是ニ於テ幕府ハ三月七日令シテ、旗下罹災ノ屋舖ハ普請ヲ見合セ、先ツ小屋掛ス可キヲ命シ、十七日旗下ノ士ニ新營ノ家屋ハ瓦葺ニス可キヲ命シ、同時ニ市中ニ達シテ、竹木賃錢ノ價ヲ高クスルコト勿ラシム。

七日〇延享三年三月。

一、左之御書付出ル。

築地邊より淺草邊迄、此度類燒之屋舖へ小屋掛仕い儀ハ、勝手次第ニいゝ。普請ハ先

見合可レ申ハ。

右之趣向々ゟ可レ被二相觸一ハ。大御所樣〇〇德川吉宗〇大納言樣〇〇德川家治〇御目付へも可レ被レ達ハ。

九日

左之御書付被二相觸一ハ。

去月晦日去ル朔日、本所邊類燒之屋敷
先見合可レ申ハ。

右之趣向々へ可レ被二相達一ハ。大御所樣大納言樣御目付へも可レ被二相達一ハ。

三月

十日

芙蓉之間

右者去ル頃本所筋出火之節、御藏へ惡舖ハ處、人數多差出し、御藏防セハ之間、御藏別儀無レ之ハ。差圖宜敷情出しハ故ニ思召ハ。此段可二申聞一セニ之旨上意之由、御老中方御列座、能登守殿〇松平乘賢〇被二仰渡一ハ。

小出伊勢守〇英持。

十八日

一、左之御書付出ル〇惇信院殿御實紀十七日ニ作ル。今之ニ從フ。〇

築地邊ゟ淺草御門內迄本所共、去月晦日當月朔日萬石已下類燒之屋敷之家作、瓦葺ニ可レ仕ハ。依レ之拜借被二仰付一ハ。部屋住之者ハ高半分之割を以拜借被二仰付一。尤半燒之分共ニ拜借被二仰付一ハ。金子之儀者御勘定奉行ゟ相談可二請取一ハ。

右之趣可レ被二相觸一ハ。

拜借金高割〇〇畧〇

右上納之儀ハ、十ヶ年賦ニ返納可レ仕ハ。

右之通向々へ可レ被二相觸一ハ。

三月

廿二日

一、左之御書付出ル。〇惇信院殿御實紀二十一日ニ作ル。今之ニ從フ。〇

拜領屋敷有レ之、此度借地ニて類燒之者ゟハ拜借不レ被二仰付一ハ。其儘借地ニ罷在ハ者並之通瓦葺ニ可レ致旨可レ被二相達一ハ。御家人之外たりとも同前之事。

一、拜領屋舖此度致二類燒一ハ者、只今迄外ニ
ハヽ、並之通拜借可レ被二仰付一ハ事。

右之通可レ被レ得二其意一ハ。尤向々ゟ可レ被二相
廿五日

左之御書付相模守殿〇堀田正亮。〇壹岐守殿〇水野忠定。〇御渡被レ成ハ由、橋本阿波守被二申觸一ハ。

此度本所ニて類燒之內、借地ニて拜借不レ被二仰付一面々ハ、家作瓦葺ニ不レ限、火除ニ成ハ樣勝手次第普請可レ致ハ。

右之趣被レ得二其意一、向々ゟ可レ被二相觸一ハ。

三月

三月〇〇延享三年。〇

今度就二火事一大工・屋根葺・左官・諸職人手間賃、諸日雇賃錢、高直ニ仕間敷ハ。并板・竹・丸太・

葭簀・笘・薦・菰其外、直段上げ申間鋪い。若高直致しい儀相聞いハヽ、急度申付い間、此旨町中不レ残可二觸知一い。　三月

三月

出火之節建具幷諸道具往還ニ持出置、又ハ大八車ニ積いも有レ之ニ付、往還通路之妨ニ相成い。前々も相觸い處、不届至極い。自今見付次第召捕、諸道具等ハ取上ケ、追て吟味之上、當人ハ勿論家主五人組迄、急度可二相咎一い。

三月

御勘定奉行ニ

去月晦日出火之節、風烈い處、御藏奉行幷手代小揚等、本所御米藏精出防い由ニ い。此旨可レ被二申聞一い。

三月

出火以後、酒油諸品高直ニ、其外前裁物等ニ至まて、高直之由相聞不届ニ い。此以後諸色直段引下ケ、下直ニ商賣可レ仕い。若高直ニ致い者於レ有レ之ハ、遂二吟味一急度可二申付一い條、此旨町中可二觸知一い。　三月

先達て申渡い土藏造・塗屋・塗瓦葺・鰐殻屋根・瓦鰐殻無レ之も相見、瓦葺鰐殻屋根ニも瓦鰐殻無レ之場所も相見い。近日見分有レ之筈ニ い間、其心得ニて早々相拵、出來次第可二相届一旨申二渡之一。

四月

當春火事ニ付、大工・屋根葺・左官・諸職人手間賃、諸日用賃、幷板・竹・丸太・葭簀・笘・薦・菰其外、直段上ケ申間鋪旨、先達て相觸い處不二相用一、右之類高直相成い由相聞、不届ニ い。右此以後直段高直ニ致い儀相聞いハヽ、急度可二申付一い。四月

當二月晦日三月朔日類燒之武士屋鋪町々多、其上瓦葺相成いニ付、瓦直段高直ニ罷成い由相聞、不届ニ い。若左様之儀も有レ之いハヽ、吟味之上急度可二申付一い。此旨町中可二觸知一い。　四月

六月

瓦直段高直ニ付、先達て相觸い處、別て高直ニ致し、其上出來悪い由申レ之、誂い方ニも不二相渡一、世上之差支ニ相成、旁不届ニ い。此上直段引下ケ不レ申歟、手支い儀も可レ有レ之いハヽ、吟味之上急度可二申付一い。此旨町中瓦屋幷瓦師共ハ勿論、瓦商賣致しい者共へ申聞、急度可二相守一い。若於二相背一者可レ爲二曲事一者也。

六月

四年丁卯（延享四年。紀元二四〇七年。）正月朔日丙辰（正綜覽。）德川宗尹（一橋刑部卿。）邸燒ク。（續談海。玉明記。續日記。年代上鑑。）二月十日庚午（延享四年（紀元二四〇七年）庚午、三正綜覽。）外櫻田（市内麹町區。）諏訪忠林（因幡守。）邸火有リ、芝（市内。）ニ延燒ス。（寛政呈譜。惇信院殿御實紀。年代炎上鑑。續談海。寛延奇談。泰平年表。）四月十六日乙亥（延享四年（紀元二四〇七年）乙亥、三正綜覽。）江戸城二之丸殿舍燒ク。（續談海。柳營日次記。憲法編年錄。玉明記。續日本王代一覽。續史愚抄。）

重ナル者ヲ擧ク。

——憲法編年錄

覇都時代ノ火災

一、正月朔日火災　一橋邸燒ク。

一、正月朔日〇延享四年。年始御禮目出度相濟申ル。然處夜ニ入、五時過ル一ツ橋御屋形刑部卿樣（〇徳川宗尹。）表御長屋より出火、不レ殘御屋形向御燒失ス。

——續談海

正月六日〇延享四年。丁酉、晴。

關東出火

一、正月朔日〇延享四年。戌刻ヨリ一橋御殿ル出火、御殿不レ殘やけ申ル。子刻迄火留り不レ申やゝ。今申上所早々申上ル。

正月六日

此日雖二町飛脚一橋屋鋪兩方刑部卿後君等屋敷去元日火出ルニ付、彼是加二吟味一、十五日以前各別之義、近習者采女申付從二今曉一申付、夜丑刻可レ爲二發足一、勿論彼亭十三日著つもり申付遣レ之。即夫婦へ白絹二疋ツヽ遣レ之。尤余前ニて遣、御悅以下方金百疋遣レ之了。

——玉明記〇編年史料收。

一、延享四丁卯年正月元日酉ノ刻、一ツ橋御門之內刑部卿殿御屋形ル出火、御殿向不レ殘燒失、表御長屋ニ無二別條一。

飛脚屋住〇注敷。進

——年代炎上鑑

正月七日幕府金一萬兩ヲ宗尹ニ賜ヒテ新第經營ノ費ニ充テ、八月二十一日第成リテ宗尹築地ノ別邸ヨリ移リシコト、惇信院殿御實紀ニ見ユ。

二、二月十日火災　ハヽ、

安藝守忠彪養子幼名織部改修理亮肥後守賴篤二男初伊勢守諏訪因幡守忠林

六代目

一、延享四丁卯年二月九日外櫻田居屋敷出火付、差控相伺ル處、同十一日差控被二仰付一、同十八日御免被二仰付一ル。

——寬政呈譜

一、二月九日〇延享四年子下刻丑上刻頃ヨリ初ル。曉櫻田館自二隣家一諏訪因幡守忠林上屋敷。出火、居館悉類燒ス。長屋藏等ハ殘ル。即赤坂館ニ引退、暫居住ス。御直撰

一、二月十一日上使を以、赤坂御屋敷御普譜出來。

——侯爵淺野家回答

一、戊辰五月四日、御上屋敷鋪御類燒。諏訪因幡守樣方出火。

——中邑世紀祕說

一、同〇延享四年二月。十日曉、櫻田御屋敷御類燒。

九日〇延享四年二月。この夜丑のときばかり、外櫻田諏訪因幡守忠林の家より火いでゝ、あくる朝卯のときばかりに、芝に至りて火きえぬ。西丸日記。日記。

——惇信院殿御實紀

一、同年〇延享四年。二月九日夜更、霞ヶ關出火、翌十日巳ノ刻鎭ル。但火元外櫻田阿部〇諏訪ノ誤。因幡守上屋敷裏御普請小屋ゟ出火、松平宮内少輔〇忠恒。不レ殘、松平安藝守〇淺野吉長。長屋南西殘ル。阿部因幡守〇鎭明。正不レ殘、稻葉越中守〇正表。門計裏長屋殘ル。相馬彈正少弼〇尊胤。不レ殘、永井伊賀守不レ殘、太田攝津守〇資俊。門長屋不レ殘、小笠原出丸〇長泰。不レ殘、同人向屋敷半分殘ル。北條美濃守〇氏貞。不レ殘、朽木土佐守〇玄綱。門計殘ル。米津越中守〇政崇。不レ殘。

——年代炎上鑑

一、二月比度々火事有レ之。櫻田諏訪因幡守屋しきより出火、藝州幷ニ永井田村四五人も類燒なり。

——續談海

一、延享四年卯二月九日の夜、外櫻田御門外ゟ新橋内迄、北西の風ニテ燒失之屋敷左之通。

火元 諏訪因幡守

松平安藝守

相馬因幡守〇胤。

米津信濃守

北條美濃守

松平宮内少輔

阿部因幡守

小笠原出丸

朽木土佐守

太田攝津守

永井伊賀守

諏訪火事よ大藏戸まへうちかねて、安藝もあきれて因幡もろとも。

諏訪火事といふより早く安藝やしき、相馬からけて永井丸やけ。

火をたすはゆたんと人のわら因幡、家の定紋火事の葉といへ(〇下略)

稻葉越中守

——寛延奇談

三、四月十六日火災　是日江戸城二之丸殿舍燒失ス。事、柳營日次記、續談海、憲法編年錄、續日本王代一覽等ニ詳カ也。就中柳營日次記及續談海ハ、皇城篇既ニ之ヲ載ス、相參照シテ可也。

四月十六日〇延享四年。水野壹岐守殿御渡

今日火事ニ付爲レ伺二御機嫌一、明十七日御本丸西丸ニ惣出仕有レ之ル。四時登城可レ有レ之ル。

但病氣幼少之面々ハ月番之老中隱岐守・右近將監宅ニ以二使者一御機嫌可レ被二相伺一ル。且又在國在邑之面々ハ飛札可二差越一ル。

右之趣可レ被二相觸一ル。尤西丸御目付ニも可レ有二通達一ル。

四月

四月十六日〇延享四年。未上刻、江戸御城二之御丸出火、御殿不レ殘燒失、同下刻鎭火。依レ之伺二御機嫌一、早速聞番御使勤レ之。外御聞合、重ゐ申刻頃、略御行列こゐ、御用番御老中に爲レ伺二御機嫌一被レ爲レ入、大奥に者、御文こゐ御機嫌御伺也。

——政鄰記

〇延享四年四月廿日己卯晴去ル十六日江戸表二丸炎上之由、武家より申來る也。〇中略。〇中關東大樹及前大樹に、以レ使二之丸に火事爲二見舞一、尤老女共一橋屋敷へも飛札了。〇誤脫有ルヿ可シ。

——玉明記〇編年史料收。

四月十六日〇延享四年。午ノ中刻、江戸二之丸大奥ヨリ出火、東風烈ク吹テ御殿及御舞臺燒失ス。未中刻ニ火消タリ。老中若年寄幕方退出、殿中大ニ騷動ス。

——續日本王代一覽

十六日乙亥〇延享四年四月。

此日武藏江戸城自二二丸一火起、臺所等悉燒亡。後日自二關東一言。家記、同追、祐良記。

——續史愚抄

一、延享四卯年四月十六日九ツ半時、二丸大奥より出火、御殿御舞臺側迄不レ殘燒失、八ツ半時比鎭火。

但御舞臺境之間御玄關前腰掛等殘る。

——時變吉凶〇編年史料收。

十六日〇延享四年四月。午の刻はかり二丸の永巷火をあやまちしかはかねて消防奉とる輩みなはせ來りて撲滅し、未の刻にいたりて火漸く熄ぬ。されと殿宇はこと〳〵く燒うせたり。よて大納言殿吹上の御庭に火をさけ給ふ。田安、一橋の兩卿もまうのぼられ、溜詰・雁之間詰・奏者番出仕して御氣色を伺ふ。この夜酒井雅樂頭忠恭・板倉佐渡守勝清二丸にとのゐす。またこの夜より大目付・目付晝夜とのゐし、火消役大久保彌十郎忠肥・仙石兵庫久住所屬の隊伍を引ゐて同しく宿衞せり。町奉行市隊の防卒を指揮して餘燼を滅さしむ。日記。西丸日記。

十七日〇延享四年四月。この日市隊の防卒を退け、火消役南部主殿信彌が所屬の隊伍のみして猶餘燼をけさしむ。目付・使番とのゐす。日記。西丸日記。

十八日〇延享四年四月。けふも二丸の餘燼猶盡す、火消役高木宮內守明が所屬宿衞す。其他とのゐきのふのことし。日記。

廿一日〇延享四年四月。二丸の餘燼けふ盡けれは宿衞をやめらる。日記。

——惇信院殿御實紀

五月一日消防ノ人數ヲ出シタル諸大名、二日消防ニ力ヲ致シタル町奉行・火消

役・目付・使番・小普請奉行以下ニ對スル行賞有リ。

朔日〇延享四年五月。

一、御禮過、居殘之面々左之通、

松平兵部大輔〇宗矩。　松平陸奥守〇宗村。名代伊達紀伊守　松平肥後守〇容貞。名代松平靱負

井伊備中守〇直禔。　阿部豐後守〇飛驒守正允。　伊達大膳大夫〇村候。

松平越後守〇長孝。　松平下總守〇忠刻。　松平因幡守〇輝規。

松平小平太〇榊原政永。名代井上河内守、丹羽若狹守〇高庸。名代鳥居丹羽守　戸田采女正〇氏英。

土屋左門〇篤直。名代井上河内守　松平丹波守〇光雄。　松平左兵衛佐〇直純。名代鳥居丹波守

伊東修理大夫〇祐隆。　板倉周防守〇忠林。名代板倉伊勢守　土岐伊豫守〇頼熈。

内藤大和守〇頼由。　諏訪因幡守〇忠林。　本多美濃守〇忠敞。

右者先月十六日二丸出火ニ付、出情防ル段達上聞、上意有之旨、於席々伯耆守〇本多正珍。傳達之。

——柳營日次記

一、二丸御燒失ニ付骨折被下ル覺、

五月二日

時服四ツ、　町奉行能勢肥後守〇頼一。　馬場讃岐守〇尚繁。

時服三ツ、羅紗二切、但四間　火消役大久保彌十郎〇忠肥。當番名代秋山十右衛門　南部主殿〇信彌。

諏訪内膳〇頼一。　秋山十右衛門〇正苗。

高木宮内〇守明。當番名代南部主殿　仙石兵庫〇久住。

松平軍次郎〇康年。當番名代諏訪内膳　小濱民部〇季隆。

横山内記〇清章。　三枝宗四郎〇守應。

時服三ツ、　御目付駒井靱負〇壽正。　中山五郎左衛門〇時庸。

神尾市左衛門〇元籌。　土屋長三郎〇正方。

橋本阿波守〇忠正。　横田十郎兵衛〇榮松。

時服二宛　御使番大久保江七兵衛〇教平。　金田主殿〇正峯。

松平主馬〇康詮。　細井佐次右衛門〇勝爲。

興津帶刀〇忠通。　小幡又十郎〇景利。

戸田彌十郎〇忠汎。　岡部久太郎〇元良。

建部傳右衛門〇廣喜。　齋藤次左衛門〇利武。

二丸火事之節場所ニ罷出、精出骨折ルニ付拜領物被仰付ル。

右於芙蓉之間伯耆守申渡之、老中列座。

覇都時代ノ火災

但、火消役・御目付・御使番申渡之時も、若年寄中侍座。

時服三

小普請奉行　曲淵越前守〇英元。

二丸火事之節早速罷越、職人人足等懸ケ為防ケ段心付ケ致方ニケ。依之拝領物被仰付之ニケ。〇西丸目付一人、小普請方一人、御徒目付一人、御徒役一人、小普請方改役一人、御徒目付組頭一人、小普請方一人、火消役十組、與力三十人、同心二百四十八人、町奉行與力三十人、同心百十三人、小人目付廿人、使ノ者廿人、小普請方役人八人、大工棟梁二人、職人三百六十餘人、名主百廿餘人、通一丁目名主一人、大傳馬町名主一人略。〇柳營日次記ニモ五月十九日行賞三人ヲ載ス。

——續談海

附記　延享四年四月廿三日後火災

寛延元年火災

寛延元年火災事蹟

其他寛政呈譜寛政重修諸家譜ノ類、煩ハシケレハ之ヲ略ス。

〔附記〕政鄰記ニ左ノ如ク見ユ。

同月〇延享四年四月。廿三日曉天、辰之口御壘藏ケ出火、三間四方計之所燒失。御丸之内ニ付、今朝爲ケ伺ニ御機嫌、御用番ニ聞番御使相勤。六月十八日曉八時頃、西之御丸下内厩ケ出火、土藏一ツ燒失、早速鎭。依ケ之御機嫌御伺之御番出ル。

桃園天皇寛延元年戊辰〇延享五年七月十八日改元（紀元二四〇八年）三月二日丙戌〇丙戌、三正綜覽。

谷中〇市内ノ谷區。瑞林寺火有リ、感應寺ニ延燒ス。〇江戸惣鹿子名所大全。續談海。

慈雲山瑞林寺

延享五年辰三月二日の夜失火、本堂塔頭以下悉く焦土となんぬ。餘煙感應寺以下の梵刹に及、在家多く燒亡せしむ、悲しむへし。

長耀山感應寺

延享五年辰三月二日の夜同所中。〇谷瑞林寺より出火之節、本堂塔頭燒失せり。

——江戸惣鹿子名所大全

一、三月二日〇寛延元年。終日南大風夜中不ケ止。夜四時、谷中瑞輪寺ケ出火、本堂初不ケ殘燒失。夫より漢能寺〇感應寺。不ケ殘燒る。但、みどうは殘る。

——續談海

三月二日夜谷中瑞林寺より出火、本堂塔頭以下燒亡、感應寺今いふ天王寺。へ移り、本堂塔頭門前町屋燒亡。

——武江年表

〔附記〕火災要覽ニ、

自火在府有ニ類燒一、阿部飛驒守并辻番所燒失。

一、御屋敷ケ夜五時、就ニ出火一、御用番松平右近將監樣（〇武元）ニ生駒郡大夫御屆被ケ越飛驒守口上書、左之通。

今夜五時前私居屋敷出火仕ケ。依ケ之先御屆申上ケ。他ケも火移ケニ付、差控罷在ケ。猶又此段奉ケ伺ケ。以上。

正月朔日（寛延二年。）

阿部飛驒守

附記　寛延二年火災

霸都時代ノ火災

右口上書郡大夫持參、御取次ゟ申達ㇾ處、御用人關口玄大夫を以被二仰出一ㇾ、御屆之趣致二承知一ㇾ、御書面之通御差控可レ被レ成、猶又是ゟ可レ申ㇾ、被二仰出一ㇾ二付罷歸。

一、同夜九時、右近將監樣ゟ松原左大夫御屆罷出、御屆左之通。

先刻御屆申上ㇾ通、私居屋敷出火、居宅不レ殘燒失仕ㇾ、不調法之至奉レ存ㇾ。類火ゟ御座ㇾ二付、彌差控罷在ㇾ、表長屋內長屋少々燒殘申ㇾ二付、右上屋敷長屋之內相愼罷在ㇾ。此段御屆申上置ㇾ。以上。

正月朔日　阿部飛驒守

右書付持參、御屆申上ㇾ。

一、翌二日、御目付中山勘左衞門樣ゟ松原左大夫辻番所燒失仕ㇾ段御屆仕ㇾ、使者口上之覺、

昨夜飛驒守居屋敷出火ニ付、辻番所ゟ致二燒失一ㇾ。當分假番所仕、辻番人御定之通差置申ㇾ。猶又辻番所普請取掛ㇾ節ニ、以二繪圖一可二奉伺一ㇾ。伺之通番人差置ㇾ樣被二仰付一ㇾ。

右ニ付、元辻番所之跡へ小屋掛致、四六之番人差置ㇾ。勿論番人共相印火事羽織ニ而差置ㇾ。

一、翌二日、右近將監樣御用人中ゟ切紙到來、左大夫罷越ㇾ處、右近將監樣ニ而御用人を以被二仰出一ㇾ、昨夜出火ニ付、段々御伺之趣致二承知一、御書付之通御心得ㇾ樣被二仰出一ㇾ、朔日之夜二度目差出ㇾ御書付ニ、御付札可レ被レ致二遠慮一ㇾと有レ之。

右ニ付、表門裏門共〻切、晝夜共家來之用事ニ而も一切往來不レ仕ㇾ。尤燒跡表通ゟも圍等も不レ申、幕も打不レ申ㇾ。

一、正月九日右近將監樣御用人中ゟ呼手紙來、左大夫罷越ㇾ處、左之通御書付被レ成二御渡一ㇾ。

表袖書阿部飛驒守ゟ出火遠慮。阿部飛驒守ゟ御免被レ成ㇾ。正月九日

右之通ニ付、飛驒守早速髮月代被レ致、供廻り之者、是又髮月代致ㇾ、爲二御禮一、御用番樣御非番御老中樣方へ被二相廻一ㇾ。

一、夫ゟ表門裏門共ニ開、幕打長柄等飾申ㇾ。

寬延三年火災　三月十六日火災　十二月廿七日火災

寬延三年火災事蹟　三月十六日火災

三年庚午〇寬延二四一〇年。紀元三月十六日己未〇己未、三正綠覽。

延テ山谷〇市內淺草區。ヲ燒ク。〇傳法院日並記。十二月廿七日丙寅〇寬延三年〔紀元二四一〇年〕丙寅、三正綠覽。下谷茅町〇市內。火有リ。〇年代炎上鑑。政鄰記。

寬延三年火災　稍注目ス可キ者二回有リ。

一、三月十六日火災　八、十七日〇寬延三年三月。

一、昨夜暮六ツ半時頃、眞性院地借當右衞門と申者家ゟ出火有レ之、眞性院·吉祥院類燒、田町山谷迄所々類燒いたし、今日寺社御奉行所御月番稻葉丹後守〇正益殿に組合教善院、右御屆ニ罷出ㇾ口上書左之通。

覺

一、淺草寺地中眞性院地借當右衞門と申者家ゟ昨十六日夜五時致二出火一候ニ付、樣子相尋候處、右地守久兵衞と申者ゟ、眞性院地面賣居家御座候處、常右衞門買求、直ニ引移不レ申候て、繕普請仕候ニ付、昨日大工三人參り候作事仕、七半時頃罷歸候。跡之儀者右之者共戸を〆錠を掛、鍵ゟ持參仕候、右繕普請仕候故、鉋くづニても落在レ之候所ニ若煙草之火ニ而も散り、もへ付出火仕候哉と奉レ存候。其外何ニ而も怪敷儀無二御座一候由申候。然處隣寺吉祥院幷相地借町屋ニ火移、類燒有レ之候間、右之趣御屆申上候。以上。

三月十七日　　眞性院組合
　　寺社御奉行所御役人衆中　　敎善院

〔附記〕　火災要覽云フ、

寬延三年十一月廿九日

自レ火、參勤御禮前有二類燒一、黑田大和守。但嫡子豐前守ゟ差控御伺

一、夜八時黑田大和守上屋敷居宅ゟ出火、西北風ニ而大火ニ相成申候。酒井大和守樣ゟも火移候ニ付、御用番本多伯耆守樣ゟ長岡宇兵衞火事裝束ニて罷越、御屆左之通、

大和守居屋敷ゟ今朝八時半前出火仕候、委細之儀、追而御屆可二申上一候、先御屆申上候段、御用人小坂仁左衞門を以申上、控居候處、御承知之段被二仰出一候。

右之通、御屆相濟、差控伺之儀者、大和守參勤御禮前之事故、一類之內を以相伺可レ申哉之旨、仁左衞門ゟ承合候處、御在邑御同前、御一類樣ゟ御伺被レ成可レ然と申候ニ付、松平彈正少弼樣ゟ御口上申上。

今曉八半時御居屋敷ゟ出火、御隣酒井大和守樣被レ成二御類燒一候。依レ之明朝御用番本多伯耆守樣ゟ、大和守樣、豐前守樣御差控御伺被レ下候樣、御賴被レ成度段申上候樣居候處、御承知之旨御返答有レ之、明朝五半時前彈正少弼樣御用番樣ゟ御出被レ成候節、宇兵衞義も御門前ニ相控、罷在候旨申候。

二、十二月廿七日火災　八、

舊臘〇寬延三年十二月。廿七日曉七半時頃、出雲守樣〇前田利幸。御廣式御乘物置所ゟ出火、茅町南頰百五十軒計池之端之方に燒拔、御附御用人以下之下小屋も類燒、御附物頭幷福田新左衞門御貸長屋ハ殘、朝四時頃鎭火。依レ之出雲守樣廿九日迄三日御指控、出雲守樣御屋敷町屋之方も、從二此方樣一廿七日切ニ板圍被二仰付一、印附等御貸長屋類燒之人々割場、向枕小屋八筋廣町御居宅之方に懸仕切渡し、二枚開ゟ往來有レ之。

右ニ付、此方樣ニも御屋敷歩數之內之事故、御控可レ被レ成旨、御用番左衞門

尉樣迄御屆有之ハ處、廿七日暮過不及御控ハ旨申來ハ段、今日〇正月九日。申來、右ニ付福田新左衞門儀、今月〇正月。十七日急度遠慮被仰付、翌二月廿九日御免許、是從出雲守樣御挨拶依ゐ也。

——政鄰記

附記　寶曆元年火災

〔附記〕　年代炎上鑑ニ據レハ、

寬延四辛未年九月十四日夜子ノ刻、淺草今戸町ゟ出火、觀音裏通り迄燒失。同年十月十四日亥中刻、淺草山之宿九品寺門前町家ゟ出火、大川端まて燒、子ノ刻鎭ル。

寶曆元年十一月三日、西丸下老中堀田相模守宅ゟ出火、未刻鎭ル。外類燒なし。

寶曆二年火災　正月五日火災　十二月廿六日火災

寶曆二年火災事蹟　正月五日火災

寶曆二年壬申〇紀元二四一二年。正月五日丁卯〇丁卯、三正綜覽。和歌山〇紀伊國。城主德川宗直〇紀伊大納言。喰違外邸〇市內赤坂區。燒ク。〇寶曆錄。金地院日錄。憲法編年錄。年代炎上鑑。十二月廿六日壬子〇寶曆二年(紀元二四一二年)〇壬子、三正綜覽。增上寺門前〇市內芝區。火有リ。〇增上寺日鑑。

寶曆二年火災　左ノ如シ。

一、正月五日火災　喰違外紀伊邸ノ火災ニ係ル。

正月五日〇寶曆二年。

今四時半、紀伊殿〇德川宗直。喰違外御屋敷燒失、類火無之。

正月六日

金貳萬兩

右者昨五日御屋鋪燒失ニ付、被遣之、御使西尾隱岐守。〇忠尙。

正月十三日

御屏風一双。鮮鯛一折。

御使菅沼織部正　紀伊大納言〇德川宗直。

右者御屋鋪燒失ニ付、今朝被遣之。爲御禮御登城、於御白書院緣頰御老中方伯耆守〇本多正珍。謁之。

——寶曆錄

寶曆二年正月

金貳萬兩

右ハ紀伊大納言殿此度居宅燒失ニ付ゐ被遣之ハ、前々之通可被致ハ。

——憲法編年錄

正月

六日〇寶曆二年正月。

一、紀伊大納言殿居屋敷、昨五日朝火災、長屋四方殘、內者不殘燒ハ由。麴町御屋敷ニ罷越、火災ニ付伺台侯、宰相殿ニ同樣申述、辨ヲ當大學殿、七ツ時前歸院。

——金地院日錄

十二月廿六日火災

一、寶暦二壬申年正月五日朝、喰違之外紀伊殿御館ゟ出火、御殿向不レ殘燒失、表御長屋ゟ殘ル。未ノ刻鎭ル。

——年代炎上鑑

二、十二月廿六日火災　增上寺日鑑云フ、

一、同日（○寶暦二年十二月廿六日。）七半時中門前壹丁目ゟ出火、同貳町目新道通り、濱松町三丁目四町め、新網町河岸迄燒失。

附記

寶暦三年火災

寶暦四年火災

寶暦五年火災

〔附記〕

十月二十三日（○寶暦三年。）小石川邸北中ノ町火起ル。時ニ暴風、邸殿災ニ罹ントス。十人火消等專ラ防禦ス。遂ニ免ル。兩公以下火ヲ臺ノ園中ニ避ケ玉フ。（○年代炎上鑑小石川餌差町出火ト記ス）

——水戸紀年

一、同年（○寶暦四年。）二月十日夜子ノ刻、堀留町出火、翌日鎭ル。

一、同年（○寶暦五年。）二月十五日、今曉寅ノ中刻、淺草御門ゟ出火、文箱地藏迄燒。

——年代炎上鑑

今曉（○寶暦五年二月廿日。）八ツ時ゟ、坂本二丁目邊ゟ出火有レ之、風並上野之方ゟ不レ宜ニ付、早速役人朽木藤右衞門御殿ゟ爲二相詰一、菊地助右衞門も人足召連、御殿ゟ相詰い樣ニ申二渡之一。其上智泉院爲レ窺二御機嫌一、昇殿仕。曉六時坂本門際養玉院境こゑ消留鎭申い。辻兵庫宿近火故、被レ致二下宿一い處、無二別條一相殘い。

——傳法院日並記

四月廿七日（○寶暦五年。）夜、淺草門跡地中乾の方寮より出火、四五軒やける。

寶暦六年正月火災

寶暦六年火災

正月十五日火災

十一月廿三日火災

寶暦六年火災事蹟

正月十五日火災

一、同年（○寶暦五年。）九月二日、今曉常磐橋外後藤庄三郎宅ゟ出火。

寶暦六丙子年正月六日酉ノ下刻、麻布鳥居坂戸川內膳屋敷ゟ出火、京極出羽守、戸田主膳・同內藏助等類燒。

——歷代炎上鑑

——年代炎上鑑

六年丙子（○寶暦○紀元二四一六年。）正月十五日癸未（○癸未、三正綜覽。）日本橋新材木町火有リ。（○續談海。年代炎上鑑。）十一月廿三日丁亥（○寶暦六年（紀元二四一六年）○丁亥、三正綜覽。）卯刻麴町八代洲河岸林信充邸火ヲ失シ、西北風烈シク、郭內大名小路及數寄屋町・木挽町等ニ延燒ス。辰刻築地又火ヲ出シ、延テ西本願寺地中・小田原町等ヲ燒ク。是日青山又大火延燒二本榎ニ及ブ。（○本丸廻狀留。柳營日次記。町年寄手控。金地院記錄。傳法院日並記。武江年表。年代災上鑑。定之卿記。定晴卿記。續日本王代一覽。壽福年代記綱目。曆年雜志。伊達治家記錄。續談海。三才雜錄。）

寶暦六年火災　正月十五日及十一月廿三日ニ重ナル火災有リ。

一、正月十五日火災　顚末左ノ如シ。

一、正月十四日（○寶暦六年。）夜七時、西風、新材木町ゟ出火、堺町・吹屋町兩芝居類火、へつきい河岸にて鎭る。

——續談海

一、同年（○寶暦六年。）正月十五日今曉丑ノ下刻、新材木町河岸ゟ出火、乘物町新道・堺

——續談海

覇都時代ノ火災

町喜屋町芝居不レ殘、難波町へつゝい河岸迄燒失、辰ノ中刻鎭る。

——年代炎上鑑

〔附記〕

十日(○寶暦六年三月。)本所羅漢寺邊出火ス。此頃連日火事、毎日烈風吹テ、世上甚騒シ。(○三月三日、四日、六日兩度ノ火災見ユ)

——續日本王代一覽

四月八日(○寶暦六年。)大手若年寄酒井石見守忠休屋敷燒。

——歷代炎上鑑

三日(○寶暦六年六月。)

七時過、並木町中程ヶ出火、南風烈敷ニ付、早々役人其外雷門幷駒形ヶ相詰、致二世話一、風神雷神ヲ額引取、智泉院本堂ヶ相詰、觀音作場迄奉レ移、其外諸堂本尊道具類片付之。上野ヶ御納戸落合右京吟味所口田十藏、其外中元頭・下部等被レ遣レ之。五半時頃ヶ相鎭、雷神門始寺中境內向側別條無レ之。(○歷代炎上鑑ニモ、「淺草並木丁花火や二階より出火、東側角まで家數凡二十軒餘燒。」下有リ)

——傳法院日並記

二、十一月廿三日大火　本年ノ大火ニシテ、八代洲河岸及築地ヨリ出火セル者其一也。青山ヨリ出火セル者其二也。

廿三日(○寶暦六年十一月。)

今朝六時御曲輪內出火ニ付、御老中方登城、同役衆之內攝津守殿(○太田資俊。)內大和殿(○內藤頼由。)黒大和殿(○黒田被レ出レ。五半時於伯耆守殿(○本多正珍。)退出ニて御座

寶暦六年三月後火災

十一月廿三日大火

レ。掛者登城刻限ニも相成レ之間直ニ詰在レ。以上。

追而

一、被レ出レ同役衆申合、御機嫌相伺申レ、未レ致ニ消火一レ之間、猶後刻爲レ伺ニ御機嫌一何も御出可レ被レ成レ。以上。

阿部飛驒守樣(○正允。)

追而之末

一被レ出レ同役衆……何も可レ被レ成ニ御出一と存レ段申遣レ。

阿部伊豫守樣(○正右。)

松平周防守樣(○康福。)

太田攝津守樣(○資俊。)

松平紀伊守樣(○信岑。)

青山因幡守樣(○忠朝。)

金森兵部少輔樣(○頼錦。)

內藤大和守樣(○頼由。)

朽木土佐守樣(○玄綱。)

追ル之末、阿部飛驒守樣同樣。

追ル之末、阿部飛驒守樣同樣。

被レ出レ同役衆之內、攝津守殿・貴樣・大和守殿——

被レ出レ同役衆之內、貴樣內大和殿・黒大和殿——

追ル之末、阿部飛驒守樣同樣。

永井伊賀守様○直陳。
黒田大和守様○直純。
酒井下野守様○忠告。
本多長門守様○忠央。
森川兵部少輔様○俊令。

同日

今日千代姫君様○徳川家治長女。御宮參所々出火ニ付御延引之旨、伯耆守殿被仰聞候段、松平紀州被申聞候。右之外殿中替義不承候。貴様御當番之處、九時前青山邊出火ニ付、氷川ニ御詰候故、難被成御勤、助順兵部少輔ニ得共差掛りの義故、次之順拙者詰合候付、御代り合直ニ助御番相勤候段、何も申遣候。以上。

助番　内藤大和守

追而

御曲輪内就出火、爲伺御機嫌、高家衆詰衆・同役衆被出候。今朝も伺御機嫌有之事故、三阿彌ニ申談承合候之處、最早伺ニハ不及之段申聞候付、中之間ニ御機嫌ハ相伺不申候。且西丸にも爲伺御機嫌、高家衆も被出候由、拙者儀も退出か罷出候。此段爲御心得申進候。

被レ出候同役衆之内、攝津守殿・大和守殿・貴様○——

右同斷ニ付、從御三家、紀伊宰相殿○徳川宗直。尾張宰相殿○徳川宗勝。徳川常陸介殿○重倫。爲伺御機嫌被差上使者候由ニ候へ共、退出之節迄不罷出候。

退出之節迄、未致消火ニ付、明日も伺御機嫌之筋ニも可有之哉と、大目付衆に申談、猶又三阿彌に無急度承合候之處、今日ニて相濟可申旨申聞ニ付、明日ハ罷出間鋪旨、同人に申談置候。是又爲御心得申進候。

十一月廿五日

上使　久松忠次郎
松平土佐守○山内豊敷。
同市橋大膳亮勝五郎○池田重寛。
松平阿波守○蜂須賀重喜。

——本丸廻狀留

右居屋鋪就類燒、爲御尋被遣之。○柳營日次記同。

十一月廿三日○寶曆六年。

今日出火有之候ニ付、千代姫君様御宮參御延引之旨、御目付衆被申聞候。

——柳營日次記

出火書留

子十一月二十三日曉六ツ時、八代洲河岸林大學様御事林民部少輔様○信充。御

覇都時代ノ火災

屋鋪ゟ出火。

織田兵部少輔樣○信富。溝口出雲守樣○信温。直松平和泉守樣○直佑。乘松平伊豆守樣○信復。松平越後守樣○長孝。松平能登守樣○乘顯。青山因幡守樣○忠朝。松平土佐守樣○山内豐敷。松平阿波守樣○蜂須賀宗鑽。松平勝五郎樣○池田重寛。牧野越中守樣○貞長。井上河内守樣○正經。井伊兵部少輔樣○直存。永井日向守樣○飛驒守直珍歟。本多美濃守樣○中務大輔忠敞。松平主殿頭樣○忠祇。右御屋鋪。夫ゟ山下町・南鍋丁・南佐柄木丁・加賀丁・丸屋丁・瀧山丁・守山丁・惣十郎丁・竹川丁・出雲丁・芝口北紺屋丁内 原書難讀 丁・三十間堀・汐留三角屋鋪・芝口北紺屋鋪・木挽丁七丁目裏通り、松平陸奥守樣○伊達美作守重村。奥平大膳大夫樣○昌教。御屋鋪迄類燒。

同日朝五時過、築地武家方ゟ出火。

西本願寺地内十四五寺、同所南小田原丁海手迄類燒。

同日晝時前、青山權田原ゟ出火。

麻布邊、芝二本榎・三田邊類燒。

——町年寄手控

廿四日○寶曆六年十一月。

一、昨朝六ツ時ゟ丸内出火、八代洲川岸林大學頭殿火元之由、大火ニ成、鍛冶橋。數寄屋橋・日比や門之内、大名小名多類燒。夫ゟ町屋ニ火移、京橋邊濱手之方ニ燒出、築地門跡寺内ニ飛火有之、寺中其外彼邊類燒。同日四ツ時青山邊、麻布谷町邊ゟ同時兩所ゟ出火、是又大火ニ成、芝筋三田之邊多燒失。右類燒之内、寺社御奉行青山因幡守殿○忠朝。町御奉行土屋越前守殿○正方。ニ類燒見舞使僧遣之。

——傳法院日並記

廿三日○寶曆六年十一月。

一、卯上刻林大學殿屋敷出火、北風烈敷、大名小路兩側不レ殘、數寄屋橋之外、八官町・通町・木挽町・築地・奥平大膳大夫殿屋敷迄類燒。翌日寅刻消留。

一、辰刻過、築地出火、堀田殿中屋敷、旗本衆・本願寺之寺中類燒、小田原町同然、未刻過消留。

——金地院記錄

十一月二十三日○寶曆六年。寅牌、尾張丁及ヒ八代洲河岸築地ヨリ失火、又青山權太原大火ニ及ヒ、烟焔愈熾ニシテ、數寄屋門ノ方面ヨリ尾張丁ヘ延燒シ、上邸ニ及ハントス、公北門邊ヘ出馬指揮ス。源姫性善婦人等深川ノ邸ニ避ク。木挽丁麻布兩邸ノ棟宇灰燼ス防火人員ヘ酒ヲ賜フ。

——伊達○徹山。治家記錄

十一月廿三日○寶暦六年。江戸御上屋鋪類燒。八代洲河岸林民部少輔殿ヨリ出火。

——御當家年代略記○高知澤。

十一月廿九日○寶暦六年。傳聞、去廿三日寅刻ゟ江戸大名小路出火、及午刻青山出火、廿四日寅刻ニ至、火漸消。近年之大火也。武家屋敷廿五六ヶ所燒、廣一里長三里程類燒、人多損云々。

——定之卿記○編年史料收。

十一月廿七日○寶暦六年。辛卯天晴。未刻參內、申斜退出。傳聞從廿三日寅刻ニ及廿四日寅刻ニ江戸大火、火從二ヶ所出云々。一ヶ所從青山長屋出云々。風聞區々。

——定晴卿記○編年史料收。

○寶暦六年十一月二十二日○廿三日ノ誤歟。寅ノ刻江戸丸の內やよす川岸ゟ出火、大名小路廿二ヶ所燒、すきや橋へ火出、木びき丁・新ばし火ととまる。廿三日辰ノ刻築地御堂近所より出火、海切りにて火ととまる。同日辰ノ刻青山權太原六堂の辻ゟ出火、相模殿橋にて火ととまる。所々御大名やしき多く類燒。

——壽福年代記綱目○編年史料收。

十一月廿三日○寶暦六年。千代姫君御宮參之處、八代洲河岸林大學頭ゟ出火、大名小路・數寄屋橋・木挽町迄。御延引。

同日青山六道辻ゟ二本榎迄燒、辰刻ゟ子刻迄。

——曆年雜志

一、十一月廿三日○寶暦六年。千代姫君樣山王ニ御宮參、御歸ニ堀田相州ニ御立寄之由、段々御支度有之、五半時之御供揃被仰出ニ候。然處明ヶ六時過、八代洲河岸林大學頭屋鋪より出火、段々大火ニ成、大名小路松平相模守を初、上杉其外段段燒ル內、築地邊ニ飛火。夫ゟ濱御殿邊迄燒通りニ候、翌朝消し。又晝前青山六道の辻邊ニ出火、あさかわ町・御そうし町・麻布邊一本松も燒、善福寺のいてうの木も燒る。暮時消し。

一、右之通大火ゆへ、今日の御宮參り御延引之。

一、當二十三日林家より出火類燒之覺

火元 林大學頭
中奥御小姓五千石 大久保因幡守
上ニ同 內藤隼人
廿五萬七千九百石 松平阿波守
七萬石 松平主殿頭
五萬石 松平越後守
三萬石 松平能登守
火消屋鋪 神保兵庫
刑部卿樣付 田沼市左衞門
三拾二萬五千石 松平勝五郎
二拾四萬二千石 松平土佐守
七萬石 松平伊豆守
六萬石 松平和泉守
八萬石 牧野越中守

六萬石 井上河内守
五萬石 溝口出雲守
貳萬石 井伊兵部少輔
三萬六千石 永井飛驒守

右松平主殿頭屋敷ニて鎮る。町奉行屋舗土屋越前守ハ殘りゐ。又木挽丁高尾孫兵衛屋舗へ飛火、近邊燒る。并青山之火事合ゐる近年の大火也。

一、林民部少輔大學頭父。遠慮。嫡子林大學頭差控。

閏十一月十二日御免。

出火狂歌

大學　諸大名曰。大學ノ公儀之儒者而諸方燒ノ本也。於今可レ見二諸人爲レ困次第一者。皆因二近邊損一。而貧乏次レ之。借金必由レ是。賴則近共不レ拂矣。

諸弟子曰。大學ノ火ハ一町ノ大名之人騷火焰之法也。蓋火消情力出則既是防。仁義禮智之情以云事不レ能。是以皆以其情のなき事知無キ事ヲ知テ大火ニ至らシム。

知タリ逃タリ、燒タリ、飛タリ、火ヲ出ス君子アリ、終ニシメラスト云ヘリ。

知タリ逃タリトハ、隣家ヲ云。燒タリ飛タリトハ、丸ノ内ヨリ築地ヲ云、終ニシメラストハ、大學火ヲ數寄屋橋の内止メサル事ヲ云。

五萬石 本多美濃守
五萬石 青山因幡守
貳萬石 織田兵部少輔

古文秋風辭　大名燒分百姓悲分、大學煙出火事南歸ルニ藏有ニ火入一、門有ニ燒殘一、有ニ奉書一不レ能レ防、出ニ梶橋ヲ渡ニ築地一、御堂殘寺中燒矣、胴樂分貧乏多矣、借金幾時如ニ何拂一矣。

大學か孟子分けなき四書こない、論語とうたん珍事中庸。

丸燒に藏も殘らす燒た土佐、隣も同し四國あわれさ。

大名も火にく〳〵はつて居られまい、急に燒出火事橋の内。

燒拂

やあら大學が出火を申さハ、屋敷か千軒町屋か萬軒、門跡寺中か十六軒、青山通りか一萬軒、北風西風吹おろし、東の海へさらり〳〵。

六道の辻より出し火焰にて、餓飽のやうなる御家人を燒く。

麻布一本松燒失ニ付

一松既燒失　千齡已時窕　可レ憐是麻布　前表不レ知レ氣。

大學まい

一ニかわらをふみやぶり、二ニ西かつよくて、三ニ先ハ築地まで、四ツ依田ハ乘廻し、五ツ出雲は大さわき、六ツ六ツからやけ出して、七ツなむさん堀田殿、

八ツやしきは火消にて、九ツ小くらハ皆やけた、十てとつくと夜か明た。

築地門跡ニて例年之講の節ニ候へ共、廿三日ハ御日柄ゆへ延引いたしゐ由然るに右之火事寺中へも火入、寺家二三軒も燒るよし。

門跡の御講の内に火かいりて、うちはしんらん外はこんらん。

大學を狂歌ニ様々申ニ付

火元そと林たてられ大學か、生ていられぬしのゝとうまく。

火の字を句の上ニ置て

姫君の日吉まふてに火を出して、ひとりひになる日本の儒者。

青山邊火事ニ付狂歌

六道の辻より出し火の車、廻り〳〵て地獄谷まて。

六道てまつ(ママ)し佛ハまよわいて、まよふ佛は輕い御家人。

六道のほのふのけむりきへやらて、がきのよふなる御家人を燒。

六道の花まつからに火が付て、ちらして〳〵ちやん〳〵。

萬年も生る龜屋ハおわり町、笑ふひすも今はなき顔。

大火の三日まへに、戸田越州より青山因州の方へ婚禮有之、因州類火ニ付、

三ツめより里へ歸られ、ふしん中逗留のよし。

やけわかれ因幡の嫁の戸田に居ふる、小屋かけ出來ハはや歸りこん。

——續談海

林大學頭殿屋敷出火幷青山六道辻火事

寶暦六子年十一月廿三日朝飯時分の比とも覺ゐが、萬壽姫君樣御宮參之御當日にあたり、北風つよく、八代洲河岸林大學頭殿屋敷より出火いたし、木挽町築地邊迄も類燒いたしゐ由、翌朝我等通り町より見ゐところ、五ツ時前にも有之ゐ哉、白き煙出申ゐ、あれは尾張町えびすやと申吳服屋の木綿藏へ火入ゐ由申聞ゐを覺居申ゐ。其頃の落首に、

大學が孟子わけなき火を出して、ちんじ中庸論語同斷。

右朝飯時分の火事に、三十間堀邊は夜の八ツ時分に燒ゐ由。同日又青山六道の辻より出火いたし、これも大火に相成、麻布樹木谷までやけゐ。其頃の落首に、

六道の辻より出る火の車、めぐり〳〵て地獄谷まで。

右之歌を六道の辻へ何者か張りゐ處、又々何者か下の句へ添筆して、餓鬼の

やうなる御家人をやくといたしい。土地の御家人立腹いたしい由。

——親子草

此外歷代炎上鑑ニハ、此ノ災ヲ世ニ大學火事ト云フト稱シテ、顚末ヲ詳述シ、年代炎上鑑・武江年表・續日本王代一覽・續皇年代略記、其他亦皆之ヲ記スト雖、煩ハシケレハ今擧ケス。唯三才雜錄ヲ左ニ抄シ、上載諸記ノ不備ヲ補フト云フ。

寶曆六年丙子十一月廿三日明ケ七半時比、八代洲河岸ゟ出火、西北風にて、左の通燒失。翌廿四日明ケ七時比火鎭ル。

數寄屋橋御門內、

火元 林民部少輔・田沼市左衞門・同 河內隼人・溝口出雲守・青山因幡守・松平勝五郎・織田兵部大輔・松平越後守・松平和泉守・松平能登守・松平土佐守・松平阿波守・井伊兵部少輔・井上河內守・永井近江守・松平主殿頭。

數寄屋橋御門外、

數寄屋町一丁目。山下町、町屋兩側燒失。南鍋町、町屋兩側燒失、四五軒殘ル。南佐柄木町、町屋兩側燒失。加賀町右同斷。瀧山町、右同斷。宗十郎丁、町屋兩側燒失。材木丁、同斷。八番丁、同斷。丸屋町、同斷。山王丁、同斷。內山丁、同斷。出雲丁、同斷。竹川丁、同斷。尾張町一丁目二丁目、同斷。金六丁、同斷。南大坂町、同斷。三十間堀四丁目、町屋半分燒失。同五丁目六丁目七丁目八丁目、町屋兩側燒失。

木挽町六丁目、

仙石因幡守・松平陸奧守藏屋敷・奧平大膳大夫。

築地、

御書院番花房近江守組火元 花房又十郎

寄合 戸川與一郎

小普請組堀田主膳支配與頭 高尾孫兵衞

門跡寺中 三十二間燒失本堂殘ル。

同所小田原町 一丁四方燒失、角五六軒殘ル。

同所 稻葉紀伊守・堀田相模守中屋敷。

右同日、青山權田原ゟ出火、西北風にて、左之通燒失、同日暮六時迄火鎭ル。

青山權田原之內、

吹上御庭方 木本源兵衞

小普請組横山內記支配 諏訪市左衞門

蓮淨院樣附 寺名清八郎

西丸御小人 片岡與次右衞門

田安御勘定 久保又七郎

西丸御廣鋪御用部屋附 生島定右衞門

同 菊間丈右衞門

同島田定五郎組 吉野元次郎

同 小島幸右衞門

田安廣敷方 小林文右衞門

小普請組松平頼母支配 川崎與茂八

添番 鈴木七十郎

御廣鋪伊賀之者 吉田長藏

西丸御切手番頭 吉野左仲

御本丸御臺所人 長谷川傳內

田安下屋鋪下奉行 中村清藏

同表御臺所人 窪川藤三郎

御本丸御小人目付 鈴木清六

御小人 高田新七

御臺所人 竹瀨紋次郎

御廣鋪方 小保造酒右衞門

御本丸御賄方 飯島甚平

蓮淨院樣廣敷方 中山五兵衞

蓮淨院樣附 石田宇右衞門

同斷 池谷久右衞門

御數寄屋方 菊地新七

同小十人組山本源五左衞門組 蒔野孫兵衞

小普請組川口能登守支配 坂部源七郎

御本丸御勘定 望月忠左衞門

小普請山口民部組 久保菅右衞門

小普請組田中出羽守支配 佐々木新三郎

蓮淨院樣御用部屋小使 廣田小右衞門

小普請太田美濃守組 岩瀨長次郎

西丸御膳所人 山崎惣右衞門

西丸廣鋪方 小林十次郎

御本丸御留守居番柴田第右衞門組 北村平十郎

同斷 久野木傳藏

小普請組松平頼母支配 酒井豐三郎

小普請組川口能登守組 鈴木折右衞門

覇都時代ノ火災

御本丸御留守居番柴田才右工門組 中村金右衛門
御小人 石川喜右衛門
吹上御廣敷番 山崎又兵衛
御臺所人 中根庄助
同斷 河野彌一右衛門
御坊主 山中宗筑
御庭方 岩村六右衛門
吹上御庭方 吉田四郎左衛門
小普請田中出羽守組 加藤又左衛門
同戸川五左衛門組 加藤宇八郎

同斷 金澤八郎左衛門
大奥御膳所組頭 關十左衛門
黒鍬方 太田新八
御勘定 勝屋治兵衛
一橋御徒頭 細井幸次郎
御本丸御中間 和田吉右衛門
御小人 芝山杢兵衛
同 小田權兵衛
同山口民部組 高久嘉七
西丸伊賀之者 塚本林右衛門

小間遣 宮川助七
御作事方 林田彦太郎
御小人 渡邊清三郎
小普請島田庄五郎組 矢野左太夫
吹上御庭方 石原喜平次
同廣鋪 岡田長十郎
蓮淨院樣御小人 谷城八郎兵衛
同 五味半左衛門
同堀田主膳組 池谷半左衛門
蓮淨院樣御廣敷添番 島村伴右衛門

青山御爐路町、同所御數寄屋町、同所淺川丁、同所傘町、同五十人町、右町屋不レ殘。

御疊方 小和田長十郎
御作事方 飯島新八郎
同 森田久右衛門
同 清水平八
同 肥田甚助
同 仙田仁平次
同 小關文平
同 長屋嘉兵衛
同 森谷銀平

同 下村仁左衛門
同 齋藤武助
同 石橋勘兵衛
同 村本太右衛門
同 村田新三郎
同 西村銀内
同 入山平右衛門
同 金井政右衛門
同 青木傳七

同 山崎治助
同 中村文左衛門
同 桑原又七
同 石橋友右衛門
同 木村清藏
同 森文六
同 山中淺右衛門
同 高橋嘉平次
同 川井十右衛門

同 萩野孫七
同 太田三郎右衛門
同 山田嘉平次
同 篠崎忠左衛門
同 細谷八十八
同 金井孫兵衛
同 坂部藤八
同 中村忠助
同 肥田忠七
同 梶塚平次郎
同 町田甚五郎
御本丸御留守居番笹木靱負組 福田甚左衛門
同田中出羽守組 關木唯七
御書院番稻葉紀伊守組 内藤左門

青山新屋鋪之内、

御小性組武田越前守組 山崎左門
西丸御書院番松平下野守組 細井喜三郎
御小性組大久保豊後守組 天野彦太郎
御小性組秋田大和守組 東條十郎左衛門
小普請組田中出羽守組 小林内藏之助

同 黒子左吉
同 山口喜八郎
同 岡野左源太
同 太田久太郎
同 山角藤八
同 内藤源七郎
同 細井吉左衛門
同 小高八郎右衛門
同 長尾助次郎
同 内藤此右衛門
同 坂本伊右衛門
小普請太田美濃守組 同源之丞
御廣鋪添番 村松定右衛門

紀伊家中 下村長左衛門
御書院番伊澤播磨守組 本年靱負
小普請筒井内藏支配 川奈助之進
一ツ橋御小性 永井與右衛門
新御番駒木根大内記組 加治馬之助

同 小野庄九郎
同 篠崎理兵衛
同 岡野佐兵衛
同 田中勘八郎
同 石川半左衛門
御本丸御庭方 猿橋清兵衛
同 小宮山三郎兵衛
同 竹田喜助
同 辻谷忠右衛門
同 水越彦四郎
同 藪内助右衛門
同戸川五左衛門組 佐藤源之助
表モヤ少々殘ル 脇坂中務大輔

町醫 堀宗雄
小普請組川口能登守組 遠藤平三郎
同八木十三郎支配 比留七之助
新御番小笠原敎七郎組 福王五郎助
御代官 稻垣藤左衛門

御小性組武田越前守組 淺野大學
小普請太田美濃守組 依田甚之助
町醫 關口文丈
新御番柳生播摩守組 森本助十郎
西丸御目付 細井金右衛門
御廣敷添番 榊原左内
御書院番上田能登守組 金森縫殿
小普請太田美濃守組 日下部權三郎
青山若松丁、不レ殘。
水野日向守 下屋鋪
御手大工丁不レ殘。六軒丁不レ殘。
御 江原孫七郎
一ツ橋同心 柴田甚之丞
斷 上[野]甚右衛門
同 野々山織平
青山因幡守 下屋鋪
麻布龍土町不レ殘。
松平岩見守
同所材木町不レ殘。
小納戸 谷庄右衛門

西丸御書院番戸田能登守組 柴田庄五郎
小普請太田美濃守組 權田吉三郎
紀伊殿家中 大崎宇左衛門
小十人組本多采女組 間宮帶刀
小普請組戸田五左衛門組 服部辰次郎
蓮淨院樣御侍 佐藏秀之進
御徒目付 上田三郎助
小普請支配 横山内記
同斷 内藤仁兵衛
紀伊家中 清水孫右衛門
同 加藤孫次郎
留守番笹本靱負佐組 森重兵衛
青山大膳亮 下屋鋪
米津越中守

西丸御小性藪土膳正組 水野庄助
御小性組菅玄蕃頭組 井出甚五右衛門
西丸御小性組戸田豐前守組 岡田式部
大御番大久保右京組 朝比奈權平
御本丸奥御祐筆 臼井藤右衛門
小普請戸川五左衛門組 佐藤源之助
小普請横山内記組 成瀨仲
御小人 坂本友八郎
火之番 松本兵助
同 石川友十郎
小川又次郎

大御番酒井飛驒守組與力同心屋鋪。
御書院番齋藤攝津守組與力同心屋鋪。
同所六本木町不レ殘。 增上寺末寺 深廣寺。同所芋洗坂町不レ殘。
西丸表坊主 臼井宗務 同宗甫
同所日ヶ窪通り不レ殘。
青興寺末寺 龍興寺
町醫 中村玄醫
毛利文之助
同所宮村町不レ殘。
本王寺末寺 安全寺
增上寺下屋敷。
中川御番 岡田將監
御小性組戸田豐前守組 山田孫右衛門
御廣敷御用部屋書役 土場新右衛門
同所宮下町三丁程。
同所雜式町不レ殘。
西門跡末寺 善福寺 本堂殘ル。寺中不レ殘。
同所網代町一丁程。
同所仙臺坂揚地不レ殘。
古川町不レ殘。

稻荷別當 法乘院
同斷 同玄智
内田主殿頭
西門跡末寺 廣稱寺
同所鳥居坂上迄。
御書院番森川下總守組 京極織部
御本丸御切手番 窪田甚五郎
同所長坂通一丁半程。
同所善福寺門前二丁程。
同所新網町一丁程。
同所坂下町不レ殘。
同所十番不レ殘。

誕生寺末寺 法傳寺
森川兵部少輔
御天守番之頭 井野定八郎
京極内膳
御代官 池田喜八郎

覇都時代ノ火災

小普請組山口民部支配 妻木傳藏
御先手 向坂清右衛門
山内式部
堀大和守 下屋敷
同所但馬町不レ殘。
町醫 二本松玄彌
同 池田久四郎
同 田中半四郎
同 長谷川彌兵衛
同 糸柳文右衛門
御本丸御數寄屋方 池田左五右衛門
同 齋藤十藏
御腰物方御番衆 隱岐五郎大夫
同所新町壹町程。
龍王院
正行寺
同所御殿新町一丁半程。
教善寺末寺 遍照寺
明行寺
同所一本松通り、片頰不レ殘。

大御番久留島信濃守組 山角兼之助
寄合 戸田主膳
石川若狹守 下屋敷
御庭方 高橋淺右衛門
同 奥山半次郎
同 井桁庄助
同 飯田平藏
同 金輪喜兵衛
御中間 村田吉右衛門
同 加藤十兵衛
稻垣周防守 下屋敷
同所本村町八丁程。
西門跡末寺 德養寺
大德寺末寺 天眞寺

小普請堀田主膳組 鈴木小三郎
石川左門
植木出羽守 下屋鋪
同 佐々木仙右衛門
同 山中團右衛門
同 水谷太郎兵衛
同 山崎安兵衛
同 吉川幸七
同 田中元右衛門
同 三崎源内
京極内膳 下屋敷
知恩院末寺 稱念寺
松平陸奥守 下屋敷

土方備中守 下屋敷
御先手 松平源大夫
末廣稻荷神主 中村播磨
伊藤宗看
同所鷺之森町屋不レ殘。
小普請組川口能登守組 茂野兵右衛門
黑鍬之者 村田七郎右衛門
島津淡路守下屋鋪
三田上松町四丁程。
二本榎向一丁半程。
燒止り、 信濃屋又右衛門。
追加類燒之分
麻布 大御番大久保右京組 久保右膳
古川 御書院番金田近江守組 長田兵左衛門
同所 小普請 矢代縫殿之助

增上寺末寺 長傳寺
松平丹波守 藏屋敷
大蓮寺
土屋能登守下屋敷
中川御番 土方半三郎
同 齋藤十藏

大法寺
普福寺末寺 德正寺
中川御番 中村九大夫
小普請組金田主殿支配 依田兵藏
同 磯仙右衛門
白銀臺丁一町半程。
教學院門前計一丁程。
六本木 御使番 遠藤源五郎
同所 大御番水野肥前守組 窪田宗三郎

〔參考〕

林大學頭之辨

林家の大儒朝散大夫大學頭信充ハ、役柄之事にて、嘸かし其身持も宜しか

覇都時代ノ火災

るべきこと思ひの外の化物なり。第一其心持掛りにして飽まで愚昧こと。平生珠數を持て看經する事あり。取分け林家ハ朱子學なり、近く大學之序にも釋道を忌嫌ひ、異端之虛無と云しに、如何なれば如此なるぞや。此間誹諧之附合に、心て拜んて儒者の看經と云ふをかしき句有。此人は表向は拜む大化物こと。其上仁義を說て天下の大儒たる人之八代洲河岸之表二階へ妾二三人舞子藝者を引連れつゝ上り、淨璃瑠三味線之大騷き度々なり。先年御側衆大久保伊勢守存生之節、隣屋敷にて、或時會合して異見申されしハ、其元御役柄不相應に相見へ申れ、ちと御遠慮なさるべしと申されければ、大きに赤面して其後遠慮あられしによつて、人之沙汰も少し止しに、又々伊勢守御役御免後、近所へも遠慮なく不愼之事とも多かりき。されば去々年霜月千代姫君樣御宮參之日に當りて、自分屋鋪より出火、丸の內悉く燒亡、役柄申譯もなき次第なりけるを何共存せず、天命なりと例の惡ずましにすまされけり。其上淺草觀音へ三浦五郎左衞門奉納之手水鉢に銘を賴まれ、觀音の妙智力の有難き事共書れしハ、御儒者こと不似合こと、心有人こハ笑れぬハなかりき。大儒にして儒ならず、儒者の大化物にして、天下之大小名

を化して世を渡る稀有之者とや云ん。

——寶曆江戶百化物

寶曆六年閏十一月十三日、依田和泉守樣御番處に、町火消い組に組は組よ粗萬組ろ組せ組も組す組め組百組千組え組く組ゑ組み組こ組か組ふ組け組ゆ組ほ組ま組し組右二十四組、町々月行事名主被召出、土屋越前守樣御立合こゑ、則越前守樣被仰渡。

當十一月廿三日、八代洲河岸林民部少輔屋敷ゟ出火致、風も强、大火こも及び、御役屋鋪近邊悉類燒、既こ御役宅にも所々に火移、甚危く可及燒失處、名主初八足共致出情消留れこ付、名主共に金拾兩、月行事人足ともに鳥目二百貫文被下置れ。

右二十四組、惣町六百貳町

月行事高六百五十四人。惣人足高五千百九十貳人。

都合五千八百四十五人。壹人分三拾貳文八分。

名主百四十三人。　末ハ翌十四日。

右二十四組申合、兩御番所に御禮御訴訟罷出れ。

——町年寄手控

寶曆六子年閏十一月

此間燒失之町々、燒灰燒瓦之類、往來に差出ハ町々も有レ之、往還之妨ニ罷成、不埒ニハ。右道筋に猥ニ不ニ差出一、往還之妨ニ不ニ罷成一ハ樣、取片付可レ申ハ。右之趣違背仕ハハヾ、急度咎可ニ申付一ハ。

閏十一月

——大成令續集

附記

寶曆六年閏十一月火災

寶曆七年火災

〔附記〕

閏十一月十八日(○寶曆六年)夜五時、濱町酒井修理大夫上屋敷ゟ出火、不レ殘燒亡。

十二月朔日(○寶曆六年)巳時過、御臺所町大久保彌右衞門ゟ出火、大風ニて、松平讃岐守殿長屋へ吹懸ハ、大勢屋根へ上り、あふきハゆへ、岩城伊豫守屋敷類火なり。

十二月十四日(○寶曆六年)夜五時、外櫻田阿部山城守ゟ出火、不レ殘燒失、四時鎭る。

——續談海

一、寶曆七丁丑年正月八日酉ノ下刻、芝田町一丁目裏通り小普請組戸川五左衞門支配有浦淸次郎屋敷ゟ出火、同所三丁目ニ而鎭ル。

一、同年三月九日子ノ刻、外櫻田龜井能登守宅ゟ出火、表門本家燒、長屋殘り、寅ノ上刻鎭ル、東南風也。

一、同年七月十八日夜丑之刻、幸橋之內松平甲斐守宅ゟ出火、一軒燒。翌十九日卯之上刻鎭ル。

一、同年十一月十九日未ノ刻、穴八幡前四ツ辻ゟ出火、本松寺近邊迄燒、松平越後守燒失、北風也。

——年代炎上鑑

寶曆八年火災

寶曆九年火災

寶曆十年火災

二月四日火災

廿五日(○寶曆七年十二月。)晴、大烈風。

一、麻布一本松之西、初更頃失火、町家三丁程類燒、仙臺侯・天眞寺無ニ別條一、諸所ニ御見廻被レ遣。四ツ時過鎭靜。

——金地院雜記

十二月廿六日(○寶曆七年。)淺草黑船町より出火して大火に及ふ。御藏は恙なし。

——歷代炎上鑑

五日(○寶曆八年二月。)

一、今曉六ツ時、六鄕兵庫頭殿屋敷出火、屋形不レ殘燒失、表通用門長屋相殘。右ニ付爲ニ見廻一、智泉院四ツ時罷越、且又上野御殿ニも御用人中迄、以ニ手紙一、右兵庫殿出火爲ニ見廻一、御使ニ而も被レ下ハ樣ニ申上。尤兼而爰元近邊出火之節之儀、御賴之儀有レ之ハニ付、右之通申ニ上之一。

——傳法院日並記

三月十日(○寶曆八年。)夜四半時、靈岸島より出火、大川端迄燒、七ツ時鎭火。

——歷代炎上鑑

廿五日(○寶曆八年九月○年代炎上鑑廿四日ニ作ル)丑ノ中刻、目黑不動尊別當瀧泉寺ヨリ出火、院中殘ラス燒亡ス。

——續日本王代一覽

四月廿日(○寶曆九年。)夜九時過、向柳原藤堂和泉守屋敷奧急火故、女子九人程亡命之由。

——續談海

十年庚辰(○寶曆○紀元二四二○年。)二月四日己卯(○己卯、三正綜覽。)赤坂(○市內。)大火シ、麻布六本木・芝田町(○市內。)等ニ延燒ス。(○淺野日記。金地院日錄。續談海。町年寄手控。定晴卿記。年代炎上鑑。續日本王代一覽。續皇年代

二月五日火災
二月六日大火
寶暦十年火災事蹟
二月四日火災

略記。武江年表。泰平年表。**五日庚辰**（○寶暦十年（紀元二四二〇年）二月。○庚辰、三正綜覽。**麻布狸穴**（○市内。年寄手控。年代上鑑。金地院日錄。**六日辛巳**（○寶暦十年（紀元二四二〇年）二月。○辛巳、三正綜覽。**芝神明前**（○市内。**火有リ。**（○淺野日記。町**延燒田町**（○市内芝區。**ニ至ル。是日**（○寶四二

橋京橋・深川（○市内。**等ニ延燒シ、洲崎**（○市内深川區。**ニ至テ熄ム。新大橋・永代橋等燬ケ落チ、人畜多ク燒死ス。**（○淺野日記。金地院日錄。續談海。北叟遺言。後見草。町年寄手控。定晴卿記。年代炎上鑑。壽福年代記。綱目。續日本王代一覽。武江年表。泰平年表。

神田（○市内。**又大火、日本橋ニ付、萬一御規式過御出馬も難計ニ付、供之者ハ詰切らせ申ル。右出火增上寺へも不宜ル趣ニハ、風ハ西北ニ。**——淺野日記

寶暦十年火災　二月四日ヨリ六日ニ至リ、連日赤坂・麻布・芝・神田等ニ大火有リ、就中六日夜ニ於ケル神田大火ヲ其最大ナル者トス。

一、二月四日火災　顚末左ノ如シ。

四日（○寶暦十年二月。快晴風立强、夕止、

一、出火、赤坂今井谷ゟ出火之由ニ。段々と燒募り申ル。四ツ半頃鎭り申ル。

一、今日老中附御斷ニ。併右之通大火ニ付萬一御規式過御出馬も難計ニ付、供之者ハ詰切らせ申ル。右出火增上寺へも不宜ル趣ニハ、風ハ西北ニ。

——淺野日記

四日（○寶暦十年二月。晴、

一、今四日七時過、赤坂今井谷出火、六本木邊・十番・小山・三田寺町・同朋町・田町七丁目迄延燒、烈風故海邊迄早ク燒了。巳刻前火靜。藏等者晩間迄燒ル由。西玄哲老人隣迄燒失、西家幸無難。

——金地院日錄

一、二月四日（○寶暦十年。晴、北風强。今曉七時前より赤坂今井谷火元小十人正木新藏より出火、此風にていもあらい坂へ燒出。夫よりひかくほ・雜式より、小山・寺町・ひぢり坂・三田田町八丁目ニて消ル。

一、二月四日出火、赤坂今井谷ゟ海際。長平均三十三丁。但シ南北同斷。巾平均五丁。當二月四日明六時、赤坂今井谷ゟ出火、西北風ニ而左之通燒失。

赤坂今井谷、

火元、小十人正木新藏・井上鐵五郎・門倉嘉悅・土屋惣兵衞・松平大膳大夫（○毛利重就。屋鋪鎭守稻荷宮計燒。花房外記・內藤大和守（○賴由。麻布六本木町屋不殘。清德寺・長狼寺・善光寺・大久保大藏大輔（○忠興。大久保吉五郎・廣瀨松益・岡田庄九郎・間部殿頭（○忠祇。三田寺町不殘。組屋鋪一町程。松平右京大夫（○大河內輝高。土岐美濃守（○定經。若狹守（○詮方。島津淡路守（○久柄。三田小山町屋七八軒程。松平肥後守（○容頌。

鹽見坂町三町程。

同明六時ゟ、元札之辻迄不レ殘燒失。久留島信濃守○光通。芝田町ゟ八丁目迄之内　松平薩摩守○島津重豪。松平阿波守○蜂須賀重喜。松平肥後守○容頌。細川越中守○重賢。

此節火事繁々ニて、當四日五日○寶暦十年二月。引續出火有レ之ゆ。

右場所、

——續談海

一、赤坂今井谷ゟ出火、麻布六本木・日ヶ窪・芋洗坂・鳥井坂・長坂邊、狸穴・藪下・十番邊、武家・神社・町屋。夫ゟ三田小山武家、同所寺町・三田町通、聖坂邊、本芝田町一丁目ゟ八丁目迄、海邊迄不レ殘。○以下略、五日ノ條參照。

——町年寄手控

二月十日乙酉○寶暦十年。天晴。傳聞、去四日江府麻生大火、了眞院殿嚴閣伯母御居住所類燒し云々、甚驚駭、委細令レ問二其樣子一未二相知一之由示送云云。

覺

一、當月四日明七ツ時、赤坂今井谷ゟ出火、北西大風、麻布松平大膳大夫樣中屋敷前へ出、大膳樣無二別條一、其外御屋敷・町家・花房樣御屋敷へ飛火、御屋敷不レ殘、大久保樣御屋敷直ニ吹掛、了眞院樣・御前樣御家中不レ殘やけ、一寸も殘所なく、ひ

かくほ通りゟ十番通りへ出、毛利樣其外戸川樣・後藤樣御長屋計殘、內不レ殘やけ、鳥居樣高いなり下通り出、二口ノ火ニ而、有馬樣西北通り御屋鋪町へ不レ殘やけ、有馬樣無二別條一、間部やけ、芝金杉本芝二丁目へ出、田丁八丁目兩かわ、札ノ辻・四國町・さつま屋鋪半分やけ、前後ゟ火廻り、田丁八丁目切、東ハ海切、西北風はけしく大火。

了眞院樣芝へ御出、御前樣芝屋敷御長屋へ御引越、家中芝もより〳〵引越ゆ。

——定晴卿記○編年史料收。

年代炎上鑑・續日本王代一覽・續皇年代略記・武江年表・泰平年表ノ類、異事無ケレハ略ス。

二、二月五日火災　其顚末左ノ如シ。

六日○寶暦十年二月。快晴。風立。朝之內少々曇。

一、昨夜五ツ半頃、麻布まみ穴ゟ出火、注進狀向々ゟ如レ例來ル。九ツ前頃鎭り申ゆ。

——淺野日記

五日夜○寶暦十年二月。

一、麻布狸穴武家より出火、近邊餘程類燒

——町年寄手控

覇都時代ノ火災

二月六日大火

一、同年（寶暦十年。）二月五日夜亥ノ刻、麻布狸穴出火、亥ノ中刻鎮ル。

——年代炎上鑑

五日（寶暦十年二月。）晴。

一、夜五時過赤羽邊屋敷失火、まみ穴燒失、飯田圓嘉類燒、早速見舞搏飯遣之。渡邊甚五郎殿無別條、隣家迄燒失也。是又搏飯贈之。

——金地院日錄

三、二月六日大火　六日酉ノ刻芝神明前ヨリ出火、田町方面ニ延燒シ、酉ノ中刻又神田旅籠町ヨリ出火、日本橋京橋ニ延燒シ、新大橋永代橋ヲ燒キ、深川ニ飛火シ、延テ洲崎ニ至ル。其間三四十町ニ亙リ、大小ノ橋梁多ク燬損シ、人畜ノ死傷尠ナカラス、翌七日ノ暮ニ及ヒテ漸ク鎮火スト云フ。

六日（寶暦十年二月。）快晴（風立。朝之内少々曇。）

一、暮六ツ時頃芝邊出火、火氣強くいたし早束出馬申いたす、御出番右京大夫殿（大河内輝高。）に罷越、用人へ申込いたす處、長坂嘉助出いたし芝邊出火ニ付、參上仕いたす段申込いたす處、御承知被成いたし、未ダ火元見不ニ罷歸一いたし、見合いたす樣被ニ仰聞一いたし。無ニ間御使番黒川與兵衞被ニ參いたし一、引つゞき間部玄蕃儀も參いたす。玄蕃儀用人ヲ以伺被ニ申上一、竹姫樣御守殿之方火近ニ付、信濃守殿（小出英智。）へ罷越いたす旨伺被ニ申上一、玄蕃儀ハ信濃守殿ニ被ニ相越一いたす也。

一、御出馬にいたへて、用人衆御供ニ被ニ出いたす一衆性（姓カ）名承り合いたす處、大野彌八郎出いたす由ニ付、得ニ申談一置いたす。

一、用人中を以被ニ仰聞一いたす、途中迄遣いたす火元見罷歸りいたす、芝宇田川丁燒申いたす由ニ付御座いたへて、增上寺へハ風宜いたす間、出馬見合可ニ申上一いたす。併餘り大火ニ付、今少し見合いたす樣被ニ仰聞一いたす、此方ゟも申上いたす樣被ニ仰聞一いたす、且しばらく見合いたす事ニもいたす間、勝手へ通りいたす樣被ニ仰聞一、則勝手へ罷通りいたす。

一、與兵衞申合、用人を以伺いたす、御使番火口番ゟ直注進之者、御氣遣もいたへ、早束可ニ申上一いたへ共、若遠方之者間違も御座いたす、おそなはり可ニ申哉一、兩人之內ニ而も罷越、見屆申上いたす樣ニも可ニ仕いたす哉之段伺いたす處、尤ニ思召いたす、併又々火元見遣シいたす、其者歸りいたす被ニ仰聞一いたす由也。

一、火元見罷歸りいたす所、表門前ゟ燒ひさり申いたす趣ニ相聞へいたす、乍ニ太儀一與兵衞罷越見いたす樣ニと被ニ仰聞一いたす付、則與兵衞殿被ニ參いたす一、自分ハ殘り申いたす。

一、直注進番御使番土屋惣藏被ニ相越一いたす、則被ニ申上一いたす、風筋ハ宜いたへ共、御靈屋ゟハ二三丁も可ニ有御座一いたす、表門迄燒募り申いたす由被ニ申上一いたす。

一、右ニ付御出馬可㆑被㆑成ハ由御用人申出ハ、御道筋ハ日比谷御門へ御懸り御出可㆑被㆑成との事ニ惣藏伺被㆑申ハ處、御付キ申參りハ樣との事ニハよしニ。左ハハヽ御先乘被㆑致ハ樣申達ハ則御門外へ出、頭巾ハとり、馬ニ乘御登城、門前ニ馬を扣へ罷在ハ。惣藏ニハ御先へ乘、自分ハ左之方少シひらき、尤高張立、跡乘いたしハ。能々そけ見ハニ、惣藏ハ直注進ニ參る供もつゝき不㆑申、挑灯も無㆑之ハゆへ、自分御先へ乘ハるも可㆑然哉ニハ。

一、增上寺ゟ二三丁ニも成りハ頃、用人迄伺可㆑申存ハ所、あの方ゟ被㆓仰聞㆒ハて、先ッ方丈へ御寄不㆑被㆑成、松原へ御馬被㆑立ハる、火氣之樣子も御覽可㆑被㆑成由ニ。則御先乘與兵衞へ申達ハ。尤與兵衞途中ニ參る懸㆓御目㆒ニ、火氣樣子被㆓申上㆒ハる、夫ゟ御先へ乘被㆑申ハ。尤惣藏一所ニ乘被㆑申ハ。

一、增上寺方丈ニ定る寺社奉行も相詰可㆑被㆑有、役者共へも御出馬之段可㆓申通㆒ハ間、私ハ方丈へ一寸罷越ハ旨、用人彌八郎へ懸ケ合、則御脇を馬之上ニ參る中禮仕乘ぬけ、方丈へ罷越ハ處、松平周防守〇康福。出被㆑居ハ間、御出馬之趣申聞ハ處、周防守被㆓申聞㆒ハハ、先刻ゟ罷越差圖等仕、もはや御氣遣も御座有間敷ハ。毛利讃岐守も罷出ハへ共、下谷邊出火ニ付、上野へ心懸け罷越ハ、此段被㆓仰上㆒ハ

樣ニと被㆓申ハ間、松原ニ御出被㆑成ハ間、御越被㆑成、御直ニ被㆓仰上㆒可㆑然哉と申達ハ所、承知之由被㆓申ハ、先ッ申上ハ樣被㆓申ハ間、則乘出し、馬上ニ參る御直ニ右之段申上ハ。

一、松平薩摩守〇島津重豪。人數共召連相詰申ハ段、承屆ハ上、是又御直ニ申上ハ。

一、依田和泉守へも逢申ハ、是も樣子共委細被㆓申上㆒ハ。

一、何レニも御書物等もハ間、方丈へ御寄可㆑被㆑成由ニ付、又々則其段役者へも申聞ハ。松平周防守へも申談ハ。尤周防守も松原へ被㆑參、御直ニも被㆓申上㆒ハ。夫ゟ方丈へ御出被㆑成ハ間、御跡へ付キ、馬上挑灯手ニ持、御先御跡共心付、一所ニ罷越ハ。方丈へ御上り被㆑成ハる、彌心附聲かけ申ハ。則一天方丈之方座鋪へ御通り被㆑成ハ。尤やはり玄關ゟ御上りニ。

一、右京大夫殿御見合御座ハ座敷、次へへハ用人衆休息も可㆑被㆑致ハ。自分ハ引罷在て、御用も御座ハハヽ御知らせ被㆑下ハ樣申談、休息いたし罷在ハ。右京大夫殿御逢可㆑被㆑成よしニ付、則罷出ハ處、御宅途中ニ參る御覽被㆑成ハニて、隨分御山之內風上ニ相見へハ、爰元へ御出御覽被㆑成ハへて、何とやら火先御靈屋前之方へ不㆑宜樣ニ見へ申ハ、風ハ如何ニハ哉、火元之樣子も見ハる申上ハ樣、御直

ニ被レ仰レ候。奉レ畏レ候旨申上、則急キ火元へ參り、樣子見屆、則、御直ニ申上候ヘ共、火氣殊外鎭り寄、もはや大方下火ニ相成申候。尤只今土藏抔燒候所も御座候。風之儀ハやはり西北ニ而御座候、火先之くるいハ、火先海手ニ相成申候、海手故とふ仕候而も風くるいハ故と奉レ存候旨申上候。尤もはや御氣遣成義無二御座一段申上候。且認殘候下谷之方出火沙汰如何ニ候哉、申上候樣被レ仰候。是ヘ和泉守承り候趣申上候よしニ付不二申上一候。

一、間部玄蕃被二相越一被二申聞一候ハヽ、竹姬樣御守殿へ罷越候處、信濃守殿ニハもはや御引取被レ成候、尤御氣遣無二御座一段被二申聞一、則其段右京大夫殿へ自分御直ニ申上候。

一、土屋惣藏ハ伺被レ申御用も無二御座一候ハヽ、場所へ罷越候旨被二申上一、則場所ニ被二相越一候。尤用人を以被二相伺一候也。

一、役者共罷出、自分へもかゆ抔出し認いたし候。

一、右京大夫殿被レ仰候ハヽ、彌もはや御氣遣御座有間敷候、御引被レ遊候ても可レ成由也。夫故與兵衞へも申談、もはや御氣遣御座候間敷候、御引被レ遊候ても可レ然と御直ニ申上、御供之方へも用人と懸ケ合承り屆候、用人ハ御供宜段申上、則御立被レ成候事知らせ遣候。

一、自分與兵衞ハ御先へ出、玄關式臺之上御先番之節御出迎仕候處に罷在、御送り申候。夫ゟ又與兵衞ハ御先へ乘、自分幷玄蕃ハ御跡ゟ左右へ別レ乘申候。

一、直ニ御登城之、御跡へ付登城申候之。

一、御同朋頭を以可二申込一處、御同朋頭出不レ申候間、御用部屋を以、私幷御使番共御跡へ御付キ申、登城仕候段申上候。

一、尤皆々御登城之、右御登城之事右京大夫殿に御知らせ、當番ゟ御徒目付內田藤兵衞ヲ以被二申上一候處、途中ニ而行違申候。

一、御老中方もはや御退出ニ而、御玄關前ニ而右京大夫殿御出合之、尤右京大夫殿直ニ御登城被レ成候。

一、無間右京大夫殿御退出之。自分中之口間ニ相詰居候處、右京大夫殿御退出懸ケ御呼被レ成、もはや御退出被レ成候、自分幷御使番共勝手次第退出候樣被レ仰候。奉レ畏候段御請申上、則御使番へも申達候。夫ゟ當番十郎左衞門殿へも及二挨拶一、九ツ過退出申候也。

七日

一、信濃守殿懸り吉次郎殿・帯刀殿へ被仰渡候ハ、出火ニ付、今日御能御延引被仰出候由之。

一、昨夜火事番勝次郎殿、防番又四郎殿、濱見廻り吉次郎殿、何も御役割有之候ニ付、火事場之方ハ六ツ迄被勤、夫ゟ何も登城申候之。

一、大火ニ而も消防等も無之趣ニ而、書上ケ無之候。又四郎殿防ニ候へ共、是又防立候ほとニも無之、其上いまた焼候時引取故書上なし。

一、向々不残大廣間へ寄可申旨、御同朋頭申出、則御譜代衆并菊之間詰衆共不残大廣間へ寄申候之。

一、溜り詰衆ハ松之溜りへ寄申候之。

一、宜段申上、則御老中不残之、御三家部屋へ御出被成、御延引之段被仰上、御非番御引、左衛門尉殿計大廣間へ御出、御延引之段被仰渡候。夫ゟ溜りへ御出、右同斷。

一、則御三家迄り大廊下へ廻り、十郎左衛門殿勤被申候。

一、向々へ不残出火ニ付御延引之段申達候。

一、自分ハ防番ニ候、延引ニ付早々供之者呼ニ遣し申候、今日抔ハ大火ニもなく、御延引之節之ため、供詰切らせ宜キ事ニ候、殊之外供呼ニ出候ニおそく心遣申候、以後心得ニ記置候。

一、只今ニ而ゟ本丁邊、日本橋邊焼申候故、吳服橋へ心掛ケ罷越候之。

一、吳服橋ニハ御使番板橋與五左衛門・櫻井監物被相詰候、火消付鳥居權之助・土岐大學被詰候。

一、大手組京極佐渡守（高矩。）有馬外吉（允純。）板倉內膳正（勝承。）相詰ル。

一、奥平大膳大夫（昌康。）ハ、攝津守殿御差圖ニ付、吉次郎殿・三郎兵衛殿召連レ被申、場所へ被相越候。

一、吳服橋へ參り御使番衆致面談候。夫ゟ常盤橋へ又見廻り申候。是へハ御使番馬場三郎右衛門・三好勝之助被出候。

一、櫻田組秋田東太郎（倩季。）堀丹波守（直堯。）伊藤豊後守（祐福。）鍋島紀伊守（直員。）被詰候。御使番兩人之衆致面談候。右ハ大火ニ付、兩御門へ立わかれ詰被申候事ニ候。夫故所々右之通見廻り申候。御門外并火事場も彌鎭り寄申候哉、見廻り申候。是ハ誠ニ鎭りより、下火計之趣故、見廻りニ罷越候趣意也。

一、攝津守殿火事場へ御越被成候よし、御城ゟ濱當り吉次郎殿・火事番三郎兵

御殿御付キ被申ル。是ハ出馬前御城ニ而承り申ル也。

一、段々火鎮り、もはや下火計之様子ニ付、則御使番衆申談、引取申ル。

一、尤攝津守殿も無間御引取被成ル、吉次郎殿・三郎兵衛殿御跡ヲ乗被申ル様子も見申ル。

一、御徒目付も攝津守殿御出馬ニ付、御先へ立申ル、安藤惣五郎出ル様見うけ申ル。

一、荒之助殿類焼ニ而ル、御屋も上り申ル、御用中故休ル事ハ伺不申ル。

八日快晴、南風。

一、菅沼織部正殿類焼之、餘り無沙汰ニ成り申ル故、用人迄安否聞、善兵衛遣ル。

九日

一、焼死人見分書之事、且市川出雲守ヲ屆、御裏御門番同心拝領屋鋪門前死骸見分遣ル處、右取計委細當番勤帳面ニ有之。

一、安藤對馬守〇信成。かかきから丁屋敷類焼ニ付、大塚屋鋪ニ住居之旨、手紙ニて一昨日申參り、則今日爲心得當番所へ下ケ申ル。

六日〇寶暦十年二月。晴、烈風。

——淺野日記

一、暮前神明前七軒町失火、神明御社無別條、其外社内不殘焼失、片門前より將監殿橋迄焼失、金杉橋焼失、芝四丁目と海手之方焼失、四日朝焼失之場所迄焼、夜四ツ過火靜。

一、夜五時頃筋違橋之外旅籠町ヲ失火、柳原之土手を越、兩國橋と無別條、町片側焼失、新大橋焼落、永代橋江戸橋・荒布橋・靈巖橋其外小橋共五十三程不殘焼失、深川八幡御社無別條、三拾三間堂洲崎迄焼失、大名屋敷・御旗本屋敷等夥敷焼失通交之分と牧野豊前守殿〇惟喬。菅沼織部正殿・横瀬駿河守殿・前川玄徳老

焼失、幅壹丁ニ積り十貳里程焼失之由也。

但、今六日夜五半時失火、八日朝迄焼失、藏ニ火之入ル分と三四日後迄焼ル由、近來之大火也。

——金地院日錄

一、二月六日〇寶暦十年。暮過より芝神明門前ヲ出火して、社内本社殘り、并通り筋、東ハ濱邊、南ハ增上寺片町より本芝四丁目濱通り、殘りなく焼拂。夫ヲ金杉橋焼落ル。此時北風甚鋪相成ル事。然ル處夜戌の刻計に神田旅籠町火元たより火事、中町・六間町・花房町へ移り、さくま丁・山本町河岸通りへ焼出ル。北風强く吹、柳原小柳丁土手、岩井丁へ移り。夫ヲ火口三ツに成りて、一筋ハ鹽丁へ押出

し、伊勢丁・小田原丁へやけ出ス。此時江戸橋燒落。夫よりかやは丁藥師前坂本通りれいかんはし・みなとばし燒落、南新堀大川端へ燒出ス。一筋ハお玉が池より小傳馬丁、辨慶橋大門通り、田所丁・人形丁通り、堺丁中村勘三郎芝居、豊竹肥前井外記座、ふきや町市村宇左衛門芝居、辰松あやつり座、其外茶屋殘りなく、船丁裏表のこらすやける。一筋は紺屋丁へ移り。夫より小傳馬丁三丁目、傳馬丁通り、通り鹽丁・堀留め・堀江町・新材木町・難波丁・大坂丁・へつついかし濱丁。夫より小網町三丁目續て永代橋燒落并に北新堀へ燒出ス。此火いよ〳〵さかんになり濱町通り武士屋鋪不レ殘燒、新大橋燒落。夫より深川へ移り、きよすみ丁靈雲院（新地高料二百石。）燒る。夫より仙臺河岸寺町不レ殘やけ拂。此火深川通り火の見横丁、末ハ三十三間堂不レ殘、すさき辨天前ニる留ル。しかるに跡火二口成、和泉橋落、土手外豊島丁柳原土手通り新橋土手下久右衛門町・富松丁・淺草御門まへ馬喰丁・横山同朋町・村松丁・立花町・北濱丁河岸迄燒る。西ハ筋違御門内河岸丁ゟ鍋丁通り、新石町東かわ不レ殘、小傳馬丁上町・本白銀丁三丁目・本石丁・本町三丁目・瀬戸物丁裏河岸不レ殘、室丁三丁目すべて片かわ通り、是迄不レ殘燒、七日晝頃ニ成り、日本橋際ニて留ル。

一、二月六日（寶暦十〇年。）之夜暮六時、芝神明門前ゟ出火。芝神明門前鳥居際火元角屋權兵衛、社内茶屋不レ殘、大好庵は殘て、三緣山增上寺表門前片町前・將監橋迄不レ殘燒失。芝居町通り裏町濱手迄不レ殘燒失。大久保大藏大輔（忠〇興。）金杉橋燒落、田丁ゟ濱手不レ殘燒失。松平因幡守（忠〇林。）諏訪因幡守寺九ヶ所炎上。裏通五十間計炎。去ル四日之火事燒留りニて行合鎭る。

一、二月六日（寶暦十〇年。）夜六半時、神田旅籠町一丁目火元足袋商賣明石屋嘉兵衛ゟ出火。

誓願寺前通之分、

市橋伊豆守（長〇晴。）太田半藏・櫻井松之助・久喜升次郎・川口隼人・細川玄蕃頭（興〇晴。）

飯塚五兵衛・岡田勘助・萬年半左衛門・奥田山城守・村田彌吉。岸町前通り、田中新右衛門・村田長菴・堀源之丞・夏目傳右衛門。紺屋町前通り、廣戸市十郎・吉野彌八・高山左源次。

おたまが池分

藤堂內藏丞・曾雌源八郎・川口內記・鈴木忠兵衛・上坂安左衛門・前川玄德・池永仲之丞・松井市三郎・遠山吉十郎・山崎壽圓・多喜安元・横瀨駿河守。松下町近所、富田

豐吉・佐野修理介・松野六兵衛・渡邊壽軒、横山同朋町、村越長三郎・細井百助・本郷半左衛門・富澤小兵衛・鈴木壽硯。

屋けん堀の分、

岩室佐左衛門・福田久右衛門・依田十郎兵衛・田村筑後守・逸見彦三郎・逸見八左衛門。

元矢のくら分、

岩手主稅・糸原勘兵衛・黒澤左之進・河野主馬・由比彦次郎・大岡金兵衛・加藤金左衛門・湯川仁安・龜田三郎兵衛・池田茂十郎・金堀安右衛門・右津彦十郎・伊藤六郎兵衛・奥山三阿彌・横田六之丞・設樂勘左衛門・北村市之丞・小泉茂右衛門・鈴木七兵衛津田六之助・小野左大夫・山本權十郎・伊佐三悅・設樂長兵衛・小玉喜兵衛・田中八十郎・荻原源右衛門・江森新次郎・八幡山城守・境野六左衛門・大坂友巴。

兩國の分、

村田惠齋・池田新兵衛・西尾隱岐守〇忠尚。松平讃岐守〇賴恭。田沼主殿頭〇意次。大岡千太郎・板倉佐渡守〇勝清。西尾中(脫カ)屋鋪。山伏井戸近所、北住松之助・安田半藏・五十嵐權右衛門・志賀幸三郎・松平權兵衛・細田主水・横田半十郎・福王甚左衛門・鈴木五郎兵衛・伊佐幸宅・稻葉十左衛門・高橋休閑・國田(小カ)切新五郎・田中三次郎・内方鐵五郎・近藤元次郎・土田門賀・梶平吉・眞鍋式部・佐竹壹岐守〇義通。堀田相模守・濱丁河岸通り、堀長門守〇直寬。吉田伊織・美濃部與藤次・小笠原越中守・牧野越中守〇貞長。松平能登守〇藎。水野勝五郎・水野豐後守・秋元但馬守〇涼朝。酒井遠江守〇忠與。安藤丹波守・鵜飼左十郎・三輪五郎兵衛・織田圖書・青柳勘四郎・深見新兵衛・永井伊賀守〇直陳。米倉丹後守・戸田大學。大橋手前、酒井遠江守・牧野大藏・松平攝津守・菅沼織部正・淺野隼人・横田備中守・新庄越中守・河内新左衛門・自賀田伊豫守・村山玄角・牧野助十郎・土岐左兵衛・美濃部庄兵衛・長坂十郎兵衛・竹本要人・中野竹右衛門・能勢次左衛門。

かきから町分、

水野壹岐守〇忠見。大津又右衛門・戸田求馬・大久保荒之助・小野助九郎・朝倉仁左衛門・飯河傳右衛門・黒川左門・千本左京・金田遠江守・牧野豐前守〇惟成。本多大和守・本多伯耆守〇正珍。竹田源次郎・小栗傳二郎・酒井石見守〇忠休。土井伊豫守〇利信。土井大炊頭〇利里。同能登守〇貞。小網丁表通り、安藤對馬守〇信明。阿部飛驒守〇正允。榮久橋、吉良式部・日向次郎八・酒井稚樂頭〇忠知。水野要人。箱崎二丁目、久世出

雲守○明。廣松平伊豆守○復。信朽木出羽守○貞。綱北新堀末御船手屋鋪。

深川寺町分、

右衛門督殿○宗。徳川戸田采女正○英。氏久世出雲守・岡部小左衛門・松平鍋五郎・廣瀬伊八郎・坂部三十郎・山下久右衛門・秋田大和守・吉田半太郎。

八幡向新堀分、

有馬備後守○久。氏稲垣攝津守・松平伊豆守。きは町、松平伊賀守○順。忠洲崎辨天前、細川越中守○賢。重永代橋向御船手屋鋪。永代橋・新大橋燒落。夫ゟ深川新大橋向町家殘ル。萬年橋際ゟ燒ル。松平遠江守○名。忠井上河内守○之。正戸田因幡守○寛。忠仙臺河岸、萬年橋殘ル、御船藏殘ル。靈雲院・大工丁・伊勢丁・平野丁一二三丁目・吉永丁・永久丁・靈岸寺地中不レ殘、本堂ハ殘ル。淨心寺寺中不レ殘、本堂殘ル。本誓寺・雲光院・法禪寺・善徳寺・秋元隼人・酒井小平次・米津越中守○政基。駒木根大内記・仁木藤右衛門・伊奈傳兵衛・方禪寺・眞光寺・宜雲寺・泰曜寺・萬年丁・十丁・八軒寺町・平松李左衛門・森川彦四郎・黒山傳兵衛・伊藤四郎左衛門・日下部兵藏・正源寺・因速寺・萬徳院・西念寺・金王宮・松林寺・神尾市左衛門・安藤山城守・水谷内膳正・大久保豊後守・太田源之丞・松平伊賀守・立花監物・三枝甚右衛門・六郷平左衛門・溝口出雲

守○温。直有馬備後守・馬場傳兵衛・水野金兵衛・山崎藤左衛門・横田備中守・内藤紀伊守○興。信松平陸奥守○重村。伊達酒井雅樂頭・伊奈半左衛門・戸田近江守・正覺寺・惠照寺・増林寺・海福寺・心行寺・玄信寺・法乘寺・湯岳寺・松平和泉守○佑。乘永代橋向嵯峨町上之橋ゟ下之橋迄之間、三丁四方程町家殘。嵯峨丁・松葉丁・富吉丁・一色丁・坂本丁・黒江丁・堀江丁・松倉丁・伊澤丁。

松平備前守○温。正澁谷采女正・坂田長左衛門・飯崎新藏・宇都木甚之助・有賀長三郎・近藤長兵衛・大草權六郎・淺井平八郎・堀土佐守・兩屋敷、齋多宮・戸田大和守・秋葉ノ宮・稲垣對馬守・松平伊豆守。熊井丁・中島丁・大島丁・小川丁・藍川丁・蛤丁・八幡丁通リ不レ殘、永代寺八幡社ハ殘ル。三十三間堂不レ殘。入船丁・洲崎丁・同辨天之社ニテ燒留ル。東之方木場迄燒ル。南之方海手迄燒ル。七日戌ノ下刻鎮ル。

一、町數百貳拾六町。

一、寺數貳拾五軒。

一、屋鋪貳百八拾壹軒。

——續談海

鴨の菊大夫長明の方丈記に、行水は絶すしてしかも元の水にあらす、流れによとむうたかたは、且結ひ且消と、移り行世のさま〳〵を書あらわしゝも宜

なり。予生れしより以來廿四五年の間に、重き六七目も有なんと思しき雪降しと、龍の天昇せし由にて、故の郡上大守金森殿の御長屋を引倒したるより外に驚くもあらさりし。寶曆九年の夏の頃より誰仕出せしといふ事もなく、來る年は十年の辰年之、三河萬歲の謠る未錄十年辰年に當れり、此年は災難多かるべし、此難を遁れんには、正月の壽を祝ふにしく事なしと申觸たり。依之あるひは雜煮を祝ひ、蓬萊を飾り、都鄙一統の事とはなしぬ。其年も暮て明る十年の辰年は、將軍家右大臣に任し給ひ、御年もたけさせ給ふとて、大納言家に天下の政務を御讓あつて、其身は二の丸殿に被移給ふ。扨大納言殿新將軍の御祝は二月四日に定りぬ。在江戸の大小名の御家には、此事祝し奉るとて、其夜よりさゝめきあひたり。然るに其夜丑の刻計に赤坂今井谷といふ處のあやしき稗官の家より火出、長坂通り一本松小山あたりへ火移り、次第に風烈くなり、南は品川八つ山邊まで燒出、北は田丁といふ所にて火は止ぬ。大方ならぬ御祝なれはとて、輕き者こそ逃まとへ、御内に仕まつる人々は、衣冠を正しく著なし、火事裝の下部に輿かゝれ、我一にと本丸殿に候し給ふ誠に稀に輕しきさまなり。同七日に御府内の町人に此度の御祝の猿樂見せ給ふ

とて又宵よりさゝめきあひけり。扨此夜いかなる時にやありけん、戌の刻はかりに神田旅籠町にありける五社の神の祠に、一時專明といへる惡黨ありて火を放ちたり。折節辰巳の風烈しく吹て、火急にさかんになり、次第に移り行程に、柳原佐久間町はいふに不及、さしも瓦を並し江戸の町千町計りも一時に焰と燒上り、武藏下總の界と聞へし兩國川を越、深川に飛火して、神社佛閣一宇も不殘一へんの烟となり、洲崎木場抔へ人家なき所までも燒通り、此火は爰に靜まりたり。凡此内にありける小橋の分はいふに及はす、新大橋永代橋も燒落て、空名のみを殘したり。南は日本橋を堺ひ、北東は兩國を限り、明る七日の巳の刻に風と共に火は止ぬ。また此夜增上寺といへる御寺より火出、同時にもへ上り、其火移り行程に、先の日燒止りし田町といふ所まで行、行移るへき家居もなく、北東は大海ゆへ、火は空敷燒止ぬ。八代目將軍家御仁愛の餘り、江戸中の家居土藏造りといふものに造られしより後、凡四五十年以來かゝる大火といふものはなかりしにより、四代豐に侍しか、今度の災にかゝり、人々の財寶はいふに及す、古き文まて數々に失ひし事、實に惜むべきの甚しき也と、物知れる人の大息して宣ひぬるこそ理りなれ。何者か祝しかへ

て斯讀たりけん、

左右よりひの出をあふく右大將實におほやけの御代そめてたき。

——後見草

辰十〇寶曆年。二月六日

一、今暮六時過、芝神明前七軒町ゟ出火、西北風強、神明社無別條、同所社地門前南側ゟ濱松町一丁目ゟ四丁目迄、海手武家方、新網町・中門前町・片門前町通り、金杉橋燒失、金杉一丁目ゟ本芝四丁目迄。

平均凡幅八十間。長十三丁。

同日

一、暮六半時、神田旅籠町ゟ出火、同所仲町・花房町邊、山本町・佐久間町邊、和泉橋燒失。夫ゟ柳原土手內豐島丁・岩井丁邊、松枝町・紺屋町邊、橋本町・馬喰丁邊迄、筋違御門之內、新石町ゟ室町一丁目日本橋角迄、通筋東側之分不レ殘類燒、尤鍋町・鍛冶丁邊片側、本銀町三四丁目、但鐘樓堂燒失。本町三四丁目、大傳馬丁・小傳馬丁邊、牢屋鋪類燒、通油丁・横山町邊不レ殘類燒、本小田原町邊、肴河岸納屋不レ殘、江戶橋あらめ橋・親仁橋、其外小橋不レ殘燒失、堀江町邊、但芝居不レ殘類燒、高砂町・田所丁・橋丁・富澤丁邊、但此邊小橋不レ殘燒失、村松丁邊、兩國米澤丁邊、但兩國橋ハ別條無レ之、新大橋燒落、大川端邊、濱丁・蠣がら町邊、武家方不レ殘類燒、小網丁邊、南茅場丁、但山王御旅所藥師堂幷天神社別條無レ之、靈岸橋燒失、箱崎丁邊、武家屋鋪共類燒、永久橋・崩橋燒失、南北新堀邊、湊橋燒失、豐海橋別條無レ之、飛火にて深川に火移。

深川元町・海邊大工町邊、新地靈雲院不レ殘類燒、清住丁邊、本誓寺不レ殘類燒、雲光院・法源寺不レ殘類燒、靈岸寺本堂方丈別條無レ之、地中過半類燒、其外寺町寺方不レ殘類燒、但八幡宮別條無レ之、三十三間堂燒失、洲先海手邊迄、但辨天ハ別條無レ之、其外橋々寺々數多之事にていふ。

右旅籠丁ゟ靈岸橋迄之分

平均幅九町。長二十五丁。

深川之方

平均幅七丁。長二十一丁。

——町年寄手控

二月十日乙酉〇寶曆十年。天晴。傳聞去六日江戶柴又大火云々、是又大久保屋鋪近邊之。六日類燒倍ニ四日ニ云々。

覇都時代ノ火災

二月十一日丙戌天晴。今日嚴閣馳ニ飛札一奉レ訪ニ江府伯母之安否一給依ニ此間兩度火事一之。

二月六日〇寶曆十年。申刻芝增上寺前より出火にて、十五六丁燒ル。

同日酉刻、神田旅籠丁ゟ出火にて石町・本町・大傳馬丁・ふきや町・さかい町芝居殘らず、深川まで燒、翌七日八ツ時火留る。江戸近年之大火事之。

——壽福年代記綱目編年史料收。

一、同〇寶曆。十辰年、神田旅籠町より出火、是を明石屋火事といふ。廣小路ゟ入西側角より八軒めの所火元也。深川洲崎にて燒止ル。此節米藏・新川酒問屋靈雲院も類燒、仙臺の藏屋敷ハ殘る。是を中比の大火事と云。

——曳尾庵隨筆

北叟遺言ハ、此時ノ災域ヲ「神明前ゟ海際迄、長十三丁。北側三十五町、南側四十二町。幅二丁。神田旅籠町より深川洲崎迄十町程、長三十五丁三十五間。」トシ、歷代炎上鑑ハ、其損害高ヲ擧ケテ「町數四百六十丁、寺社八十ヶ所、大橋十一橋、小橋四十五橋總〆百四橋也。米三萬七百俵、酒八萬四千樽、油四萬七千樽、醬油二萬七千樽。右問屋書上也。中買以下、其數知らず。」トス。尙災害ノ狀況ハ、見聞雜錄・歷代炎上鑑ニ詳叙スト雖、今抄セス。年代炎上鑑・武江年表・續日本王代一覽・泰平年表其他、亦皆此炎ニ關スル所傳有リ。

〔參考〕

一、二月七日〇寶曆十年。公家衆御馳走御祝儀之御能可レ有レ之之被仰出レ候處、昨夜ゟ大火、殊ニ土御門三位旅宿石丁三丁目長崎屋源右衞門類火、其上御能役者も類火ニ逢申レ候者不レ罷出一芝居拜見之町人も漸く二三十人計り、幷御臺所之人足等も不足レ候故、俄ニ御能御延引被ニ仰出一レ候。

火事ニ付落書

燒家を拾に來たか土御門、大屋〳〵はほのふ見物。

寶曆と聞さへ腹が辰の年、燒て見しみをみろく十年。

是は去冬よりはやり事、むろく十年といふ事（〇以下略）

——續談海辰（〇寶曆十年。）五月朔日

奈良屋ニて日本橋邊ゟ京橋邊神田兩國邊町々名主ニ申渡通旅籠丁大丸屋と申吳服屋、此度類燒ニレ候處、土藏相殘、殊之外棟高ヲ目立レを。依田和泉守樣御通掛け御覽被レ成、御尋□□□□見分被ニ仰付一則見分有レ之レ候處、三階造りニる、右三階造りヲ申ハ、古來御停止之事ニレ、夫ニ付外町々ニも。土藏幷常之建家ニも三階造り有レ之レハヽ、間數其外共ニ書出レ樣被ニ申渡一レ候事。

——町年寄手控

覇都時代ノ火災